

青森県埋蔵文化財調査報告書 第452集

水上遺跡Ⅱ

－津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2008年3月

青森県教育委員会



空中写真1 水上遺跡と美山湖 南から



空中写真2 水上遺跡、湯ノ沢橋・砂子瀬方面を望む 東から



空中写真3 遺跡全景



空中写真4 道路跡とその周辺

序

マタギの里である西目屋村は、世界自然遺産である白神山地の玄関口です。西目屋村には現在まで20数カ所の遺跡が確認されていますが、目屋ダムの人造湖である美山湖周辺には縄文時代の遺跡が集中しています。

青森県埋蔵文化財調査センターは、津軽ダム建設事業に伴い、平成16年度から平成18年度にかけて、この美山湖に面する水上遺跡の発掘調査を実施しました。

この調査によって、水上遺跡が縄文時代中期及び縄文時代後期後葉～晩期初頭の集落跡であることが分かりました。

本報告書は、このうち平成17・18年度の調査成果についてまとめたものですが、先に刊行している平成16年度の調査成果とあわせて高覧くだされば幸いです。

この調査報告書が今後、青森県の文化財の保護と研究に役立つことができれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導、御協力いただきました多くの方々に対しまして深く感謝申し上げます。

平成20年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 末永五郎

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが津軽ダム建設事業に伴い、平成17・18年度に調査を実施した西目屋村水上遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成16年度の調査成果については、平成18年に青森県埋蔵文化財調査報告書第409集「川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡」として刊行している。
- 2 水上遺跡の所在地は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上、遺跡番号は25017である。
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。なお、執筆者名は文末に記した。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 6 図中の石器で用いたスクリーントーンは以下のとおりである。



スリ範囲



タケキ・凹み範囲

図版中にあるPは土器、Sは石器/石の略称である。

- 7 石器の石質鑑定は、青森県八戸中央高等学校教諭 佐々木 辰雄氏、青森県立郷土館学芸主査 島口 天氏に依頼した。
- 8 土層等の色調観察には農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版 標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編 2003年版)を使用した。
- 9 遺物の写真撮影は、シルバーフォト(青森市)とスタジオエイト(青森市)に委託した。
- 10 本書に掲載した地図は、国土地理院刊行の5万分の1の地形図「川原平」「弘前」を複写して使用した。
- 11 引用・参考文献についてはほとんど巻末に収めたが、章中に入れた分もある。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 12 発掘調査及び報告書作成における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 13 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏から御教示、御指導を受けた。

(50音順、敬称略)

阿部明彦 金子昭彦 木村淳一 小林圭一 小松隆史 小松有希子 関根達人 八木勝枝
領塚正浩

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査方法と整理方法	3
第4節 調査経過	5
第2章 遺跡の位置と周辺の地形・地質	
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第2節 遺跡の地形・地質	6
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構と出土遺物	
1. 住居跡	10
2. 土坑	40
3. 道路跡	49
4. 石囲垣・配石遺構	52
第2節 遺構外出土遺物	
1. 土器	54
2. 土製品・古銭	55
3. 石器	62
第4章 まとめ	
まとめ	68
引用・参考文献	91
観察表	94
写真図版	102
報告書抄録	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過

平成14年4月に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所存する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、文化財保護課、西目屋村教育委員会の三者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。この協議に基づいて、同年8月中に文化財保護課が再度詳細に現地調査(分布調査)を行い、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、合計768,000㎡に確定し、平成15年度から青森県埋蔵文化財調査センターが担当して発掘調査を実施することとなった。

上記の経過を経て、平成15年度には川原平地区に所存する大川添(1)・(2)遺跡、川原平(1)・(4)遺跡、平成16年度には水上遺跡の発掘調査が実施された。なお、この時の調査では水上遺跡については調査対象面積3,000㎡のうち、1,400㎡が発掘調査された。

平成17年7月に、津軽ダム工事事務所と県文化財保護課との間で協議がなされ、水上遺跡については前年度に引き続いて発掘調査を実施することが確認された。同年8月には、青森県埋蔵文化財調査センターを含めた関係機関で、水上遺跡調査に係わる事前協議が現地で行われ、遺跡内に存在する立木の処理や調査事務所・駐車場等の確保等のほかに、調査が次年度にかかることが確認された。平成17年度の発掘調査は、9月1日から10月20日にかけて実施され576㎡を終了した。

平成18年4月に、津軽ダム工事事務所と県文化財保護課で津軽ダム建設に伴う埋蔵文化財調査に関わる協議が行われたが、水上遺跡については予定通り行うことが確認され、5月9日から発掘調査が進められることとなった。

(成田)



現地説明会風景

第2節 調査要項

1 調査目的

津軽ダム建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する水上遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

(平成17年度) 平成17年9月1日から同年10月20日

(平成18年度) 平成18年5月9日から同年7月28日

3 遺跡及び所在地

水上遺跡(青森県遺跡番号25017)

中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上

4 調査対象面積

(平成17年度) 576平方メートル

(平成18年度) 1,500平方メートル

5 調査委託者

国土交通省津軽ダム工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 藤沼 邦彦 国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学)

調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸主査(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥 隆昭(現 青森県立郷土館長)

次長 三浦 圭介(平成19年4月退職)

総務GL 櫻庭 孝雄

総括主幹 成田 滋彦(現 副参事)

文化財保護主事 岩田 安之

調査補助員 (平成17年度) 工藤 豪・中野 透・小幡 育恵・西本 結美

(平成18年度) 小木 栄理・小幡 育恵・楠見 匡

第3節 調査方法と整理方法

平成17・18年度のグリッドは、平成16年度の調査杭を基準として再設定し、南北方向に算用数字を、東西方向に英語のアルファベットを4mごとに付した。北東隅がグリッド名(例:DN-100)となり、そのグリッドが示す区画は南西方向の4×4mである。ベンチマークは遺構の精査箇所に応じて、適宜移動した。

掘削りは人力で行ったが、出土遺構や遺物に支障のない箇所は、一部重機を用いて掘削した。

遺構精査は、遺構の大きさや種類を考慮に入れて四分法と二分法を併用し、土層観察ベルトを設定して行った。遺構名は、昨年度からの連続番号を発見順に付していった。

土層の名称は基本層序については上位から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層色の記録には「新版標準土色帖」を用いた。遺構実測図の作成は原則として1/20で行い、必要に応じて縮尺を変えた。

遺物の取り上げは、遺構及びグリッドごとに層位的に取り上げ、必要に応じて微細図を作成したり、位置と標高を記録して取り上げた。なお、遺構内出土の遺物で層位不明の遺物は覆土で取り上げた。

写真撮影は、35mmのモノクローム、カラーリバーサル各フィルムを使用し、デジタルカメラを併用した。

整理事業は発掘調査を終了後、当センターにて行った。土器・石器は水洗い後、注記を行い、土器は接合・復元後、選別し、実測・拓本・トレースを行い、石器は選別後、実測・トレースを行った。剥片石器・礫石器30点は平成17年度にアイシン精機株式会社に実測委託を行った。

(岩田)



尾太山を見る(『外浜奇勝』より)

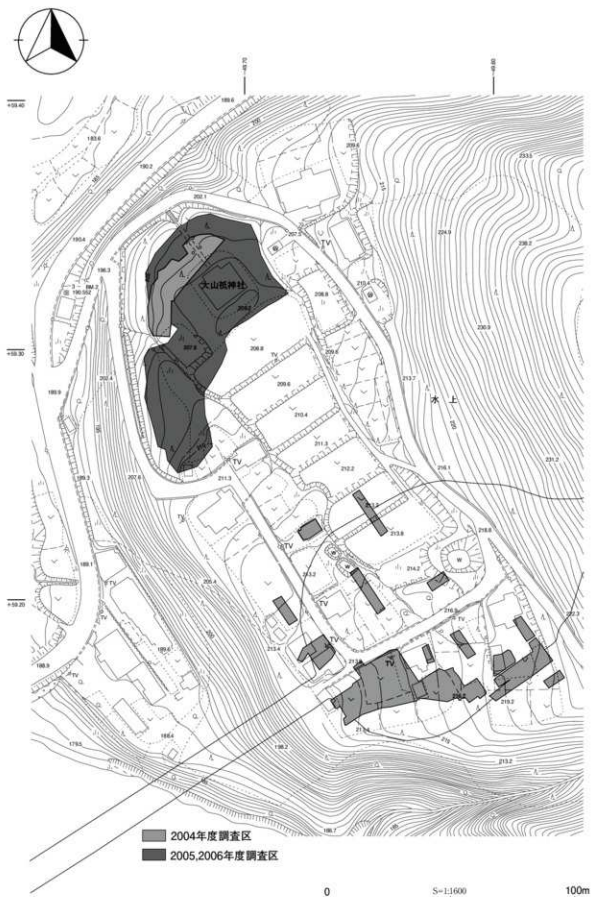


图1 调查对象区域图

第4節 調査経過

(平成17年度)

- 9月1日 調査器材を搬入し、草刈りなど調査区域周辺的环境整備を行う。本調査区は近年まで大山祇神社として使用されており、区画のための盛土や礎石が肉眼で確認できた。
- 9月2日 昨年打設し、基準とした杭から本年度調査区のグリッドを設定し、杭を打設する。
- 9月6日 昨年度のベンチマークを調査区域内に数か所移動した。
- 9月 基本層序を確認するために調査区域内全体をカバーするように十字にトレンチを設定、掘削を行い、層序、遺構の密度、遺物の出土状況を確認する。遺構が確認された箇所は随時トレンチを拡大していく方法で調査を行った。
- 9月26日 調査区北部で石囲炉が確認された。
- 10月6日 道路状遺構が確認された。
- 10月17日 空中写真撮影。
- 10月20日 来年度調査のために確認した遺構は砂を入れて埋め戻した。現場整備を行い、調査器材を撤収し、今年度の調査を終了した。

(平成18年度)

- 5月9日 調査器材を搬入し、昨年度、遺構を埋め戻した砂を除去し、草刈りなど調査区、事務所の環境整備を行う。
- 5月11日 第17号住居跡に伴う石囲炉が確認された。
- 6月7日 朝から昼にかけて現場にサル群れ(十数匹)が現れた。
- 7月9日 現地説明会を行う。
- 7月9日～7月30日 西日屋村砂川学習館において「特別展 白神山地の縄文時代」を開催する。当センターで調査を行った川原平遺跡、水上遺跡の写真パネル・遺物などを展示した。特別展に伴い、7月17・18日当センター職員(成田・岩田)によるギャラリートークも行われた。
- 7月25日 空中写真撮影。
- 7月28日 調査器材・出土遺物等を搬出し、予定通り調査を終了した。

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

西目屋村には約30ヵ所の遺跡が確認されており、目屋ダムによる人造湖「美山湖」右岸に広がる川原平台地と呼ばれる河岸段丘上に多くの遺跡が集中している。これらの遺跡は現在のところすべてが縄文時代の遺跡として登録されているため、今後の調査によって美山湖周辺地域における縄文時代の遺跡相互の関係が明らかになることが期待される。

本地域における調査の嚆矢は弘前大学教育学部の村越潔氏が、昭和34年11月17・18日の2日間、砂子瀬村元遺跡で行ったものである。この調査の概要は福田友之氏によって報告されている(福田1984)。その報告によると遺構は発見されていないが、縄文時代の土器・石器の出土が報告されている。円筒上層式土器が主体的に出土したことから、砂子瀬村元遺跡を縄文時代中期に属する遺跡としてとらえている。

平成15年度に川原平(1)遺跡外で実施された発掘調査は、今後の調査を効率的に進めるための部分的なものであったが、川原平(1)遺跡で焼土遺構や土坑、川原平(4)遺跡で配石遺構、遺物包含層が確認されており、縄文時代後期から晩期の遺物が多量に出土している。时期的に水上遺跡と重なるため、その関係が注目される。

平成19年度に当センターで調査した砂子瀬遺跡では、縄文時代後期前半に属すると思われる方形に石の配置された屋外配石炬が発見されている(中嶋2007)。石の組み方が、青森市小牧野遺跡と同様であることから注目される遺構である。

平成17年度と今回報告する水上遺跡は縄文時代後期後葉から晩期初頭が主体の集落跡である。津軽ダム建設事業に伴う調査はその広大な調査対象区域のため、地域内におけるそれぞれの遺跡どうしの関係を分析できる利点がある。これまでに実施された調査と今後行われる調査を広い視野でとらえることによって、それぞれの遺跡の意味づけや解釈をより具体的に論ずることが可能になるであろう。

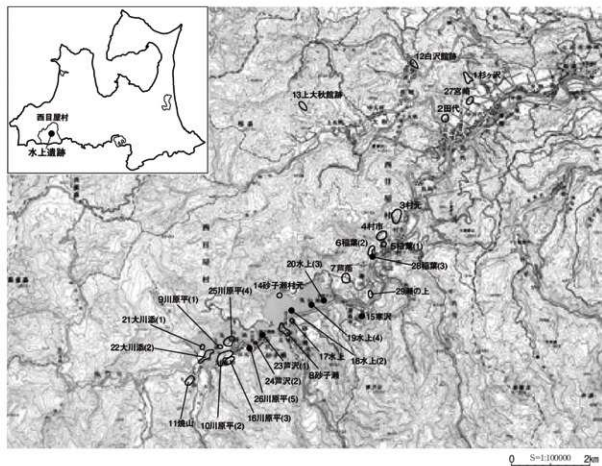
中嶋友文 2007 「砂子瀬遺跡外—縄文時代の配石遺構」『平成19年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』青森県埋蔵文化財調査センター：4頁

福田友之 1984 「西目屋村砂子瀬村元出土の遺物—目屋溪谷の遺跡ノート—」『青森県考古学』第1号 青森県考古学会：34-39頁

第2節 遺跡周辺の地形・地質

本章は島口調査員が「川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡」中の「第2節 遺跡周辺の地形・地質」で水上遺跡周辺の地形・地質を記述されているため、それを要約した。

本遺跡周辺は白神山地と呼ばれる山林地帯であり、白神山地から東方へ岩木川が流下し、本遺跡はその上流に建設された目屋ダムによる人造湖「美山湖」の右岸に広がる川原平台地上に位置する。白神山地は急峻な山容であるが、東方に向かうにつれて緩やかな山容の山地になる。白神山地の地形的特



番号	遺跡名	時代	種別
1	杉ヶ沢遺跡	縄文、平安	散布地、城館
2	田代遺跡	縄文(後)、平安	散布地
3	村元遺跡	平安	散布地
4	村市遺跡	平安	散布地
5	稲葉(1)遺跡	縄文(後)	散布地
6	稲葉(2)遺跡	平安	散布地
7	芦沢遺跡	縄文(後)	散布地
8	砂子瀬遺跡	縄文(後・晩)	散布地
9	川原平(1)遺跡	縄文(後・晩)	散布地
10	川原平(2)遺跡	平安	散布地
11	焼山遺跡	縄文	散布地
12	白沢遺跡	中世	城館
13	上大秋館遺跡	中世	城館
14	砂子瀬村元遺跡	縄文(中)	散布地
15	寒沢遺跡	縄文	散布地

番号	遺跡名	時代	種別
16	川原平(3)遺跡	縄文(中)	散布地
17	水上遺跡	縄文	集落跡
18	水上(2)遺跡	縄文	散布地
19	水上(4)遺跡	縄文	散布地
20	水上(3)遺跡	縄文	散布地
21	大川添(1)遺跡	縄文	散布地
22	大川添(2)遺跡	縄文	散布地
23	芦沢(1)遺跡	縄文	散布地
24	芦沢(2)遺跡	縄文	散布地
25	川原平(4)遺跡	縄文	散布地
26	川原平(5)遺跡	縄文	散布地
27	宮崎遺跡	平安	散布地
28	稲葉(3)遺跡	平安	散布地
29	瀬の上遺跡	縄文(後・晩)	散布地

図2 周辺の遺跡

微は地すべり地形で、更新世のものは大型で白神山地内にはこの時期の古い滑落崖が数多くみられる。

川原平台地は岩木川とその支流に分布する砂礫台地で、標高・現河床からの比高・段丘面の開折状態などから高位面と低位面に区別される。

高位河成段丘堆積物は、美山湖周辺に標高200m前後の平坦面を構成して分布する。主に成層した中～細礫層よりなり、砂層や粘土層を挟む。下位層を不整合に覆う。

低位河成段丘堆積物は、主に成層した中～細礫層よりなり、砂層や粘土層を挟む。下位層を不整合

に覆う。

水上遺跡は、標高が約210mの平坦面上に立地し、この平坦面は低位河成段丘面に相当する。低位河成段丘堆積物を土石流による大礫を含む土砂が覆った場所である。土石流に覆われる前の低位河成段丘堆積物最上部の標高は約207mで薄い黒褐色土となっており、植生のあったことが推測される。

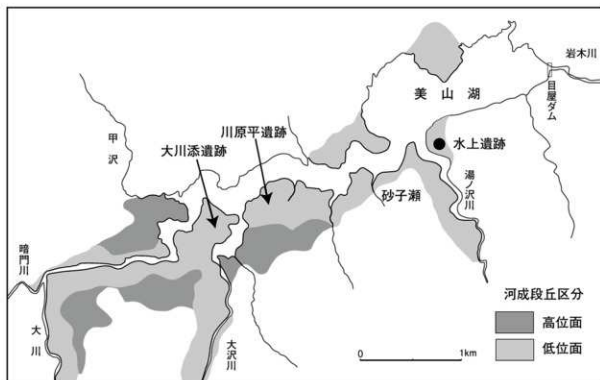


図3 地形区分図(島口2006を一部改変・転載)

今回報告する水上遺跡の基本層序は、平成17年度報告分の第Ⅰ層を2層に細分した。

- 第Ⅰ層 表土。神社敷地として使用されていた時期の地表面である。
- 第Ⅱ層 黒色土。遺跡内全域でみられ、しまりがなく、平成17年度報告分の第Ⅰ層に相当する。
- 第Ⅲ層 黄褐色砂質シルト。しまりがなく、黒色土に漸移する。平成17年度報告分の第Ⅱ層に相当する。
- 第Ⅳ層 土石流堆積物。角が残り、大きさが不均等でさまざまな種類の大礫が含まれる。平成17年度報告分の第Ⅲ層に相当する。
- 第Ⅴ層 暗色土。段丘面が離水した後の旧地形面で、植生があったと考えられる。平成17年度報告分の第Ⅳ層に相当する。
- 第Ⅵ層 低位河成段丘堆積物。円磨度の高い礫が密集するが上位に向かって小さくなり、暗色土に漸移する。平成17年度報告分の第Ⅴ層に相当する。

引用・参考文献

- 島口 天 2006 「第2節 遺跡周辺の地形・地質」『川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第409集：7-9頁

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

1. 住居跡

第1～4号住居跡は2004年度に調査を行い、すでに報告済みである。

第5号住居跡 (図5・7)

〈位置・重複〉DK-145・146グリッドに位置する。重複なし。住居跡西側を現代のゴミ穴によって破壊されている。〈平面形・規模〉南北に長い楕円形を呈する。長径(400)cm・短径(300)cm。〈床面・壁〉炉1北側で硬化面を確認した。また床面レベルは平坦で固かったが、水分が蒸発すると固く締まる土質であるため、もともとの床面が固く締まっていたのかは不明である。炉の面と同レベルの面を床面とした。壁はほとんど立ち上がらない。〈炉〉住居跡の東より中央で地床炉を確認した。焼土下には一回り大きな土坑が確認された。西端部分でも焼土を確認したため、これも地床炉になる可能性があるが、東近くで石が2個確認されたため、石囲炉であった可能性もある。〈柱穴〉小ピットが楕円形に巡るように配置されている。Pit3やPit16は比較的深く、深さが30～40cmであるが、他のピットは10～20cm程度で浅い。〈付属施設〉住居南東で、3個のピットが並行に検出され、その中央のピット同士が連なった状態で、H状を呈する施設が確認された。形状から出入口施設の可能性がある。〈堆積土〉掘り方に充填するように炭化物混じりの1層、2層が堆積するが、第Ⅲ層と酷似した土であるため、埋土でない可能性もある。〈遺物〉土器はすべて第1層から上の層で出土している。土器の形状はA類とB類があり、A類は狭義の口縁部文様帯に連結の入組文を施文している(1)。2は連結入組文と連続刺突・対のコブを有するものである。床面直上から敲磨器類(9)、覆土から不定形石器(7)が出土している。〈小結〉住居の掘り込みはほとんど確認されず、柱穴と推測されるピットの規模も小さいことから、簡易的な住居構造が推測される。

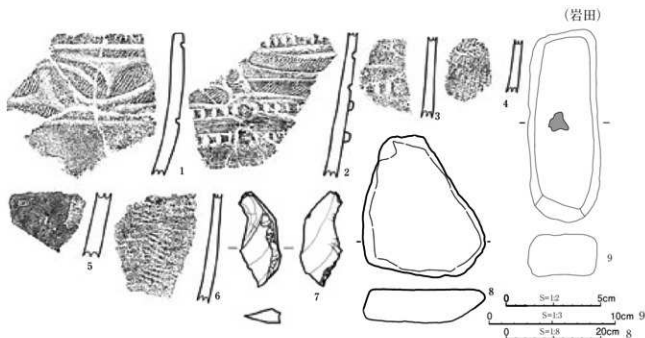


図5 第5号住居跡出土遺物

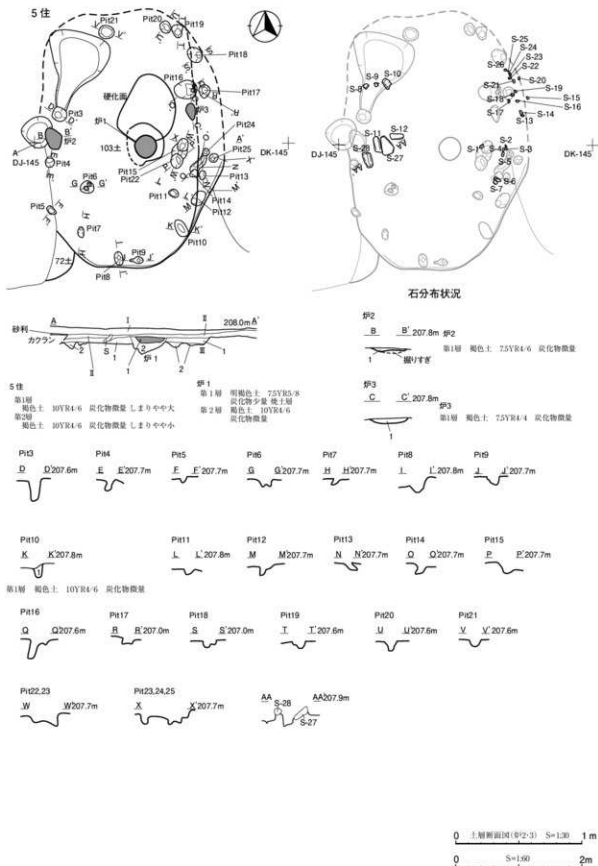


図7 第5号住居跡

第6号住居跡 (図8・9)

〈位置・確認〉本住居跡は、調査区DL・DM-142・143グリッドに位置している。南北セクションのみ残存し、他の周囲は掘り下げたため、壁が消失してしまっている。〈重複〉北側及び北西側で第7・8号住居跡と重複しており、新旧関係は本住居跡が古い。新旧関係を下記にまとめた。

旧 → 新

本住居跡 → 第8号住居跡 → 第7号住居跡

〈平面形・規模〉平面形は東側がやや直線的で、南側が張り出しており、残存部から判断すると楕円形を呈する。規模は、長径(606)cm・短径(402)cmを測る。〈壁・底面〉壁は南壁が床面から垂直に立ち上がるが、他の壁は確認できなかった。床面は全体にほぼ平坦で貼床が施されている。〈堆積土〉3層に区分できた基本層序の第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ層が堆積している。〈炉〉ほぼ中央部に位置し、全体に丸みを有する楕円形を呈する。炉の中心部は先行トレンチによって削られている。長径90cm・短径60cm・深さ15cmを測る。堆積土は4層に区分でき、第3層中に焼土層が確認されている。〈柱穴〉南側には2個のピットを確認した。配置等から柱穴と考えられる。Pit1楕円形30×18-47cm・Pit2円形10×7-8cm。〈遺物〉土器は、貼床面から数片出土したのみである。1～3は鉢形土器であり、2は刺突、3は縄文のみ施文の平口縁である。

石器は床面から石匙が1点(4)、不定形石器(5)が1点、微小剥離のある剥片が6点、敲磨器類が2点(6, 7)、床面直上から微小剥離のある剥片が2点、覆土から母岩が1点出土している。〈小結〉本住居跡の構築年代は、出土土器から判断すると、縄文時代晩期の時期と考えられる。

(成田)

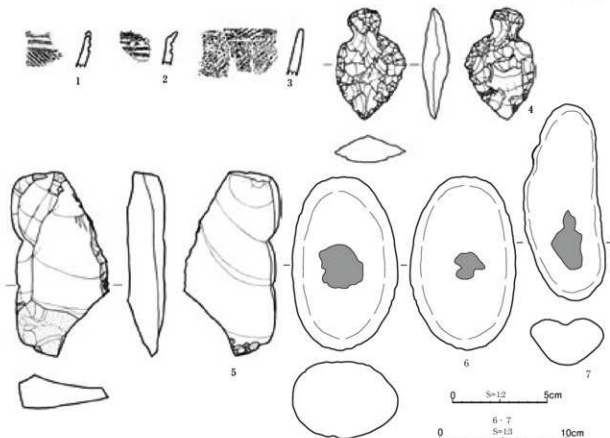


図8 第6号住居跡出土遺物

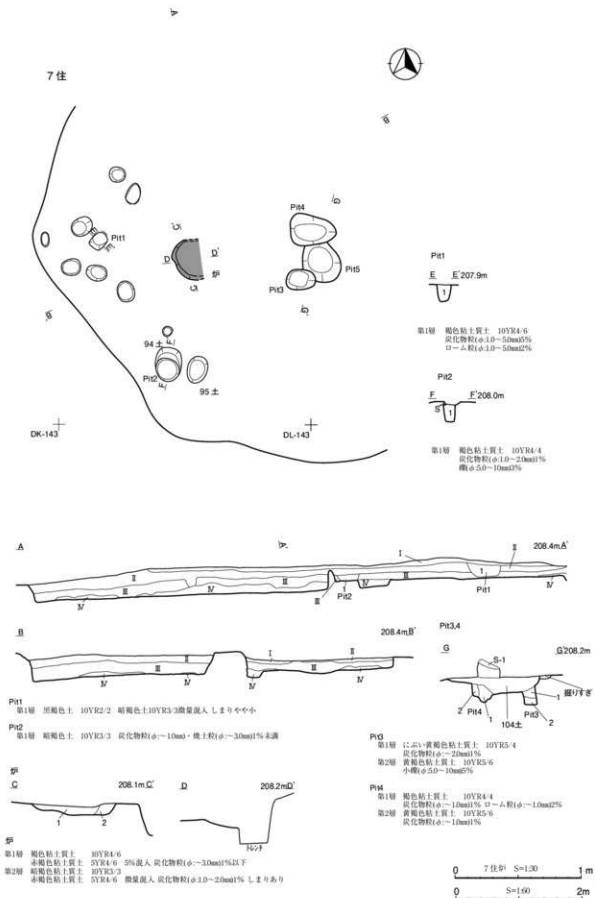


図10 第7号住居跡

第7号住居跡 (図10・11・12)

〈位置・確認〉本住居跡は、DL-141・142グリッドに位置している。第6号住居跡と同様に土層観察用ベルトで住居跡の立ち上がりを確認したので、貼床と炉部分が残存し他は消失している。〈重複〉北側で第6号住居跡、西側で第8号住居跡と重複している。新旧関係を下記にまとめた。

旧 → 新

第6号住居跡→第8号住居跡→本住居跡

〈平面形・規模〉貼床面は、長径(520)cm・短径(200)cmの範囲に分布している。平面形は不明である。〈壁・床面〉壁は南壁が床面からほぼ垂直に立ち上がり、他の壁は確認面から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁31cm・西壁8cm・南壁30cm・北壁28cmを測る。床面は、ほぼ平坦で貼床が施されているが、東側の貼床面が軟弱なつくりで、確認することができなかった。〈堆積土〉堆積土は3層に分層してきた。第6号住居跡同様に基本層序の第Ⅰ～Ⅲ層の堆積である。〈炉〉規模が長径70cm・短径40cmを測り、東側は消失している。残存部の形態から円形を呈すると思われる。〈柱穴〉ピットは、炉の西側～南側部分で12個を確認した。Pit1円形22×20-30cm・Pit2円形28×27-58cm・Pit3楕円形50×24-32cm・Pit4楕円形70×52-30cm・Pit5円形30×28-22cm・Pit6楕円形34×23-35cm・Pit7楕円形20×10-28cm・Pit8円形34×30-22cm・Pit9方形32×22-43cm・Pit10円形30×30-17cm・Pit11楕円形32×24-10cm・Pit12円形32×25-14cm。〈付属施設〉検出できなかった。〈遺物〉土器は炉を中心として貼床面と第1層から出土した。1～4は精製土器で波状口縁を呈する。1は頂部が二又状である。波状口縁の垂下部にコブを貼り付けており、横位に連続刺突を施文している。5～16は精製土器で平口縁を呈し、5、10がA類の形状で他はB類の形状である。底部は上げ底を呈する。石器は床面から不定形石器が2点(22)、微小剥離のある剥片が1点、敲磨器類が3点(30、32)、床面直上から石匙が1点(23)、不定形石器が1点(25)、微小剥離のある剥片が1点、敲磨器類が2点(29、34)、覆土から石鏃が1点(21)、石匙が2点(27、28)、不定形石器が1点、微小剥離のある剥片が4点、敲磨器類が2点(31、33)、石皿・台石類が1点、Pit1の覆土から不定形石器が1点(24)出土している。〈小結〉本住居跡の構築年代は、床面直上の出土遺物から判断すると、縄文時代後期末葉と判断したい。

(成田)

第8号住居跡 (図9・13・14)

〈位置・確認〉本住居跡は、DK-DL-143・144グリッドに位置している。第Ⅰ層を除去後に石囲炉の礎を検出し、住居跡と確認した。〈重複〉本住居跡は北側で第11号住居跡、東側で第6・7号住居跡、西側で第9号住居跡と重複しており、新旧関係を下記にまとめた。

旧 → 新

第6号住居跡→本住居跡→第7号住居跡

第11号住居跡 第9号住居跡

〈平面形・規模〉残存部から推定すると、全体に丸みを有する円形である。規模は長径(608)cm・短径(482)cmを測る。〈壁・床面〉石囲炉の礎を検出した時点で、周囲を掘り下げてしまったため壁は不明である。床面は、ほぼ平坦で炉の周囲は堅い。〈堆積土〉堆積土は不明である。〈炉〉住居跡の北壁寄りに位置し、北側部分のみに角張った5個の礎を用いて構築している。一部抜き取り痕の痕跡も検出しているが、本来はコの字状の石囲炉と考えられる。規模は長径83cm・短径72cmを測る。堆積土は4層に区分でき、

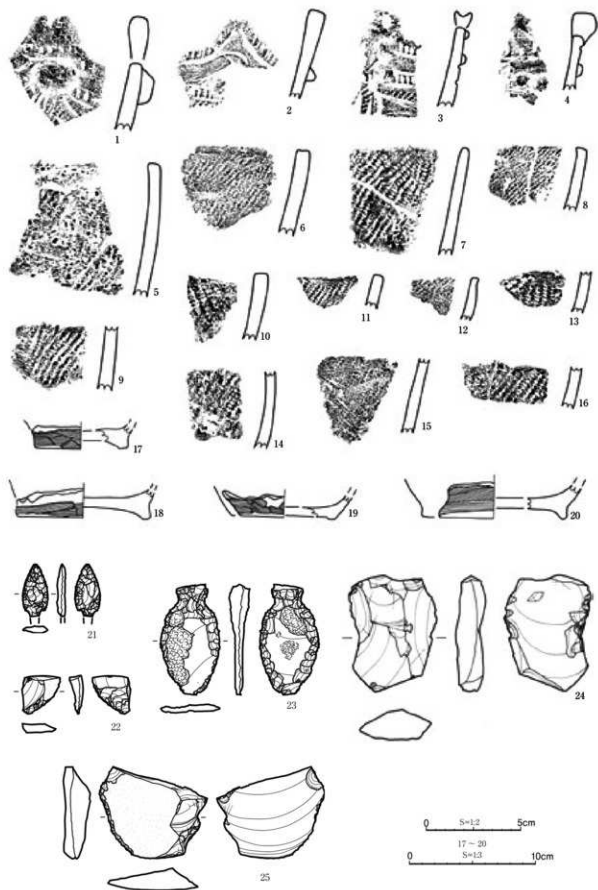


图11 第7号住居跡出土遺物(1)

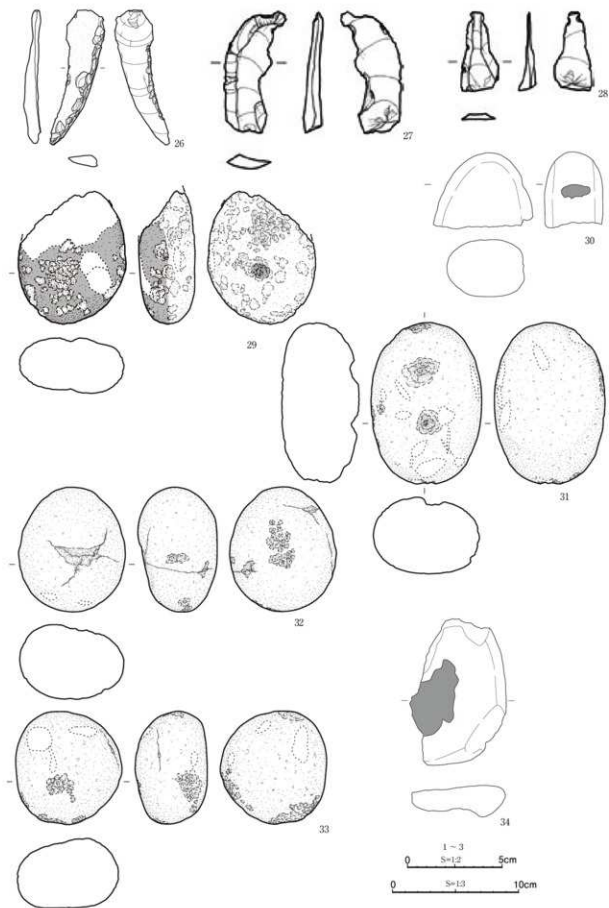


图12 第7号住居跡出土遺物(2)

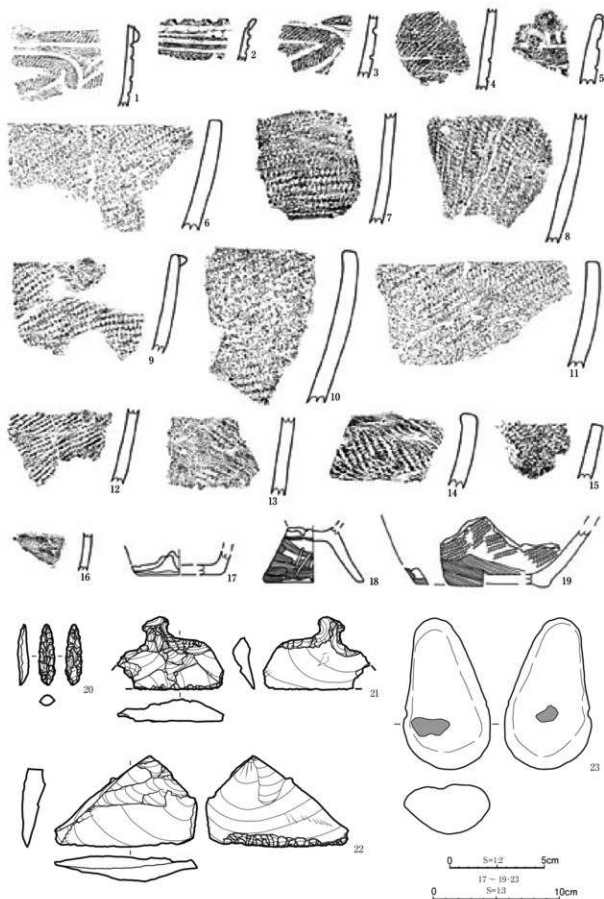


图13 第8号住居跡出土遺物(1)



図14 第8号住居跡出土遺物(2)

全体に多くの焼土粒を含んでいる。〈柱穴〉ピットは、北側から西側にかけて、9個のピットを配置しており、配置等から壁柱穴と考えられる。Pit1楕円形82×50-60cm・Pit2円形54×52-43cm・Pit3円形62×60-41cm・Pit4楕円形12×8-5cm・Pit5円形8×8-14cm・Pit6楕円形53×38-29cm・Pit7楕円形38×22-21cm・Pit8円形20×8-20cm・Pit9円形28×19-19cm。〈付属施設〉検出しなかった。〈遺物〉土器は貼床面から出土した。1、3は連続入組文、2は横位の沈線と連続刺突の鉢形である。5は連続刺突を施文している。6～19は粗製土器であり、A類の形状を呈するものが多い。9が波状口縁の他は、平口縁を呈する。スス状炭化物の付着が多い。石器は床面から石鏃が1点(20)、不定形石器が1点(22)、敲磨器類が1点(23)、床面直上から石匙が1点(21)、炬1に使用された石皿・台石類が1点

(24)出土した。〈小結〉床面から出土した土器から判断すると、縄文時代後期末葉の時期と考えられる。

第9号住居跡 (図15・16)

〈位置・確認〉本住居跡は、DJ-143・144グリッドに位置している。遺構を精査中に炬と貼床を検出した。〈重複〉北側で第11号住居跡・東側で第8号住居跡と重複しており、西側は攪乱されている。新田関係は下記にまとめた。

旧 → 新

第11号住居跡→第8号住居跡→第9号住居跡

〈平面形・規模〉南・北側が直線的で東側が丸みを有する。残存部から判断すると方形を呈すると思われる。規模は長径(320)cm・短径(270)cmを測る。〈壁・床面〉床面まで全体的に下げてしまったため、壁は確認できなかった。床面は全体にはほぼ平坦であり、炬の周囲が啞いつくりである。〈堆積土〉不明である。〈炬〉炬は中央部と西側に2個検出した。炬1は楕円形で長径68cmで短径42cm・深さ13cmの地床炬である。堆積土は2層に分層できた。炬2は西側を攪乱で消失しており、残存部から方形を呈すると思われる。長径(34)cm・短径(28)cm・深さ12cmの地床炬である。〈柱穴〉ピットは20個検出された。壁寄りに連続して位置しており、配置等から壁柱穴と考えられる。Pit1円形48×40-20cm・Pit2不整形62×24-8cm・Pit3円形(42)×40-12cm・Pit4円形(38)×32-17cm・Pit5楕円形15×12-8cm・Pit6円形9×8-7cm・Pit7円形12×8-8cm・Pit8円形10×8-31cm・Pit9円形6×5-5cm・Pit10円形18×14-25cm・Pit11円形22×13-31cm・Pit12楕円形24×22-18cm・Pit13円形8×7-32cm・Pit14円形14×13-46cm・Pit15楕円形20×12-36cm。〈付属施設〉検出しなかった。〈遺物〉土器は住居跡から数片出土したのみである。3は波状口縁を呈し垂下部に入組文を施文し、1は平口縁で内傾したA類の形状の粗製土器である。出土土器から判断すれば、縄文時代後期末葉に位置づけられるものである。石器は出土しなかった。

(成田)

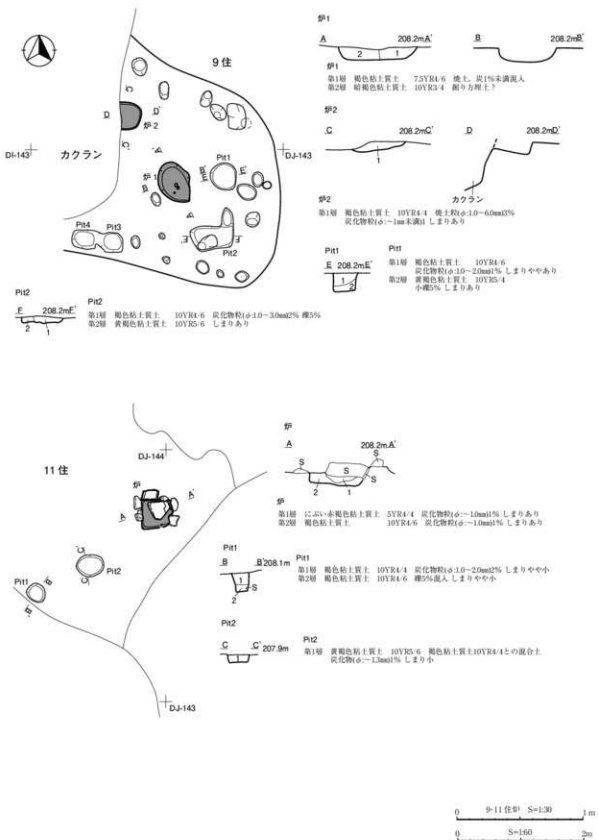


図15 第9・11号竪穴住居跡



図16 第9号住居跡出土遺物

第10号住居跡 (図18・19)

新田2時期存在すると考えられる。新しい方を第10a号住居跡、古い方を第10b号住居跡とした。堆積状況では、10bが確認面から10cm程度掘り込んだ深さを床面にしており、その掘り込みを第Ⅲ層の類似土で埋めて10aがつくられる状況が想定される。炬は地床炬が10aに伴う床面で確認された。10bに伴う炬は確認できなかった。柱穴はそれぞれどちらの時期の住居跡に伴うのか不明であるが、柱穴の種類としては深く規模の大きい主柱穴と推測されるピットと小ピットに分けられる。〈位置・重複〉DI-142・143、DJ-142・143グリッドに位置する。第9号住居跡と重複し、9号が新しい。〈平面形・規模〉平面形はほぼ円形である。長径510cm・短径450cm。〈床面・壁〉10aが第Ⅲ層類似土、10bが第Ⅳ層を床面としている。地山の土自体が乾くと固く締まるため、硬化面や貼床の存在は不明である。〈炬〉炬は10aに伴う地床炬が確認された。〈柱穴〉Pit22、Pit25、Pit13、Pit18、Pit21は規模の大きさから主柱穴と推測される。長方形の一辺を少しつまみ出したような五角形状の配置である。他は中規模の柱穴と小ピットで構成される。〈堆積土〉10bを埋めて10aの床面としているが、埋めている土は第Ⅲ層類似土で炭化物が混じる。〈遺物〉土器は住居跡範囲の第Ⅱ層中から多く出土した。4は円筒上層c式の深鉢形である。1は口頸部が内反する鉢形であり、三叉状入組文を施文、8・11も同様の文様を施文している。粗製土器は平口縁で、形状はB類で縄文のみ施文の土器が多い。Pit7内から敲磨器類が出土した(27)。2は台付鉢形土器である。〈小結〉本遺跡内で主柱穴配置が最も規則的であった住居である。堆積土や柱穴の状況などからおそらく2時期に分けられるが、柱穴はどちらに属するものかは明確ではない。確実に住居跡に伴う遺物がいないため、遺物から所属年代の推定はできない。

(岩田)

第11号住居跡 (図15・17)

〈位置・確認〉本住居跡は、DJ-144・145グリッドに位置している。遺構を精査中に貼床と石皿炬を検出した。〈重複〉北側で第70号土抗・後世の攪乱、南側で第8・9号住居跡と重複しており、新旧関係は下記にまとめた。

旧 → 新

本住居跡 → 第8号住居跡 → 第9号住居跡

第70号土抗

〈平面形・規模〉平面形は不明である。規模は貼床の残存部が長径(400)cm・短径(350)cmを測る。

〈壁・床面〉壁は床面まで全体的に下げてしまったため、確認できなかった。床面は南側から北側にかけて、やや傾斜している。〈堆積土〉不明である。〈炉〉7個の礫を用いて周囲に配置したコの字状の石組炉であり、第8号住居跡の炉と類似している。炉内に扁平な礫が出土したが、炉の廃棄後におかれたものである。炉内は2層に分層できたが、被熱面が弱く、短期に利用された炉と考えられる。規模は長径70cm・短径60cmを測る。〈柱穴〉炉の西側から2基検出した。Pit1円形32×30-25cm・Pit2円形38×32-13cm。〈付属施設〉検出しなかった。〈遺物〉土器は床面から散在した状態で出土した。1は壺形で口頭部に帯状の縄文を施し、2～5は縄文のみ施した粗製の深鉢形である。

石器は床面から微小剥離のある剥片が1点、敲磨器類が1点(6)出土している。〈小結〉床面から出土した遺物から判断すると、縄文時代後期末葉の時期と考えられる。

(成田)



図17 第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡

欠番。

第13号住居跡 (図20・21)

〈位置・確認〉本住居跡は、DK-148グリッドに位置している。遺構を精査中に暗褐色の落ち込みを確認した。〈重複〉北側で第14号住居跡、南側で第102号土抗・道跡と重複している。新旧関係を下記にまとめた。

旧 → 新

第14号住居跡 → 本住居跡 → 第102号土抗

道路跡

〈平面形・規模〉南側で住居跡のコーナー部分を検出しており、残存部から方形を呈すると思われる。規模は長径(312)cm・短径(200)cmを測る。〈壁・床面〉東・南壁は確認面から傾斜している。他の壁は不明。壁高は東壁5cm・南壁3cmで浅い。床面はほぼ平坦である。〈堆積土〉堆積土は2層に区分できた。

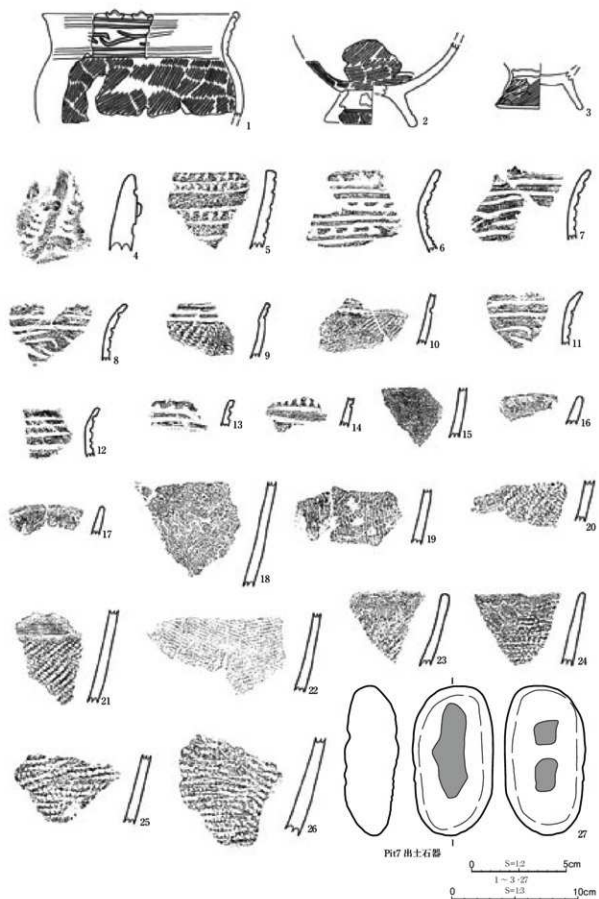


图19 第10号住居跡出土遺物

〈灰・柱穴・付属施設〉検出できなかった。〈遺物〉遺物は住居跡全面から出土した。土器は床面・床面直上からの出土である。4は波状口縁で垂下部に瘤付粘土粒を貼りつけている。口唇部寄りに二条の連続刺突を施文している。1は口唇部の断面が丸みを有しており、他は口唇部上面が平坦なつくりの粗製土器である。5は鉢形の無文土器で焼成は良好である。粗製土器はスス状炭化物の付着例が多い。土器は第1層と床面から出土している。石器は覆土から微小剥離のある剥片が1点出土している。〈小結〉出土遺物は少ないが、縄文時代後期末葉の時期のものであり、住居跡もほぼ同時期に構築したものと考えられる。

(成田)

第14号住居跡 (図20・22)

〈位置・確認〉本住居跡は、DK・DL-148グリッドに位置している。第13号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。〈重複〉南側で第13号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。北側は道路工事中に消滅したものである。〈平面形・規模〉北側部分は消滅しているが、南側残存部から推定すると、ほぼ円形を呈すると思われる。規模は長径(350)cm・短径(80)cmを測る。〈壁・床面〉壁は確認面から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁5cm・西壁8cm・南壁8cm・北壁は不明である。床面はやや北側に傾斜している。〈堆積土〉堆積土は3層に区分できた。〈灰・柱穴・付属施設〉検出できなかった。〈遺物〉遺物は堆積土中から多く出土した。1は二又状突起を有し、突起部に弧状の沈線を施文している。5は平口縁の粗製深鉢形である。石器は覆土から、微小剥離のある剥片が2点出土している。〈小結〉出土遺物は、縄文時代晩期と思われる。

(成田)

第15号住居跡 (図20・23)

〈位置・確認〉本住居跡はDJ-148グリッドに位置している。第1層を除去後に暗褐色土の落ち込みを確認した。〈重複〉南側で道路跡と重複している。新旧関係は道路跡より新しい。〈平面形・規模〉平面形は西側及び東側が張り出し、南・北側が丸みを呈する円形である。規模は長径340cm・短径230cmを測る。〈壁・床面〉壁は確認面から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁26cm・西壁29cm・南壁18cm・北壁15cmを測る。床面は断面形が鍋底状を呈し、軟弱なつくりである。〈堆積土〉堆積土は4層に分層できた。〈灰〉検出しなかった。〈柱穴〉北側に1個、楕円形のピットを検出した。長径62cm・短径51cm・深さ19cmを測る。〈付属施設〉西側に楕円形の張り出し部を検出した。規模は長径100cm・短径73cmを測り、用途に関しては不明である。〈遺物〉土器は、1が横位沈線と連続刺突を施文しており、3は縄文のみを施文した粗製の深鉢形である。スス状炭化物の付着が多くみられる。石器は床面直上から磨石器類(4)、覆土から微小剥離のある剥片がそれぞれ1点ずつ出土している。〈小結〉住居跡内から出土した土器は、縄文時代後期末葉である。

(成田)

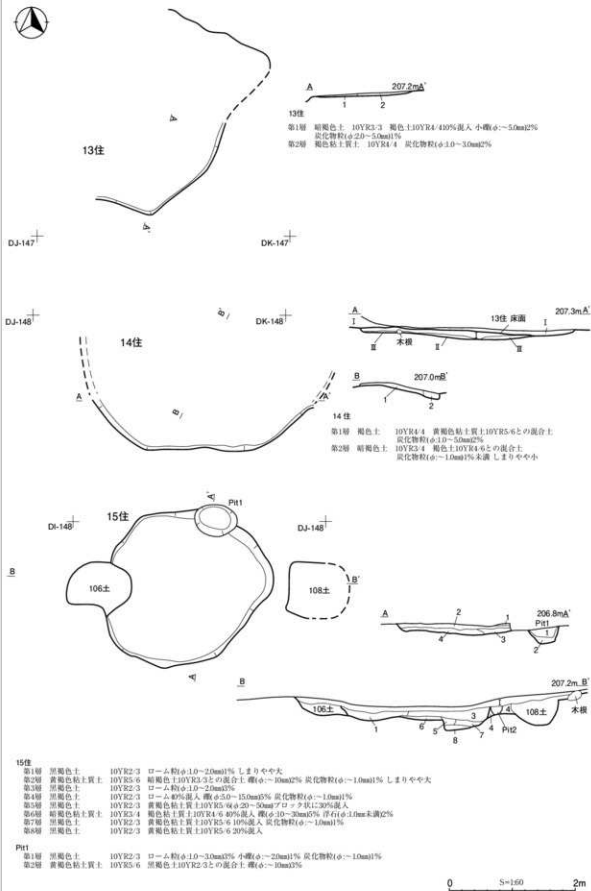


図20 第13・14・15号住居跡

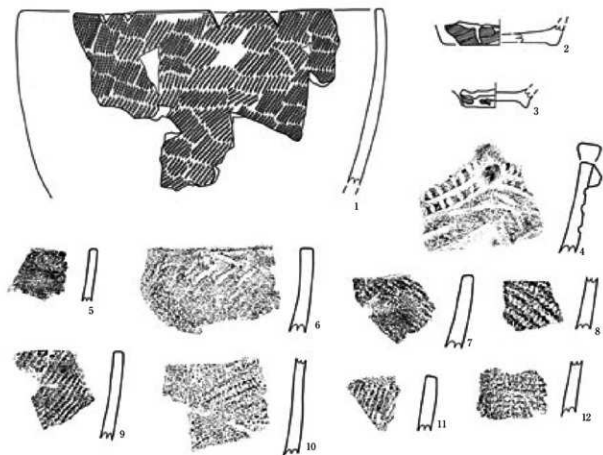


图21 第13号住居跡出土遺物

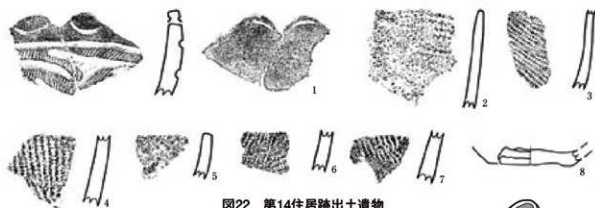


图22 第14住居跡出土遺物



图23 第15号住居跡出土遺物

0 S-12 5cm

0 S-13 10cm 図21-1-3、図22-8、図23-4

第16号住居跡

欠番。

第17号住居跡 (図24・25)

〈位置・重複〉DG-141・142、DH-141・142グリッドに位置する。重複はないが、住居跡の西半を攪乱によって欠損している。〈平面形・規模〉堆積土の違いから住居跡の掘り込みを明確にとらえることができなかったことと攪乱によって半分程度欠損しているため明確な平面形は不明であるが、おそらく円形あるいは楕円形プランを想定できる。長径(640)cm・短径(530)cm。〈床面・壁〉貼床や硬化面は確認されなかったが、石囲炉が発見されたため、炉の火床面と同レベルを床面としてとらえた。そのレベル上で柱穴の確認も行った。〈炉〉長軸は南西-北東であり、南西部分に最も大きな石を横に設置し、その石の両端から円形に6個程度配置している。石を設置するために掘り込みを設けたはずであるが、その痕跡ははっきりしない。横に設置された大きな石は被熱によって割れた状態で確認された。強く被熱した部分は南西隅で確認され、焼土の範囲も南西側に片寄って確認された。〈柱穴〉深さ40～60cmのピットは5基確認された(Pit1,2,3,4,5)。これらのピットは住居跡の壁際を取り巻くように並んでいる。他には小ピットが多数確認された。〈堆積土〉堆積土は1層で炭化物の混入がみられた。基本層序第Ⅲ層と土質が酷似する。〈遺物〉土器は、床面からはほぼ完形の深鉢形土器(1)が出土した。2～4は縄文時代中期の円筒上層式土器であり、1・6は中期末葉の粗製土器である。Pit 4から敲磨器類(7)、石囲炉に使用された打ち欠きのある石(8)、1層から微小剥離のある剥片が2点、石皿・台石類が1点出土している。住居跡の外側西部分で剥片の集中がみられた。〈小結〉住居跡の大部分が攪乱によって破壊されているため全容は不明であるが、柱穴を住居の輪郭に沿わせて配置している可能性がある。また住居跡近くで石器の剥片が集中してみられたため、石器製作・加工などを近辺で行った可能性がある。(岩田)

第18号住居跡 (図27・28)

〈位置・重複〉DG-144・145、DH-144・145グリッドに位置する。重複はない。北部分を攪乱によって欠損する。〈平面形・規模〉平面形は掘り込みが確認されなかったため不明である。〈床面・壁〉床面・壁は確認されなかった。〈炉〉地床炉と推測される焼土の広がり確認された。炉の南隣で集石が発見されたが人為的なものかどうかは不明である。〈柱穴〉深さ60cm程度の柱穴が2基確認された。主柱穴の可能性はある。他には小ピットが5基確認されている。〈堆積土〉掘り込みが確認されなかったため不明であるが、住居跡の範囲から出土した遺物を覆土としている。〈遺物〉土器は覆土中及びピット内から出土した。1～11は精製土器で、1は波状口縁を呈し、B類の形状で口縁部文様帯に連結入組文と帯縄文を施文している。9～11は横位方向に連続刺突を施文している。12～14は無文土器で、12は壺形の可能性が高い。15～21は縄文のみ施文の土器で、スス状炭化物の付着がみられる。覆土から不定形石器が1点(25)微小剥離のある剥片がPit1の1層から出土した。微小剥離のある剥片が3点住居内と推測される箇所から確認されている。〈小結〉住居跡の掘り込みがもともと存在しないか、あるいは確認されなかったため、その範囲が明確に確定されなかった。地床炉と推測される炉と周辺にピットが確認されたため住居跡とした。(岩田)

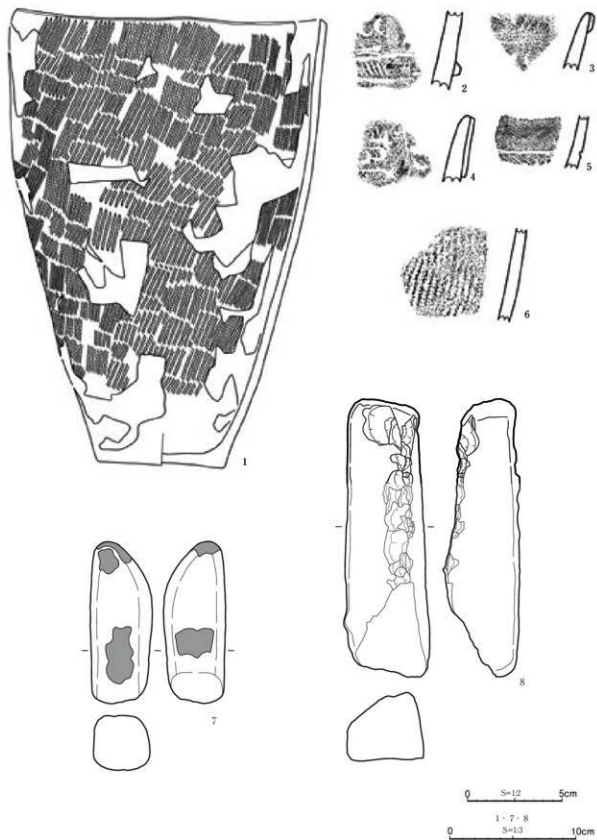


図25 第17号住居跡出土遺物

第19号住居跡 (図26・27)

〈位置・重複〉DH-143、DI-143グリッドに位置する。重複はない。〈平面形・規模〉第22号堅穴住居跡のように小ピットの集まりで発見された。掘り込みが確認されないこと、小ピットの配置が規則的ではないことから、明確な平面形は判断できない。〈床面・壁〉硬化面、貼床、壁は発見されなかった。〈炉〉発見されなかった。〈柱穴〉小ピットのまとまりである。〈堆積土〉掘り込みがないため確認されなかった。〈遺物〉土器は数片のみ出土した。すべて粗製土器の深鉢形である。5は形状B類の平口縁の土器である。床面から不定形石器1点(6)が出土している。〈小結〉小ピットのみ確認であるため、住居跡だとすれば簡易的な小屋程度の建物が想定される。

(岩田)

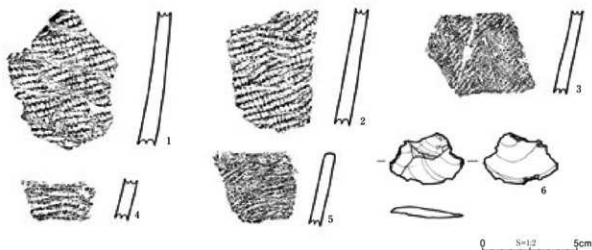


図26 第19号住居跡出土遺物

第20号住居跡 (図29)

〈位置・確認〉本住居跡は、DK・DL-147・148グリッドに位置している。道路跡の精査中に確認した。〈重複〉北側で第14号住居跡、西側で道路跡と重複している。新旧関係はすべて本住居跡が古い。〈平面形・規模〉平面形は不明である。貼床の範囲は長径660cm・短径220cmを測る。〈壁・床面〉壁は不明である。床面は貼床が施され、ほぼ平坦である。〈堆積土〉1層のみの堆積である。〈炉〉炉は2基検出した。炉1は地床炉で、ほぼ円形で長径(70)cm・短径50cm・深さ20cmを測る。炉2は地床炉で炉1の北側に位置し、円形で長径48cm・短径40cm・深さ28cmを測る。〈柱穴〉ピットは4基検出された。炉2の近くに位置している。Pit1円形18×14-22cm・Pit2円形16×12-10cm・Pit3円形28×22-20cm・Pit4円形30×30-22cm。〈付属施設〉検出しなかった。〈遺物〉土器、石器は出土しなかった。〈小結〉住居跡の重複関係から、縄文時代後期末葉と思われる。

(成田)

第21号住居跡

欠番。

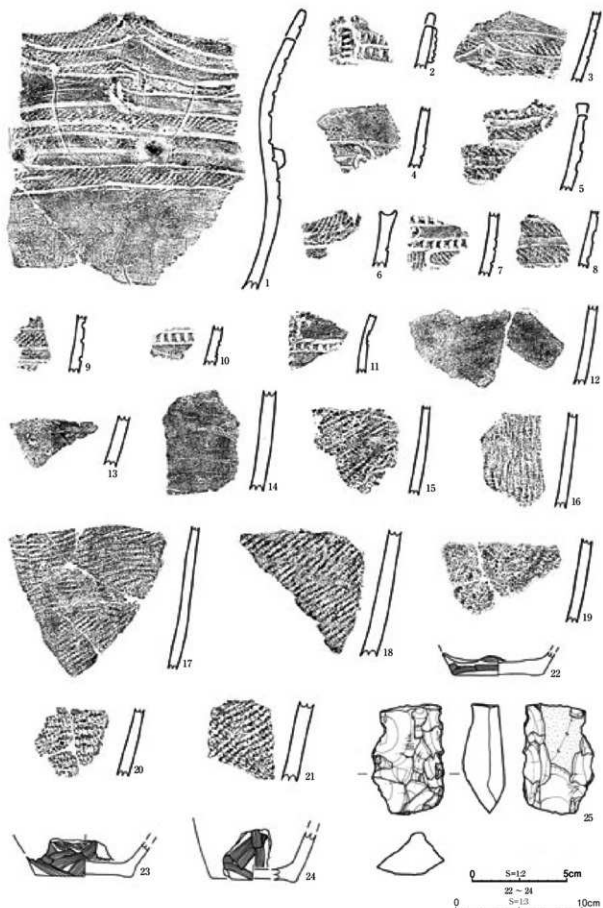


図28 第18号住居跡出土遺物

第22号住居跡 (図29・30)

〈位置・重複〉DH-141・142、DJ-141・142グリッドで確認された。重複はない。

〈平面形・規模〉長軸が南西-北東の楕円形プランを呈すると推測される。南西部では20cm程度の掘り込みが確認されたが、北東部で確認されなかった。長径400cm・短径285cm。

〈床面・壁〉底面は平坦であるが、他の部分と比較して固く締まるなどの特徴は確認されなかった。北東壁の立ち上がりは約60°である。

〈炉〉焼土粒と炭化物の広がり住居跡南西部寄り確認されたため地床炉の可能性はある。

〈柱穴〉小ピットが多数確認された。主柱穴などしっかりした柱の痕跡は確認されなかった。小ピットは住居跡の形態に沿うように楕円形に配置しているようにもみえる。

〈堆積土〉2層に分層された。1層は基本層序第Ⅱ層に類似しており、第Ⅱ層の自然堆積層と推測される。1層は粘土混じりの褐色土である。人為堆積か自然堆積か判断できない。

〈遺物〉2層中から土器がまとまって出土した。1は平口縁で縦位に条痕を施文している。4は平口縁で口縁部文様に三叉状入組文を施文している。縄文時代後期後葉～晩期に属する。

〈小結〉小ピットのみ確認であるため、住居跡だとすれば簡易的な建物が想定される。

(岩田)

第23号住居跡 (図32・33)

〈位置・確認〉本住居跡はDL・DM-143グリッドに位置している。第6号住居跡の精査中に本住居跡を確認した。〈重複〉第6号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。〈平面形・規模〉北側は確認できなかったが、残存部から推定すると円形を呈すると思われる。規模は長径(460)cm・短径(420)cmを測る。〈壁・床面〉壁は確認面から傾斜している。東壁12cm・西壁8cm・南壁8cm・北壁不明である。〈堆積土〉6層に区分できた。全体に炭化物粒を含んでいる。〈炉〉住居跡のほぼ中央部から、炭と焼土を確認したが炉とは断定できなかった。〈柱穴〉ピットは27個検出した。壁寄りにほぼ円形の配置である。Pit1楕円形50×32-32cm・Pit2円形46×34-39cm・Pit3円形43×33-37cm・Pit4楕円形42×32-30cm・Pit5楕円形42×34-42cm・Pit6不整形30×18-10cm・Pit7楕円形23×16-20cm・Pit8方形40×24-16cm・Pit9円形50×24-43cm・Pit10円形42×33-48cm・Pit11円形28×22-47cm・Pit12円形32×24-19cm・Pit13円形32×32-20cm・Pit14円形42×38-16cm・Pit15円形32×32-37cm・Pit16円形48×32-37cm・Pit17円形30×28-49cm・Pit18楕円形34×22-31cm・Pit19楕円形32×29-49cm・Pit20方形28×25-50cm・Pit21楕円50×(30)-34cm・Pit22不整形42×26-39cm・Pit23円形24×22-54cm・Pit24円形20×14-30cm・Pit25円形18×16-39cm・Pit26楕円形58×32-23cm・Pit27円形30×22-27cm。〈付属施設〉検出されなかった。〈遺物〉土器は、第1層中から多く出土した。1～4は小形の壺形土器である。焼成は良好ではないが精製土器である。5は縦位の条痕を施文している深鉢形である。

石器は覆土から微小剥離のある剥片が3点、敲磨器類が4点(14～17)、石皿・台石類が1点出土している。〈小結〉出土土器は、縄文時代後期末葉の時期である。

(成田)



図30 第22号住居跡出土遺物

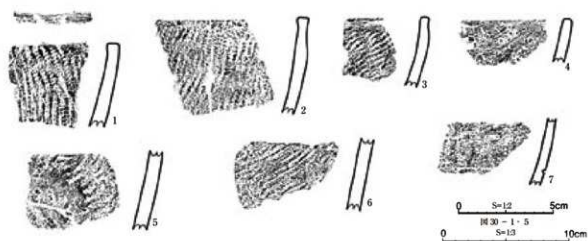


図31 第24号住居跡出土遺物

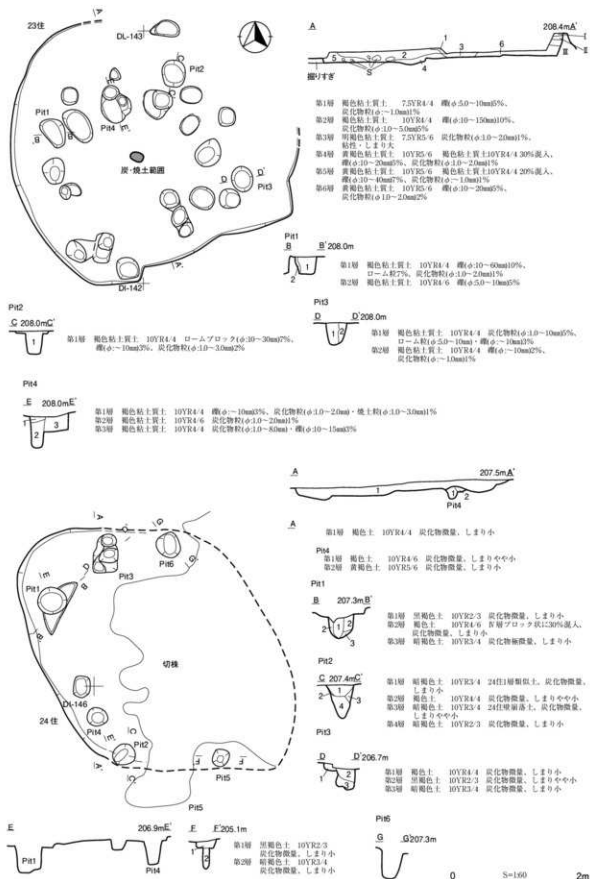


図32 第23-24号住居跡

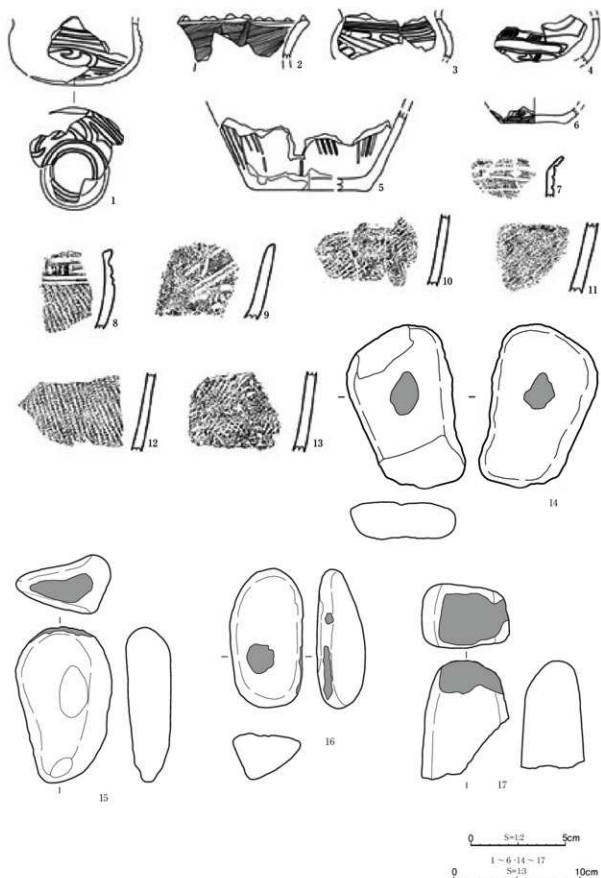


図33 第23号住居跡出土遺物

第24号住居跡 (図32)

〈位置・重複〉DI-146、DI-147、DJ-146、DJ-147グリッドに位置する。重複はないが、東部分大半を木の切株によって壊されている。〈平面形・規模〉掘り込みの範囲と柱穴配置から楕円形プランであると推測される。長径(430)cm・短径(310)cm。〈床面・壁〉貼床や硬化面は確認されなかった。〈炉〉確認されなかった。〈柱穴〉深さ30～50cm程度のビットが6基確認された。Pit1では柱痕が確認されており、その径は約15cmである。Pit5は他に比べてビット下部の径が小さい。〈堆積土〉基本層序の第Ⅲ層の汚れた土が堆積し、炭化物が混じっていた。〈遺物〉縄文時代後期後葉～晩期に属する土器が出土している。1層から微小剥離のある剥片が2点出土している。〈小結〉切株部分の状況が分からないため、あくまで推測であるが、Pit5の柱穴規模が小さいことから六角形の亀甲形を呈する配置になる可能性もある。(岩田)

2. 土坑(図34～40)

今回の調査で土坑は30基検出した。土坑内から出土した遺物は以下に記述し、すべての土坑の記載は表1にまとめた。

土坑内出土遺物(図39・40)

第71号土坑(図39-1～4)

第1・2層中から出土した。すべて粗製の深鉢形土器で、1は平口縁のA類の形状を呈する。スス状炭化物の付着例が多い。

第72号土坑(図39-5～9)

土器はすべて第1層中から出土した。精製土器6・7は、横方向に連続刺突を施文しており、7は円形の粘土紐を貼り付けている。5～7は粗製土器で、5は縄文のみ施文の粗製の深鉢形土器である。

第74号土坑(図39-12)

粗製土器の深鉢形で縄文施文の土器である。

第77号土坑(図39-10・11)

土器は覆土中から出土した。10は連結の入組文を施文しており、スス状炭化物の付着がみられる。

第78号土坑(図39-13)

石器は半円状扁平打製石器が1点、1層から出土している。水上遺跡での半円状扁平打製石器の出土は、この1点のみである。

第87号土坑(図39-15)

磨製石斧が1点、3層から出土している。

第96号土坑(図39-14)

深鉢形土器の口縁部破片であり、粘土紐と連続捺糸圧痕を施文している。時期は円筒上層b式と思われる。

第102号土坑(図40-16～18)

16は粗製の鉢形、18は粗製の深鉢形、17は粗製の壺形と考えられる。

第103号土坑(図40-19)

平口縁の粗製の深鉢形である。

第104号土坑(図40-20・21)

平口縁で形状は口唇部寄りが内傾するA類で、スス状炭化物の付着がみられる。

第108号土坑(図40-22~24)

粗製の深鉢が出土している。石器は、石錐が2層から出土している。つまみ部分はなく棒状である。また、不定形石器が1点、微小剥離のある剥片が1点覆土から出土している。

第109号土坑(図40-25~29)

精製土器は25・27で、連結入組文を施文している。時期は後期末葉と思われる。26・28は縄文のみ施文の粗製土器である。石器は不定形石器(29)が1点1層から出土している。微小剥離のある剥片が2点1層から出土している。

第112号土坑(図40-30~32)

30・31は同一個体の可能性が高い土器であり、後期末葉の時期と思われる。32は、破片の断面に漆を塗布しているものである。

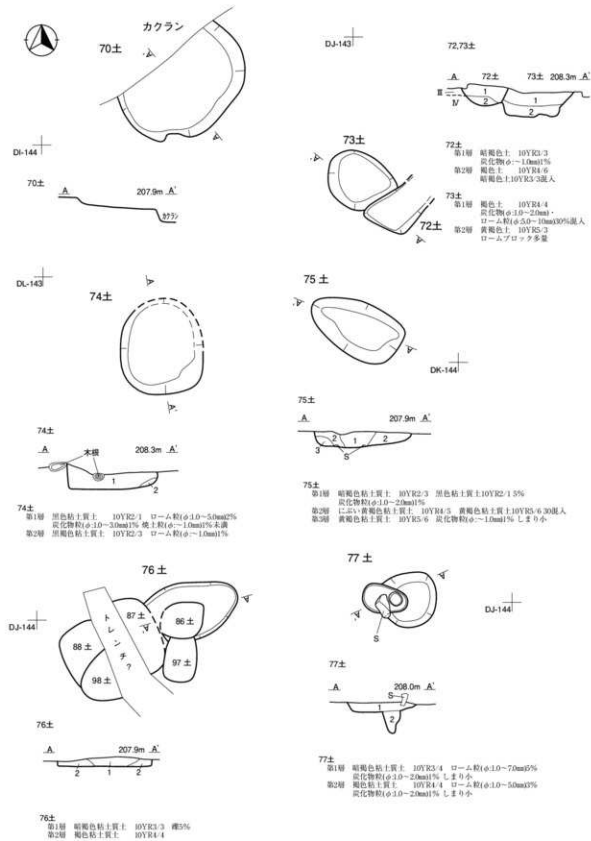
第113号土坑(図40-33~35)

33は三又状突起を有し、狭義の口縁部文様帯に三又状入組文を施文しているものである。時期は晩期と思われる。35は鉢形土器の底部である。

土坑は30基検出した。土坑は表にしてまとめる。

遺構名	旧番号	出土位置	開口部(cm)	底面(cm)	深さ(cm)	備考
70土	SK-70	DJ-145	122×(95)	118×(72)	33	北側を複乱穴と重複
72土	SK-72	DJ-143-DK-143	64×60	52×40	20	
73土	SK-73	DK-143	(48)×(44)	(44)×44	28	
74土	SK-74	DM-143	(90)×84	(82)×70	13	北側木根
75土	SK-75	DK-145	102×50	83×32	13	
76土	SK-76	DK-144・145	(90)×60	(82)×52	7	SK-88・98より古い
77土	SK-77	DJ-144・145	60×58	48×38	10	ピットに切られている
78土	SK-78	DK-145	88×67	72×34	7	半円状扁平打製石器が出土
81土	SK-81	DK-145	(70)×42	(60)×30	12	82土重複新旧不明
82土	SK-82	DK・DL-145	(82)×33	(80)×28	10	81土重複新旧不明
84土	SK-84	DL-145	(70)×40	(60)×22	6	東側は不明
87土	SK-87	DK-144・145	(88)×(32)	(80)×(28)	32	
88土	SK-88	DK-144	(60)×(44)	(40)×(36)	12	
89土	SK-89	DJ-145	68×44	60×40	8	
93土	SK-93	DL-144	104×60	100×(44)	8	
94土	SK-94	DL-144	(40)×(16)	(36)×(12)	12	
95土	SK-95	DL-144	44×32	32×24	8	
96土	SK-96	DM-140・141	138×84	124×60	33	北側が一段下がる
98土	SK-98	DK-144	(104)×(52)	(28)×(24)	—	
99土	SK-99	DH-145	100×67	80×30	27	
101土	SK-101	DL-145	100×68	80×60	12	
102土	SK-102	DK-148	144×68	134×54	12	南側を第1号道路に切られている
103土	SK-103	DJ-145・146	68×67	46×35	25	5住のわ1下にあるためか1に関連する可能性がある
104土	SK-104	DL・DM-144	100×58	82×40	23	S I-07より新しい
105土	SK-105	DH-144・145, DI-144・145	66×52	60×40	25	底部に20×15cmのピット1基あり
108土	SK-108	DJ-148	92×88	74×71	28	
109土	SK-109	DH-144・145, DI-144・145	(188)×(195)	(175)×(178)	13	第Ⅲ層が炭化物混じりの汚れている範囲として確認し、本土坑に伴うものかは不明であるが、南端からピットが2基確認されたため住居跡の範囲である可能性がある
110土	SK-110	DG-141	147×73	127×52	20	17住内に位置しているため、17住に伴う可能性あり
111土	SK-111	DM-143	(100)×(74)	(88)×(64)	23	112土より古い
112土	SK-112	DM-143	138×(112)	56×52	29	111より新しい、炭化材出土

表1 土坑



0 S=1:40 1m

図34 土坑(1)

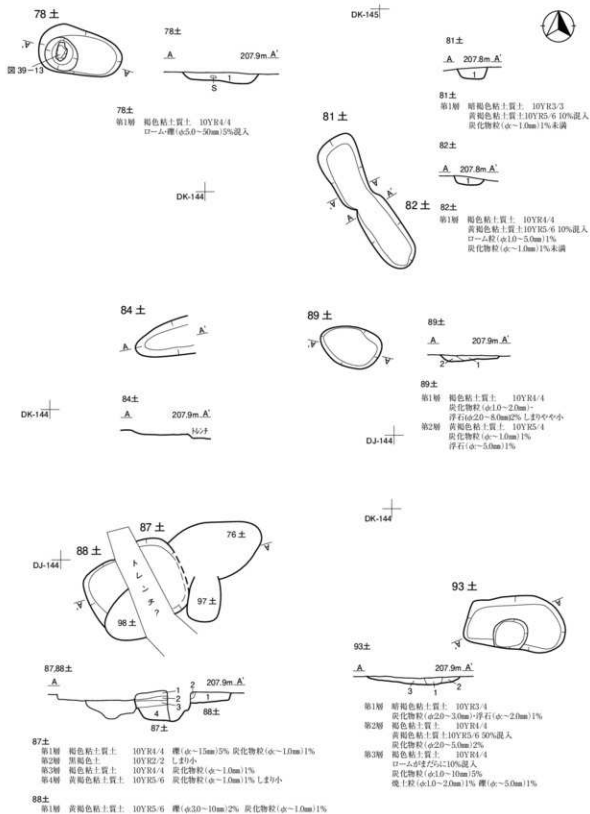
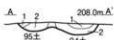


図35 土坑(2)



94,95±



94±

褐色粘土質土 10YR4/4 炭化物粒(φ:1.0~2.0mm)・

焼土粒(φ:~5.0mm)1%

第2層 黄褐色粘土質土 10YR5/6 礫(φ:5.0~10mm)・

炭化物粒(φ:~2.0mm)1%

95±

黄褐色粘土質土 10YR5/6 炭化物粒(φ:~1.0mm)1%

第2層 褐色粘土質土 10YR4/4 炭化物粒(φ:~1.0mm)1% しまりあり

DG-140

DL-143

96±



96±



96±

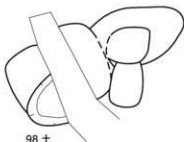
第1層 褐色土 10YR4/6

炭化物微量、しまりやや大

第2層 褐色土 7.5YR4/4

炭化物微量、しまりやや小

DJ-144



98±

DK-144

101±



101±



101±

第1層 褐色粘土質土 10YR4/4

黄褐色粘土質土 10YR5/6 40%混入

炭化物粒(φ:1.0~3.0mm)・

礫(φ:~5.0mm)2%

99±



DH-140

99±



99±

第1層 褐色土 10YR4/6 炭化物微量

第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物微量

第3層 褐色土 10YR4/6 炭化物微量

第4層 黄褐色土 10YR5/6 重層礫混入、

炭化物微量

102±



102±



102±

第1層 暗褐色土 10YR3/4 D~A5%混入

炭化物粒(φ:~1.0mm)2%

第2層 褐色粘土質土 10YR4/4

D~A30%混入 炭化物粒(φ:1.0~2.0mm)・

小礫(φ:5.0~10mm)3%

第3層 暗褐色粘土質土 10YR3/3

炭化物粒(φ:~1.0mm)1%

DJ-147

0 5:1:00 1m

図36 土坑(3)

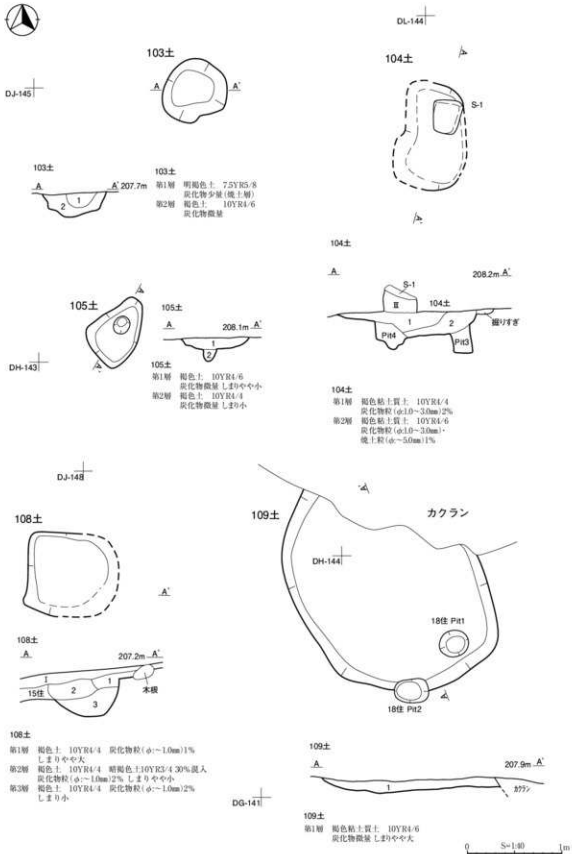
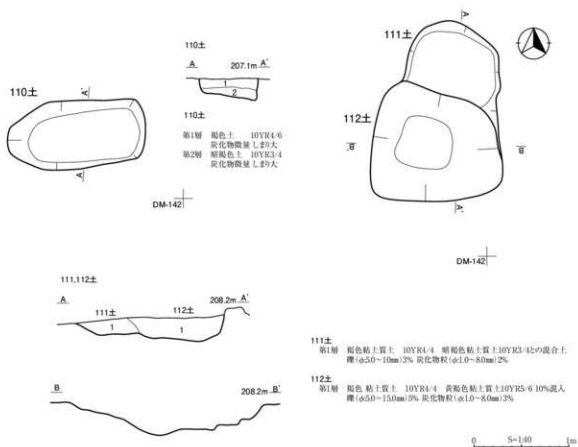


図37 土坑(4)



基本層序 東から

図38 土坑(5)

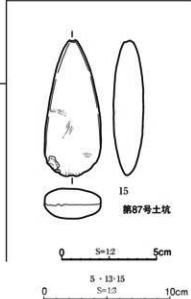
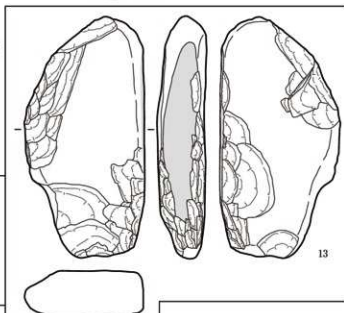
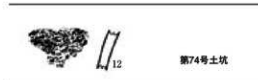
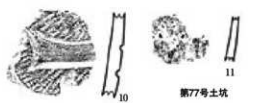
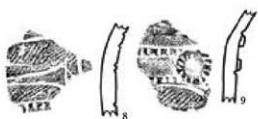
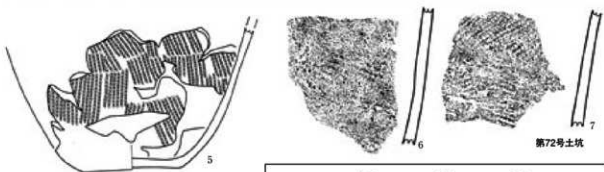
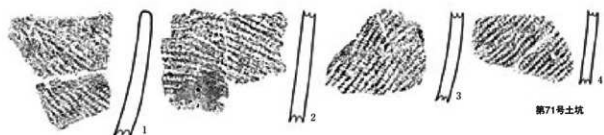


図39 土坑出土遺物(1)

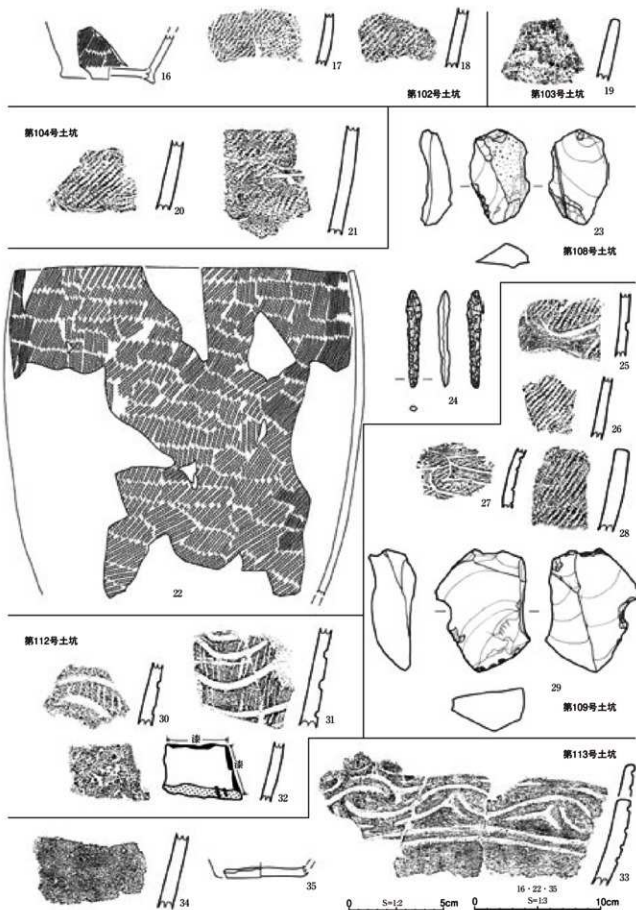


图40 土坑出土遺物(2)

3. 道路跡 (図41~43)

道路跡は4条確認された。調査区の北東地区に集中している。

第1号道路跡 (図42)

〈位置・確認〉本遺構はD J・D K-147・148グリッドに位置している。第I層を除去後に遺構を精査したところ本遺構を確認した。〈重複〉西側で第2号道路跡・東側で第13号住居跡・北側で第15号住居跡と重複している。新旧関係は、下記のとおりである。

旧 → 新

第2号道路跡→第1号道路跡→第15号住居跡

第13号住居跡

〈平面形・規模〉全体の形状は南北に長く、東・西側が直線的な長楕円形を呈する。規模は長軸(720)cm・短軸140cmを測る。〈壁・底面〉東・西壁は確認面から床面にかけて傾斜しており、南壁は中にえぐれる。底面は粘土を貼り堅いつくりである。〈堆積土〉堆積土は16層に分層できた。第3・6・11・13・16層は全体的にローム土を用いた層であり、断面観察等から黒褐色土とローム土を交互に用いて固めた版築(広義の意味で使用)状の構築で階段を造成したものと考えられる。〈付属施設〉ピットは20個検出した。ピットの配置は側縁部にみられるPit 2・7・8・9は長楕円の形態で、第2号道路跡と同様にピットが確認されている。Pit 10・11・12・20は長径10cmと小さく円形の形態を有するもので、西壁寄りに位置しており、第2号道路跡の小ピットと連動していることも考えられる。Pit 1・2・3・4・5・6・14・15・16は、階段の一部の構造であり、特にPit 1・2・3・4・5・6・14は丸太痕跡の可能性が高い。Pit 15・16は幅の広い段上に構築したものと考えられる。Pit 1 楕円形82×18-5cm・Pit 2 楕円形77×28-7cm・Pit 3 楕円形(40)×24-9cm・Pit 4 楕円形82×28-15cm・Pit 5 楕円形57×18-18cm・Pit 6 楕円形67×20-12cm・Pit 7 楕円形47×26-3cm・Pit 8 楕円形37×13-2cm・Pit 9 楕円形117×37-8cm・Pit 10 円形8×8-5cm・Pit 11 円形8×8-8cm・Pit 12 円形14×14-14cm・Pit 13 円形30×29-4cm・Pit 14 楕円形90×25-29cm・Pit 15 方形153×122-20cm・Pit 16 方形93×(47)-10cm・Pit 17 楕円形65×34-3cm・Pit 18 円形12×12-8cm・Pit 19 不整形82×58-12cm・Pit 20 円形20×18-5cm。〈遺物〉遺跡の階段面と掘り方から数片の土器が出土した。1が平口縁で帯縄文を施文している。3は無文の壺形である。2・4・12はスス状炭化物が付着した粗製の深鉢形である。1層から石核(図41-1)と思われるものが、掘り方から不定形石器(図41-2)、覆土から不定形石器(図41-3)が出土した。

第2号道路跡 (図42)

〈位置・確認〉本遺構はD J・D K-147・148グリッドに位置し、第I層を除去後に遺構を確認した。〈重複〉東側で第2号道路跡・南側で第4号道路跡と重複し、その新旧関係は下記のとおりである。

旧 → 新

第4号道路跡→第2号道路跡→第1号道路跡

〈平面形・規模〉平面形は中間部でくぼむが、他は全体に外側に張り出している。規模は長径(650)cm・短径(150)cmを測る。〈堆積土〉不明。〈壁・底面〉壁は確認面から底面にかけて傾斜している。底

面は南側から北側にかけて傾斜しており、堅いつくりである。〈付属施設〉形態の違うピットを13個検出した。Pit12は楕円形の形態で壁寄りに位置しており、用途は不明である。Pit 3・4、Pit 7～9、Pit10・11は連続したピットのつながりであり、階段の可能性が高いものである。また、Pit 5及び6は小ピットと対に位置しており、道路内部の通路幅の杭として用いられていた事も考えられる。Pit 1楕円形84×42-5cm・Pit 2円形16×16-37cm・Pit 3楕円形115×(32)-8cm・Pit 4楕円形(97)×(24)-8cm・Pit 5円形(17)×13-37cm・Pit 6円形14×14-9cm・Pit 7楕円形72×47-12cm・Pit 8楕円形(47)×(52)-13cm・Pit 9楕円形(50)×32-6cm・Pit10楕円形72×40-12cm・Pit11楕円形(40)×28-3cm・Pit12楕円形125×42-19cm・Pit13楕円形42×18-4cm。〈遺物〉遺物は出土しなかった。

第3号道路跡 (図42)

〈位置・確認〉本遺構はDL・DM-145・146グリッドに位置している。第Ⅲ層面を精査中に堅くしまった部分を確認した。〈重複〉認められなかった。〈平面形・規模〉南・北側は確認できなかったが、西側に張り出す逆く字状を呈する。規模は幅60～110cm・長さ470cmを測る。〈堆積土〉道跡は第Ⅲ層面を使用しており、その上部には第Ⅱ層が堆積している。〈壁・低面〉壁は不明。底面には、やや凸凹がみられるものの平坦で堅いつくりである。〈付属施設〉認められなかった。〈遺物〉道路の中央部で道跡面から遺物が出土した。5・10は粗製の深鉢形の胴部破片である。

第4号道路跡 (図42)

〈位置・確認〉本遺構は、DJ・DK-146グリッドに位置している。第1・2号道跡を精査中に道路跡を確認した。〈重複〉東側で第2号道路跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。〈平面形・規模〉全体の形状は、北東側から南西側に延びる長楕円形を呈している。規模は長径320cm・短径80cmを測る。〈壁・底面〉壁は確認面から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁11cm・西壁18cm・南壁8cm・北壁不明である。底面にはやや起伏がみられ、北東側から南西にかけて段上に高くなっている。〈堆積土〉5層に分層することができた。ローム粒を多く含むことが特徴である。〈付属施設〉ピットは等間隔に3個検出した。階段に伴う施設と考えられる。Pit 1円形32×25-7cm・Pit 2楕円形77×34-8cm・Pit 3楕円形47×24-11cm。〈遺物〉遺物は出土しなかった。

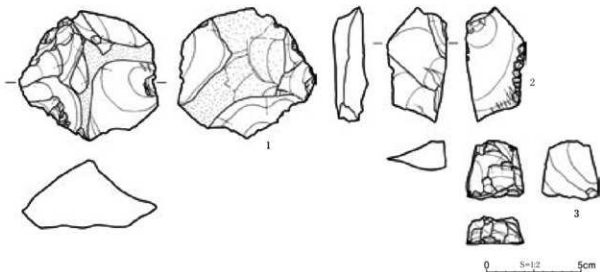


図41 道跡出土遺物(1)

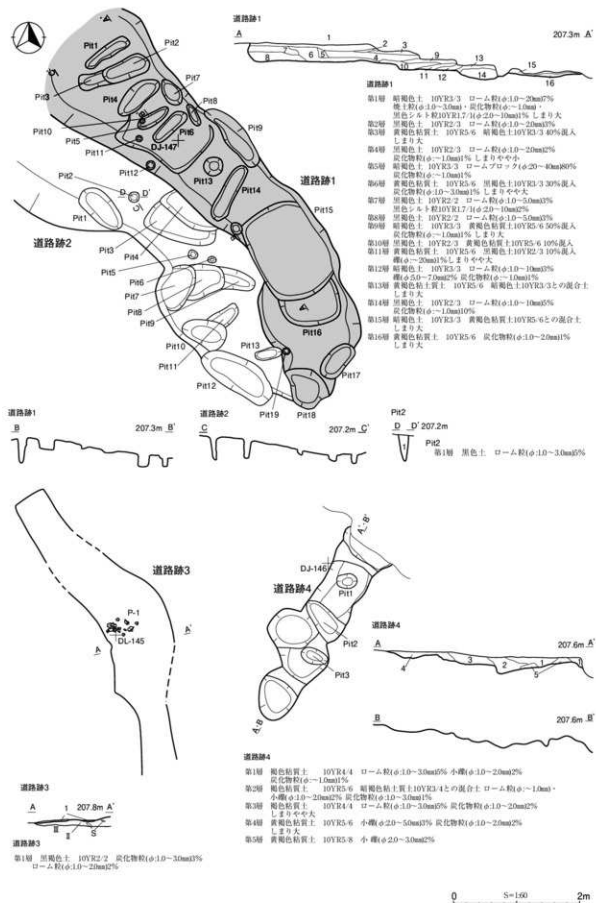


図42 第1~4号道路

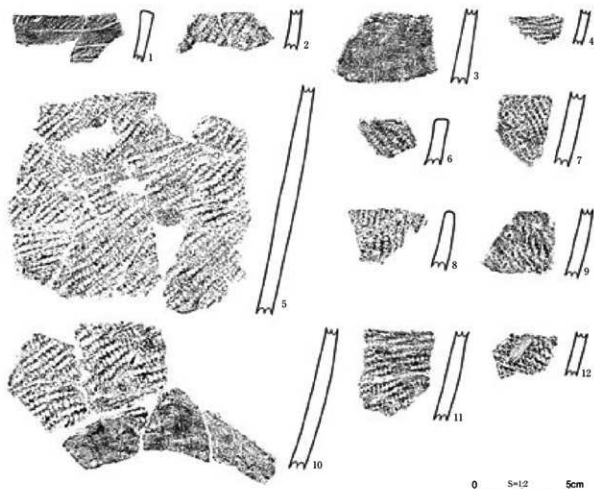


図43 道跡出土遺物(2)

4. 石囲炉、配石遺構

石囲炉1基、配石遺構は2基確認された。

第1号石囲炉 (図45)

〈位置・重複〉DL-142、DM-142グリッドに位置する。重複はない。〈平面形・規模〉4個の石を2個ずつ平行に並べ、その石の間に焼土範囲が広がる。長径120cm・短径115cm。〈堆積土〉焼土層は確認されたが石を設置するための掘り方は明確にはとらえることができなかった。〈遺物〉土器が3片出土した、1～3は粗製の深鉢形であり、時期は縄文時代後期末葉～晩期に相当すると思われる。〈小結〉当初は周辺に住居跡の痕跡が確認されなかったため屋外炉としていたが、周辺に柱穴と推測されるピットが検出されていることから屋内の石囲炉の可能性もある。

(岩田)

第1号配石遺構 (図45)

〈位置・確認〉本遺構はDM-143グリッドに位置し、第Ⅱ層の精査中に確認した。〈重複〉重複は認められなかった。〈平面形・規模〉平面形が円形で規模が40×40cmを測る。礫は3個検出し扁平な礫を用いている。礫の出土状態は、底面に敷いているものと、壁に沿って立てかけている状態である。

〈壁・底面〉壁は確認面から底面にかけて傾斜している。壁高は東壁不明・西壁7cm・南壁10cm・北壁12cmを測る。底面はほぼ平坦である。〈堆積土〉堆積土は2層に区分できたローム土を多く含む。〈遺物〉土器が底面から1片出土した。鉢形の破片であり、縄文時代晩期に相当すると思われる。

(成田)

第2号配石遺構 (図45)

〈位置・重複〉DG-140グリッドに位置する。〈平面形・規模〉約20cmの石1個、約30cmの石2個で構成されている。〈堆積土〉堆積土はない。〈遺物〉他の箇所と比較して、周辺に遺物が多く出土した。

〈小結〉配石とする根拠に乏しいが、遺構外で大きな石がまとまって出土することは本遺跡ではまれであるため、便宜上配石とした。

(岩田)



図44 石囲炉・配石遺構出土遺物

0 S=1:2 5cm

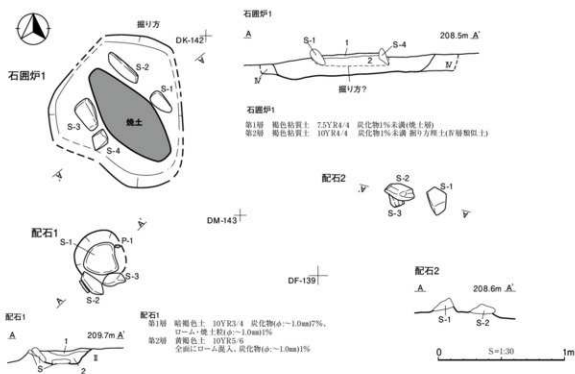


図45 第1号石囲炉・第1号配石・第2号配石

第2節 遺構外出土遺物

1. 土器(図47～52)

第Ⅰ群土器(図48-30～52)

縄文時代中期

調査区ほぼ全面から出土している。器形は深鉢形である。形状は30・32・38・44は口縁部が内反している。30は波状口縁で、斜位の粘土紐を貼り付け、縦位に爪形の燃糸圧痕を施文している。31・42・43・45には粘土紐上面に縄文を施文している。32・38・41には燃糸圧痕がみられ、33・35～37には幅0.7cmの粘土紐に沿って竹管圧痕がみられる。34には縦位の粘土紐に沿ってLとRの2本組の縄文を圧痕している。39は縄文を施文していると思われるが、表面の剥落が激しい。47・50・51は羽状縄文を施文しており、50の内面にはスス状炭化物の付着がみられる。46・48は前前段合燃(R-L-LR)を施文している。

第Ⅱ群土器(図48-53)

縄文時代後期前葉

1点のみ出土している。器形は深鉢形である。平口縁であり、外反している。口縁部から胴部にかけて網目状燃糸文が施文されている。

(小幡)

第Ⅲ群土器(図49・50)

縄文時代後期後葉～末葉

第Ⅲ群瘤付段階(図49)

器形は深鉢形、鉢類でスス状炭化物の付着例が多い。形状は、口唇部寄りが、内傾するA類(56、61)と口頭部が内反するB類(54、55)の二種の形状がみられる。口縁は平口縁(61)がみられるものの波状口縁が主体を占める。60は波状口縁の頂端部が二又を呈するものである。粘土紐、瘤は54が波状口縁の垂下部に、縦位の粘土紐を貼り付け、56、57は垂下部に瘤を貼り付けている。74、77、81は横位波紋を巡らした中間部に貼り付けている。文様は、横位波状間に連続刺突を施文しているものや、連結入組文(54)を施文しているものもみられる。

第Ⅲ群入組文段階(図50・51-113～121)

器形は88が平口縁の甍形土器で他は深鉢・鉢形土器である。形状は、83、84が口唇部寄りが内傾するA類で、他はB類形状であり、口頭部が内反する形状が主体を占める。口縁は平口縁と波状口縁がみられる。文様は、83、84の連結入組文、92の横位方向に展開する帯縄文であり、スス状炭化物の付着例が多い。

第Ⅳ群土器(図47-1・51-122～135)

縄文時代晩期初頭

器形は、1・130～132は口頭部が内反する鉢形。133～135が胴部が張り出す甍形、126・129がA

類形状の深鉢形、123・125はB類形状の深鉢形と本段階に至って器形の種類が増加する。

文様は、130～132は、口頸部に狭義の文様帯を構成して、横位方向に施文しており、1は弧状と擬位の文様を組み合わせている。122・129は、口縁部文様帯内に三叉状入組文を施文している。133～135は、同一個体の壺形で、口頸部に帯状の縄文を施文しており、器表面には赤色顔料を塗布している。

第V群土器(図47-2～29、図51-135～140、図52-141～161)

縄文時代後期末葉～晩期初頭に相当するもの。

136～143は無文の土器である。器形はすべて深鉢形であり、口縁は平口縁を呈する。140は口唇部上面に連続の刻みを有する。形状は142が内反するB類で他はA類の形状である。器表面にスス状炭化物の付着が多くみられる。

144～161は、縄文のみを施文している土器である。器形は深鉢形が主体で、159は鉢形を呈する。すべて平口縁の形状で平口縁である。口唇部の上面は平坦である。単節、複節、直前段多条の縄文を施文し、スス状炭化物の付着例が多い。

図47は、底部破片を集成したものである。底面が平底を呈するもの(2～29)、あげ底を呈するもの(12～25)、台を有するもの(26～29)の形態を有し、器形は深鉢形、鉢形を有する。10・27は底辺部寄りに縄文を施文しているが他は無文である。

2. 土製品・古銭(図52-162・163)

漆を塗布した土器(図52-162)

本例は、112号土坑(図40-32)から1点と、遺構外から1点出土している。深鉢形の胴部破片を用いており、土器の破片断面に漆を塗布しているものである。破片の断面には整形の痕跡はみられない。用途については不明で、時期は縄文時代後期末葉～晩期に相当すると思われる。(成田)

円盤状土製品(図52-163)

円盤状土製品は遺構外から1点出土している。深鉢形の胴部破片を用いて円形状に整形したもので、形態はほぼ円形である。側縁の加工は、全周を打ち欠きのみで整形している。大きさは長径が4.1cm、短径が4.0cmで、厚さは0.8cmである。重量は11.5gである。

時期は縄文時代後期末葉～晩期初頭に相当すると思われる。

古銭(図46)

古銭は遺構外から2点出土している。2点とも寛永通寶で、新寛永(1697～1747年、1767～1781年)と思われる。(小幡)



図46 古銭

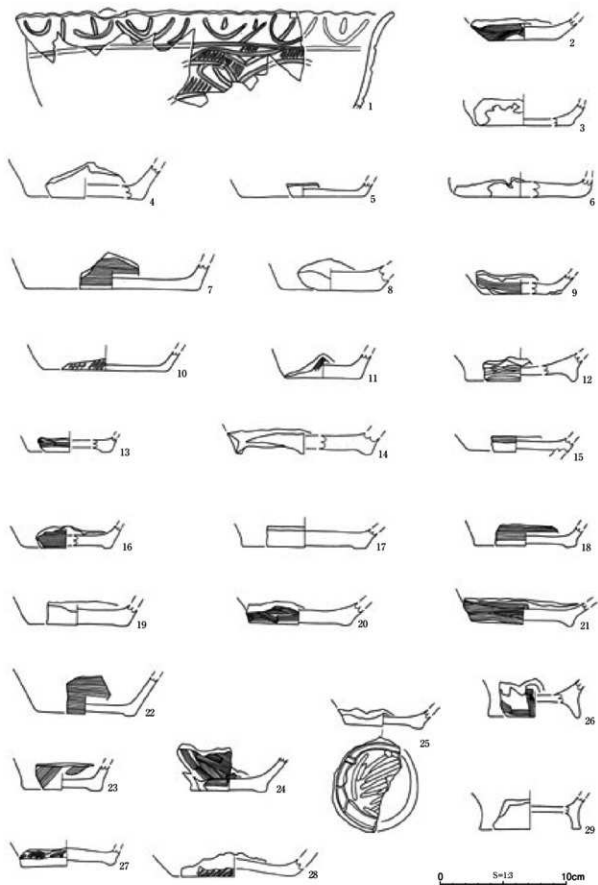


図47 遺構外出土遺物(1)

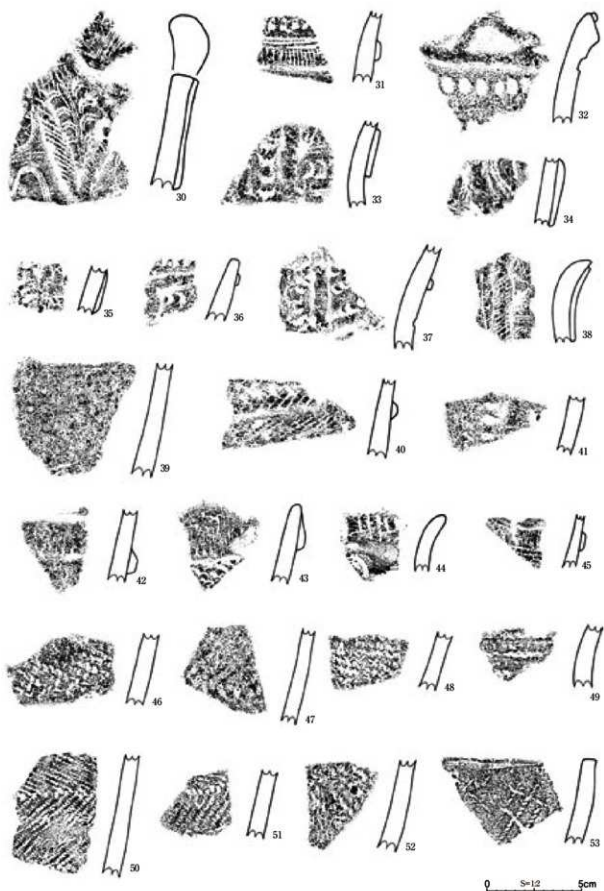


図48 遺構外出土遺物(2)

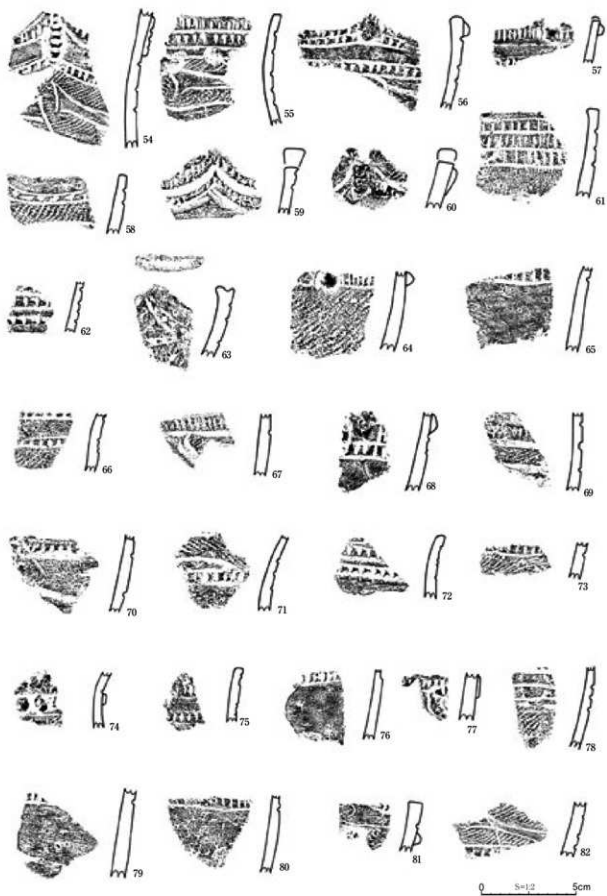


図49 遺構外出土遺物(3)

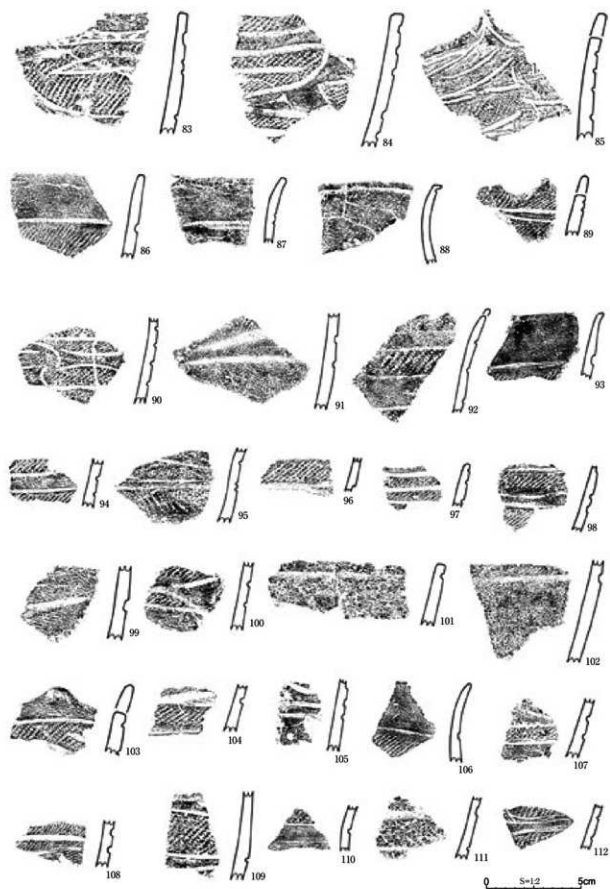


図50 遺構外出土遺物(4)

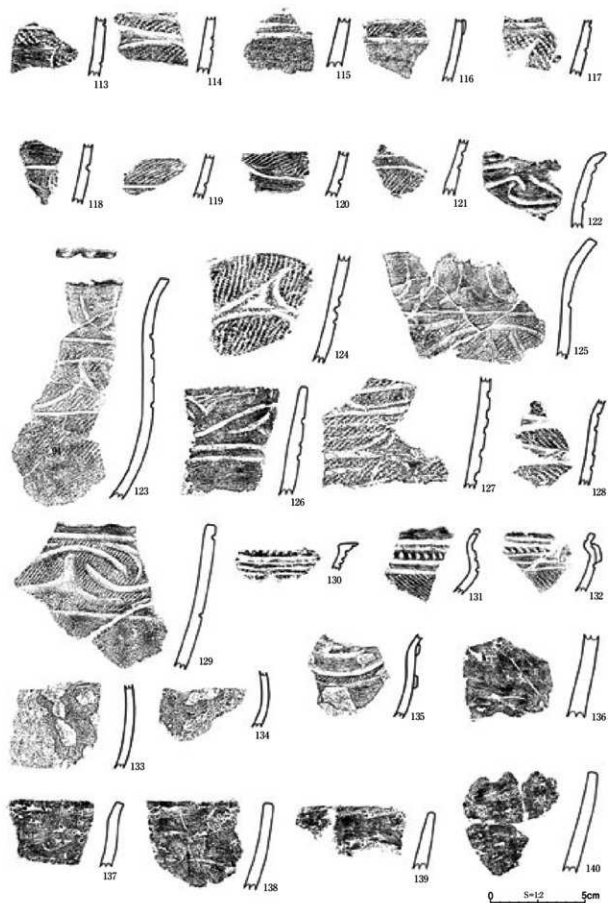


圖51 遺構外出土遺物(5)

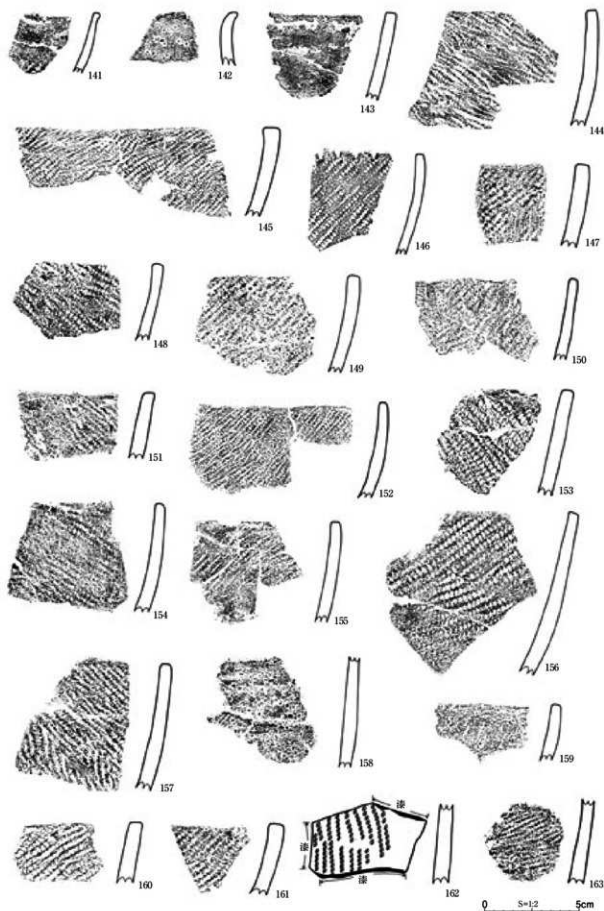


図52 遺構外出土遺物(6)

3. 石器

剥片石器(微小剥離のある剥片を含む)の総数は244点(遺構内64点、遺構外180点)、定形石器15点(遺構内7点、遺構外8点)、不定形石器68点(遺構内13点、遺構外55点)、微小剥離のある剥片は153点(遺構内42点、遺構外111点)、その他10点(遺構内2点、遺構外8点)で、礫石器の総数は59点(遺構内32点、遺構外27点)である。本遺跡における石器の器種の組成比はグラフにまとめた。

第I群 剥片石器(図53～56)

1類 石鎌

遺構内から1点、遺構外から3点出土している。基部形態には以下のものがある。

- A無茎 1)凹基
- B有茎 1)凸基
- C凹基 D尖基

2類 石匙

遺構内から5点、遺構外から2点出土している。すべて図示した。以下の2種類に分けられ、縦型5点と横型2点である。第7号住居跡から3点出土している。図12-27、28はつまみ部分を簡単に作出した縦型石匙である。本遺跡で石匙はこのグリッドを含んで東隣のDL-144で1点、西隣のDK-144で1点、DM-143で2点、DL-142で1点と出土する箇所が集中している。

3類 石筥

遺構外から1点出土した。欠損しているため全体の形状は不明である。

4類 石錐

遺構内から1点、遺構外から1点出土している。以下の2種類があり、それぞれ1点ずつ出土している。すべて図示した。

- Aつまみ部を有するもの Bつまみ部が無く棒状のもの

5類 不定形石器

二次調整のある剥片で、上記以外の剥片石器である。遺構内から13点、遺構外から55点の計68点出土している。遺構内は13点、遺構外は45点図示した。

6類 微小剥離のある剥片

5類で観察される二次調整ではない微細な剥離が連続して見られる剥片である。遺構内から42点、遺構外から111点出土している。基本的に図示していない。

7類 剥片・石核

調整加工、微小剥離が観察されない剥片を剥片とし、剥片石器を製作するための素材を取った後の

剥片を石核とした。石核は遺構内から1点、遺構外から2点出土し、2点図示した。

第II群 礫石器(図57)

8類 磨製石斧

遺構内から1点出土している。

9類 敲磨器類

遺構内から20点、遺構外から19点出土している。使用痕と形態から以下の4種類に分けられる。敲磨器類に使用された石材は安山岩が最多である。

A磨り B敲き・凹み C磨り、敲き・凹みの複合

D半円状扁平打製石器(挟入扁平磨製石器を含む)

なお、敲きと凹みは厳密には区別されず、敲きが強く施された状態が凹み痕として確認できるものと判断している。

10類 石皿・台石類

遺構内から8点、遺構外から2点出土している。

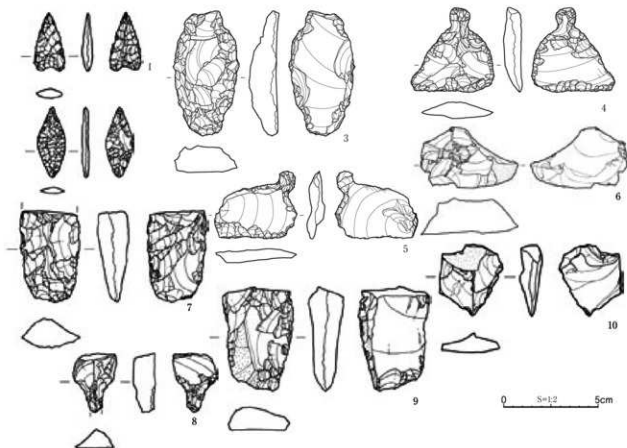


図53 遺構外出土石器(1)

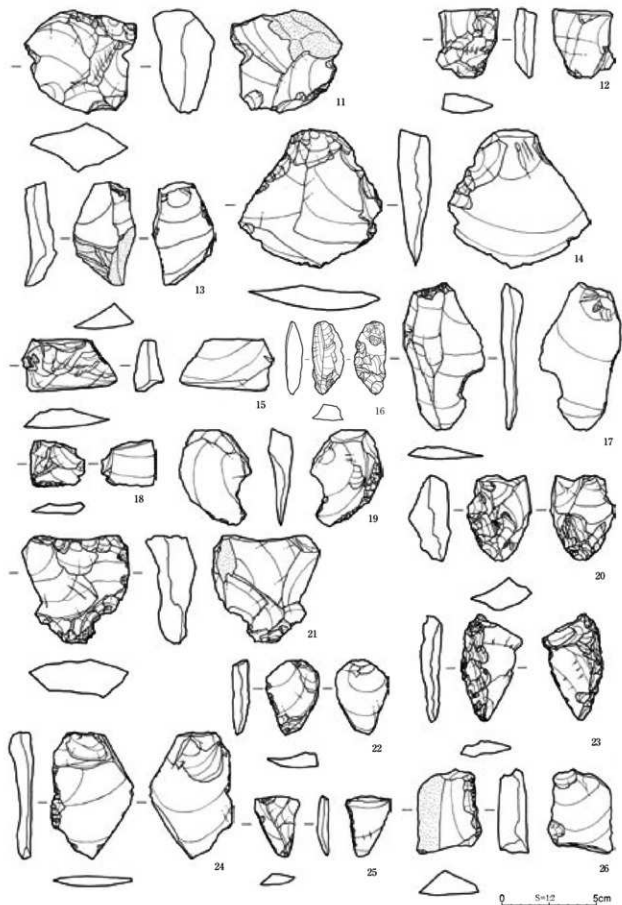


図54 遺構外出土石器(2)

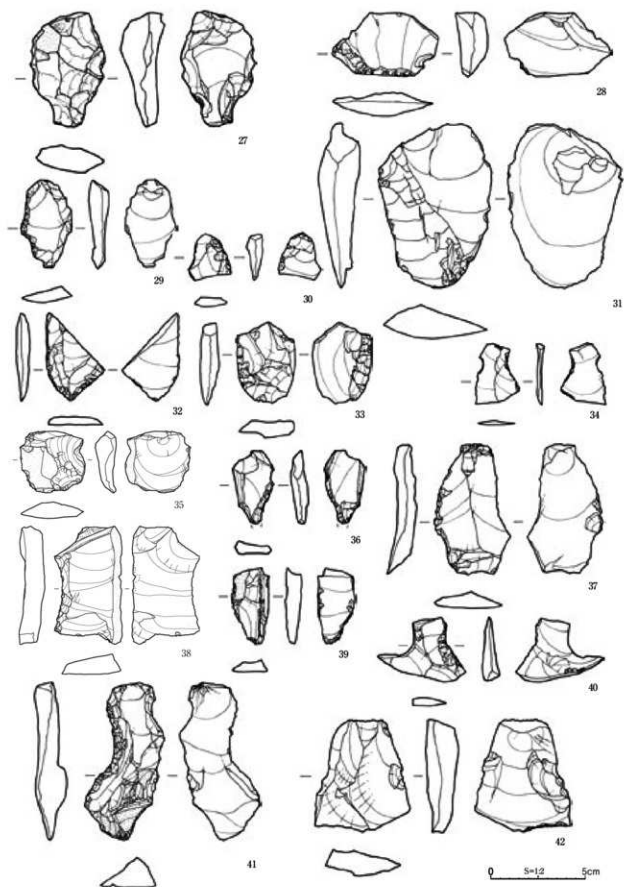


図55 遺構外出土石器(3)

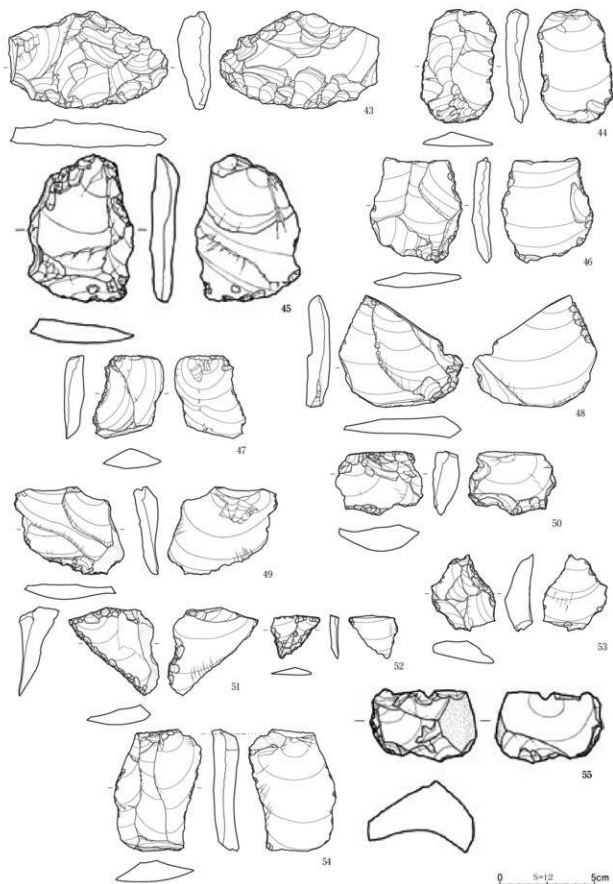


図56 遺構外出土石器(4)

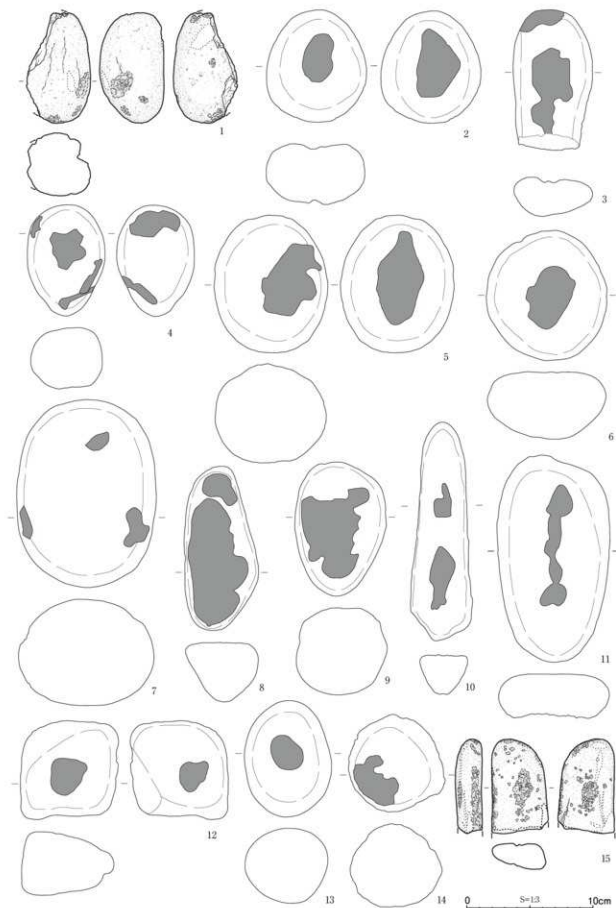


図57 遺構外出土石器(5)

第4章 まとめ

1. 住居跡の特徴と時間的・空間的位置づけ

1) 住居跡の特徴

本遺跡では、明確に竪穴を掘ってつくられた竪穴住居跡といえるような住居跡はほとんど確認されず、いわゆる平地式ともいえる掘り込みの浅い住居跡が多数を占める。この理由として、本遺跡の立地する場所が、近年まで神社の敷地として利用されていたことが考えられ、つまり近代以降の神社設置による削平などにより、本来の竪穴の痕跡が確認できなかった可能性が想定される。しかし、石囲炉などの残存具合から削平などの全面的な造成は考えにくい。激しい造成の痕跡は、図6の遺構配置図の攪乱部分としてアミをかけた場所でも確認されたが、この部分では住居跡などの遺構は確認されなかった。よって、住居跡の確認された箇所はほぼ後世の攪乱を免れた箇所と理解されるため、本遺跡で確認された住居跡はやはり平地式あるいはそれに準ずるものであり、竪穴を掘ったとしても比較的浅いものであった可能性が高い。

水上遺跡で確認された住居跡には、A)主柱穴のみで構成されるもの、B)小ピットのみで構成されるもの、C)主柱穴と小ピットで構成されるものの3種類が確認される。

A)主柱穴のみで構成されるもの(3住、7住、8住、11住、18住、23住、24住)

B)小ピットのみで構成されるもの(5住、9住、19住、22住)

C)主柱穴と小ピットで構成されるもの(10住、17住)

A)は最も数が多く、プランは円形が主体であるが、24住のように楕円形を呈するものもある。B)は規模が小さく、プランは楕円形を呈する。C)は2軒しか確認されなかったが、他タイプの住居に比較して面積が大きい。

炉はA)類では石囲炉と地床炉があり地床炉が多い。石囲炉には円形に石を巡らすものと方形に石を巡らすものがあり、全周しない。B)類は地床炉が主体である。C)類に属する17住の石囲炉は1箇所に大きな長細い磔を横に設置し、そこから円形に長細い磔を巡らす。

C)は、宮本長二郎氏が壁立式平地住居としている径の小さい丸太または枝を地面に刺し並べて壁とし、その上に屋根をかける構造、あるいは壁として刺し並べた先を束ねてドーム状の構造にしたことが推測される(宮本1998)。このような建物は主柱を必要としない。

このように、本遺跡で確認された住居跡は3種類の形態に分けることができる。3種類の住居跡の形態からは用途の違い、時期の違いなどの理由が考えられる。いずれにしても規模の小さい集落であり、3種類が同時存在でないならば、さらに小さな規模の集落が想定される。

2) 住居跡の時間的・空間的位置づけ

前項において、水上遺跡の住居跡は主にピットのあり方により3種類に分類できた。ピットのあり方は住居の上屋構造を規定するものである。それではこれらの住居跡の位置づけは時間的・空間的にいかなるものであろうか。この作業を行うために、縄文時代後期から晩期にかけて青森県とその周辺地域の住居の地域性と時間的変化をとらえることにした。地域的な特徴を浮かび上がらせるために、住居跡は定型的なものに限って分類した。

a) 後期後葉の住居タイプ(図58)

まず第一に、本遺跡の主体は出土土器から縄文時代後期後葉～晩期初頭であるため、図58では縄文時代後期後葉の住居跡が地域的にいかなる様相を示しているのか、当該時期に属する住居跡の事例を集めてみた。晩期初頭の様相がはっきりしないため、後期後葉に限定し、対象地域は本遺跡の属する津軽地域とその周辺である。その結果、地域的に4つのタイプを抽出することができた。4つのタイプは地域名をとって、南部タイプ、下北・上北・道南タイプ、秋田タイプ、津軽タイプである。上述したように、ここでのタイプ抽出作業は、地域的な特徴を浮かび上がらせるために定型的なものに限って分類した結果である。よって、非定型的な住居は省いてあるため、これらの住居タイプのみがそれぞれの地域に独占的に存在することを示していない。あくまで地域の特徴が最も現れている住居タイプという意味である。

南部タイプは台形を呈する主柱穴と整然と並ぶ壁柱穴が特徴である。主に出入口施設があり、炉は地床炉が主体的であるが石囲炉もみられる。このタイプはここで取り上げた他地域と比較して最も定型的なタイプである。

下北・上北・道南タイプでは南部タイプの要素のひとつである壁柱穴があまりみられない。また南部タイプとは異なり石囲炉が優勢である。このような特徴を有する住居跡は上北と下北、道南地域に共通してみられるタイプであると推測される。他の要素は南部タイプと共通する。

秋田タイプは事例が少ないため傾向とはいえないかもしれないが、出入口施設や炉の偏在も顕著に認められない。また、柱穴配置は台形ではなく四角形に近い。住居跡の掘り込みは深い傾向にある。降雪量など本地域の気候条件と関係する住居形態である可能性がある。

この3地域では、地域の特徴をある程度浮かび上がらせることができたが、津軽地域では際だったいわゆるポジティブな特徴を抽出することができなかった。あえて津軽タイプの特徴とすれば、他の3タイプの要素が断片的にみられる、ネガティブに見いだされるタイプである。つまり他の3タイプが存在しなければ当該時期における津軽の特徴はとらえにくいということである。この理由は当該時期の大規模な集落跡の存在が津軽地域において明確ではないということと関係している可能性がある。今後、津軽地域でも当該時期の調査が蓄積されれば、ポジティブな津軽タイプともいえる住居跡が設定できるかもしれない。

b) 後期から晩期における北東北北部と道南地域の住居形態の変遷(図59)

前項では後期後葉に限って、住居形態の地域性をとらえた。しかし、時期を限ると全体的な変化の流れがみえない。ここでは時期ごとに各地域の住居形態の変遷をみることによって、水上遺跡を含む周辺地域の住居がどのような流れにあったのか探してみたい。このように共通レベルから共通レベルへ広げることによって、変化の方向性や影響関係を確認することができる。

それでは実際に各時期における住居跡の特徴をみていく。それぞれの住居跡の特徴や細かい要素、その変化などは変遷図にメモ的に記述してあるため、ここでは大まかな流れを追っていく。

の地域の緩衝地帯的な様相を呈している。しかし、どちらかといえば南部と下北・上北・道南からの要素が散見され、秋田北部的な要素はあまりみられない。

晩期は本県と秋田北部での住居跡の調査事例が少ないこともあり、時期の細別を行っていないが、変化の大まかな流れをみるために比較対象とした。津軽や秋田北部では住居の大型化と小型化への分化が見受けられる。大型住居では炉は中央にあり、主柱穴配置は方形で出入口施設が設けられる。津軽地域の住居が秋田北部の影響を受けたとも考えられる。秋田北部における後期後葉の住居タイプに出入口施設が加わり、大型化したという変化過程が推測される。この時期の南部地域は大型住居は少ないが、秋田北部や津軽でみられるのと同様に、住居規模の2分化という現象はみとれる。また、住居跡の種類もバラエティ豊かになる。換言すれば、定型的要素の制約が不安定化した時期ともいえる。これらのことから北東北北部における後期後葉から晩期への大きな変化は、主柱穴の台形配置が方形に変化し、炉は住居中央に位置するようになると考えられる。これらの特徴は秋田北部タイプ後期後葉のものであるが、秋田北部と南部地域間には両地域を南北に遮るように奥羽山脈が横たわっており、晩期の住居タイプの共通性をもたらした主原因が頻繁な直接交流の結果には求めにくい。いずれにせよ晩期の様相として、大型住居と小型住居、中型住居と小型住居への分化がみられ、津軽・秋田北部の大型住居、南部地域の中型住居は、共通的な要素を有する。後期中葉から後葉にかけてみられた住居タイプの地域化は明瞭にはみられない。

当該地域における住居変遷の大きな流れは、後期前葉の住居タイプの中から南部や上北で台形配置の主柱穴の住居タイプが出現し、後期中葉で南部において安定定型化し、後期後葉には地域差が具現化する。晩期には大型・中型・小型住居の分化の方向へシフトする。この変化を引き起こした原因が何であるのか、現在は不明としかいいようがないが、将来的には土器などの他遺物との比較を行い、重層的に変化の要因を探っていくことが重要であろう。

3) 水上遺跡における住居跡の位置づけ

では上述した3つの項を踏まえて、水上遺跡の住居跡は北東北北部・道南地域の中で時間的・空間的にどこに位置づけられるのであろうか。遺構に明確に伴う遺物がほとんどないため、ここで行ってきた住居タイプの特徴に照らしあわせて考えてみたい。

主柱穴が主で構成されるA)、C)類のうち17住、24住などの主柱穴が住居プランを巡るように配置されるものは後期初頭～前葉に位置づけられる。しかし17住は床面から中期末葉に位置づけられる深鉢が出土しているため、多少時期の遡る可能性はある。小ピットのみで構成されるB)類は後期後葉に、主柱穴と小ピットで構成されるC)類は後期前葉から後葉に位置づけられる。住居跡に確実に伴う遺物が少ないこと、出土遺物の主体的な時期である後期後葉～晩期初頭に属する津軽地域の住居に定型的なものがないことから、水上遺跡における個々の住居跡の明確な時期決定はできない。しかし、定型的住居の欠如という観点から、後期のなかでも津軽地域の後葉～晩期的要素が多く現れていると推測される。出土遺物の主体的時期とも合致する。

なお本報告書では紙数の制限もあり、住居跡の実例をほとんど提示することができなかった。この点に関しては別稿を用意してそちらに譲りたい。

(岩田)

2. 道路跡のまとめ(図60・61)

青森県内の道路跡・道路状遺構は、以前から数多くの発掘調査報告書で記載されていた。報告のすべては近世・近代に造られたものであり、縄文時代の道路跡は検出されていなかった。縄文時代の道路跡の発見は、昭和25年の鹿兒島県岩崎遺跡(河口1953)によって「特殊構築堅面」が最初の報告と思われる。その後、三内丸山遺跡の保存後に始まった平成9年度以降の発掘調査(青森県2002)によって、列墓の間に道路跡を発見し、縄文時代にも県内に道路跡のあることが判明した。それ以降、縄文時代の調査に於いて、道路跡の類例が増加してきた。ここでは、県内の道路跡も含めて若干のまとめを記載する。

本遺跡から検出した道路跡については、領塚正浩氏が「縄文時代の道路跡」(領塚2004)の論考で全国の道路跡を集成し分析している。この中での領塚氏の分類は、道路跡を研究する指標となるべき分類であり、本報告書でも、領塚氏が分類した道路跡Ⅰ類～Ⅴ類の分類を用いて、県内で検出した縄文時代の道路跡を検討したいと思う。

〔Ⅰ類 人間の歩行で地面が帯状に硬化したり、浅く窪んだりした道路〕

本類は、本遺跡第1・3号道路跡が相当し、県内では三内丸山遺跡(青森県2002)(図60-2)・小牧野遺跡(青森市1999・2006)(図61-1)・十腰内(1)遺跡(青森県1999)(図61-4)で検出している。構造的には人が歩き踏み固めた踏みわけ道であり、けもの道との境界線が大事と思われる。その事からいえば、小牧野遺跡の道路跡は、遺構集中の分布区域から離れており、環状列石に通ずる道路跡という評価には、不安な面がみられる。

〔Ⅱ類 地面を帯状に掘削して造った道路〕

浅く溝状に掘削するものであり、すべてが果たして掘削したのか疑問が残るものである。この類を大土木工事によって造られた道路跡と報告している方がいるが、遺構の構造上において大土木工事と呼ばれるものではない。本遺跡では第4号道路跡が該当し、三内丸山遺跡(青森県2002)(図61-2)・十腰内(1)遺跡(青森県1999)(図61-4)・ニッ森貝塚(天間林1997)(図61-2)で検出している。本遺跡の第4号道路跡では、幅が80cmと狭く、対面してすれちがえず、一方通行の道幅を有している。

〔Ⅲ類 土砂や礫などで路面を舗装して造った道跡〕

本類は水上遺跡で検出していない。三内丸山遺跡(青森県1996)(図60-3)の報告では、北の谷で土砂を盛り上げ、幅2mの平坦部をもうけ、土留用に坑列、また斜面(法面)には土器を用いて補強し、脇に流路がみられるという大規模な道路跡を検出している。岡村道雄氏(岡村1997)も道であると紹介しているが、青森県史(秦2002)では記載されていないものである。

〔Ⅳ類 樹木の幹や枝を直線的に並べて、枕木や杭で固定した道路〕

本類は低湿地にみられる木道と理解する。本遺跡では検出していない。県内では、沢を横断する通路的な機能を有する木道として岩谷小谷(4)遺跡(青森県2004)(図61-3)が幅40cm・長さ284cmの構造で杭と芯持材を用いて検出しており、時期は縄文時代前期と思われる。

〔Ⅴ類 路面に一定の段差が造られ、階段状を呈する通路〕

本類は、本遺跡の第1号道路跡が該当すると思われる。このような段差とピットを伴う構造は、千葉県流山市三輪野貝塚(佐倉市2004)からも検出されている。なお、秋田県の漆下遺跡(秋田県2003)で礫を用いた階段状構造の道路跡を検出している(図61-6)。野木遺跡(青森県2000)では、平安時代の水場に向かう階段状遺構が検出しているため参考例として掲載した(図61-5)。

以上のように領塚分類で県内の道路跡を分類したが、県内では領塚分類のⅠ～Ⅴ類すべてが検出されている。この類は、本遺跡ではⅠ・Ⅱ・Ⅴ類と複数の道路跡を有しており、三内丸山遺跡でも、Ⅰ～Ⅳ類と複数の道路跡を検出した。一方、小牧野遺跡ではⅠ類・ニッ森貝塚ではⅡ類のみと単独の道路跡の遺跡もあり、遺跡内での道路跡使用に差異がみられるものである。

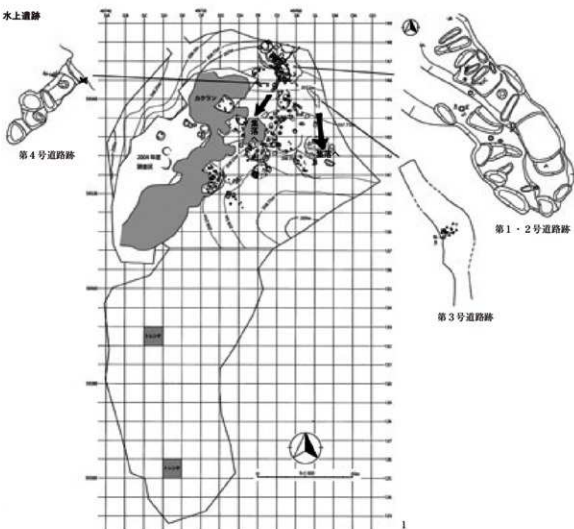
本遺跡から検出した道路跡の位置をみると、岩木川から本遺跡に通じる斜面の北側に一筋の集落に向かう道路跡が存在し、集落の平坦面に到達した時点で、東と西側に枝分かれしたものと考えられる(図60-1)。構築した時期は、本遺跡では後期後葉～晩期初頭である。ほかの遺跡では、三内丸山遺跡で前期中葉～中期・ニッ森貝塚が中期・小牧野遺跡が後期前葉・十腰内(1)遺跡が晩期であり、縄文時代前期中葉～晩期に至る幅広い時期で検出されており、縄文時代の全般を通じて存在している。

最後に集落内における道路跡の意義について記載する。本遺跡で検出した道路跡および階段状の構造の検出は、階段という特殊性から他の集落と相異し、祭祀的要素を保有する集落であると現場で当初は考えた。ところが、集落の精査を進めていくうちに、集落内において特殊なものは見出せず、一般的な普通の集落であり逆に祭祀的要素がみられない集落であるという事が判明した。つまり、**道路跡**というものは、**すべての集落にあり、かつ存在した一要素**である。道路跡は特別視した遺構ではないという結論に達した。一方、三内丸山遺跡では、道路跡を岡村道雄氏(岡村1997)が道を軸にし計画的に遺構を配置していると道の重要性を発表してから、翌年には高橋美久仁氏(高橋1998)が道路跡を計画的なムラづくりに位置するという点まで発展させた。その後、阿部義平氏(阿部2002)が道路跡を「…基幹となる大道が律令時代の都大路にも匹敵する道幅をもつことが判明したものである…」として、律令期の道路跡と同様であると認識している。この認識は青森県史(秦2002)の道路跡の記載にも反映されている。この事は、道路跡の解釈が年度を追うごとに、三内丸山遺跡では過大評価されてきていると思う。縄文時代の集落内の遺構の配置は居住区、埋葬区に分かれている。このことは従来から指摘されていることであり、新しく判明したのではなく道が遺構を区分する要素ではない。三内丸山遺跡で重要な遺構は、道路跡ではなく遺構密集区に存在する北盛土・南盛土・西盛土の環状盛土の存在と考えられる。なお、何故に墓のそばから道が検出されるのかというと、墓の上を通りたくないという必然性と列墓のありかたから道ができたと考えられ、三内丸山遺跡と構造が類似しているニッ森貝塚でも墓の脇に道が存在している。そのために墓を有する遺跡で道が検出されやすいという要因があると思う。

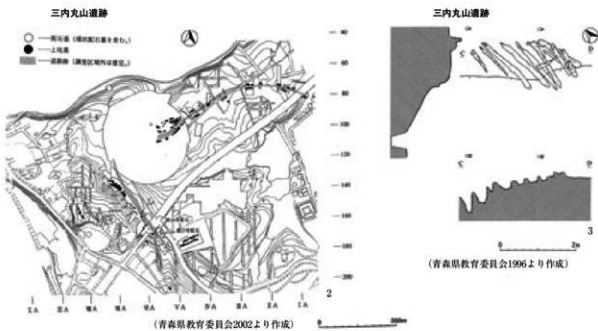
つまり、道路跡の結論を記載すると道はあくまで必然的な人の流れの動線であって、縄文時代においては、集落の区画道ではないと水上遺跡を調査して考えた。

(成田)

水上遺跡



三内丸山遺跡



(青森県教育委員会2002より作成)

(青森県教育委員会1996より作成)

図60 道路跡集成図(1)

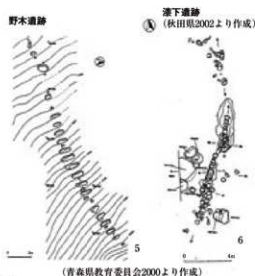
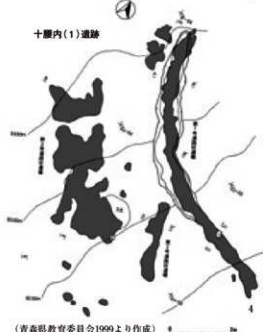
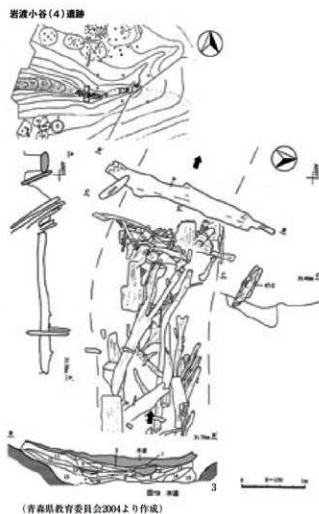


図61 道跡集成図(2)

3. 土器のまとめ

本報告書では、第Ⅰ群～第Ⅴ群と分類して記載した

第Ⅰ群土器 縄文時代中期に相当

第Ⅱ群土器 縄文時代後期前葉に相当

第Ⅲ群土器 縄文時代後期末葉に相当

第Ⅳ群土器 縄文時代晩期初頭に相当

第Ⅴ群土器 縄文時代後期末葉～晩期初頭に相当

平成16年の水上遺跡(青森県2006)の第Ⅲ群土器が、今回の第Ⅲ～Ⅴ群土器に併行するものである。ここでは各群土器について検討する。

第Ⅰ群土器について(図48)

本群土器は縄文時代中期に相当するものである。図48-31は短い捻糸を連続して圧痕しており円筒上層a式に、図48-30・32～37は馬蹄形の圧痕を粘土紐間に施文しており、円筒上層b式に相当するものと思われる。平成16年度の調査(青森県2006)では、胴部から口縁部にかけての深鉢形土器が出土している。この時期は大量の土器が出土する遺跡が多いが、本遺跡では捨て場は検出しなかった。また、今回は出土しなかったが縄文時代中期後葉の最花式も出土している。

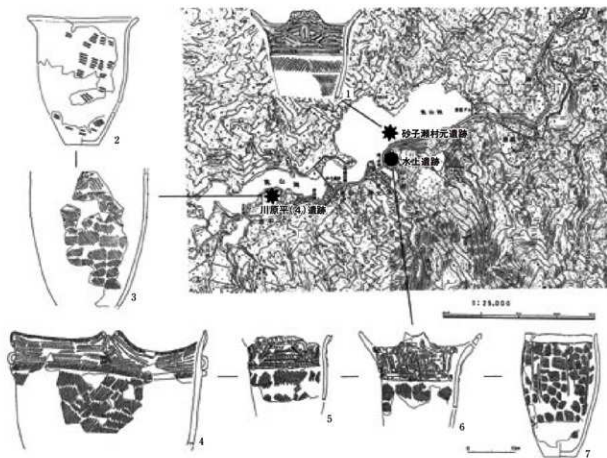


図62 西目屋地区、縄文時代中期土器

西目屋地区の縄文時代中期の遺跡(図62)は、本遺跡から北側の約500mに砂子瀬村元遺跡(福田1984)、本遺跡から西側の約1.500mに川原平(4)遺跡(青森県2006)と本遺跡の3遺跡が存在する。今回、図62に提示した土器は図化した土器のみを集成したものである。図62-1・3~6は、縄文時代中期前葉~中葉の円筒上層a式~c式に併行する土器である。図62-1は実見していないが、図62-3~6は全体的に焼成が悪く、器表面の剥落が著しいものである。この焼成の悪さは地表中の水流によるものなのか、津軽地域の伝統的な土器作りの悪さなのかは判断できないが、土器の器内面調整の粗さ、粘土紐の貼り付け技法など、この時期における当該地域の土器作りの粗さは指摘できる。

図62-5・6は水上遺跡の第3号住居跡から出土したものであり、図62-5は炬として用いられ、図62-6は住居跡内の第2層から出土したものである。この事から、5→6の変遷、つまり円筒上層b式からc式への移行がうかがえられる資料である。図62-6の円筒上層c式の編年は、江坂輝弥氏(江坂1970)の石神遺跡の資料を用いて提示した円筒上層c式であり、江坂氏編年を踏襲した村越潔氏(村越1974)の円筒上層c式に併行すると理解している。

口縁は大形の波状口縁で、図62-1は扇状に図62-6は頂端部が二又状を呈する。なお、この時期には、平口縁もみられる。文様帯は粘土紐を二条用いて横位に巡らして区画帯を構成している。区画帯は、口頸部の内反部に限定している。なお、胴部中央部や区画帯下位に粘土紐を貼り付けているものもみられるが、本地区ではみられない。区画帯の内部には波状口縁の垂下部に二条の粘土紐を貼り付ける。これは前段階の土器においてもみられることである。これを基調として横位に貼り付けており、口唇部よりも波状に粘土紐の貼り付けを行っている。粘土紐間には竹管状工具を用いて横位方向に連続しているのが、円筒上層c式の特徴である。円筒上層c式の良好なセット関係が出土したのは、尾上(2)遺跡(青森県1991)の第2号土坑の資料が好資料と思われる。

縄文時代中期後葉期は図62-2・7のみである。図62-7は最花式としたものだが、2条の縦位沈線の施文が雑である。この時期の施文は縦位の末端を閉じて逆U字形を施文するものであるが、末端が開いているタイプである。器形の形状及び口頸部に狭義の文様帯を作成する点などから最花式としたものである。なお、縦位施文の土器は、三内沢部遺跡(青森県1978)で懸垂文の分類をA~Cに分類しており、B類が該当するものである。地文縄文地に二~三条を一単位として、横位区画帯の下位に施文している。また、山崎遺跡(青森県1982)でも二条を一単位とした施文の深鉢形土器が出土している。

第Ⅱ群土器について(図48)

本群土器は縄文時代後期前葉の十腰内I式に相当するものである。図48-53は平口縁で、縦位方向に網目状摺系文を施文しており、本群に相当するものと思われる。平成16年度の調査(2006)では、牛ヶ沢式、十腰内I式の深鉢形・鉢形の破片が数片出土した。

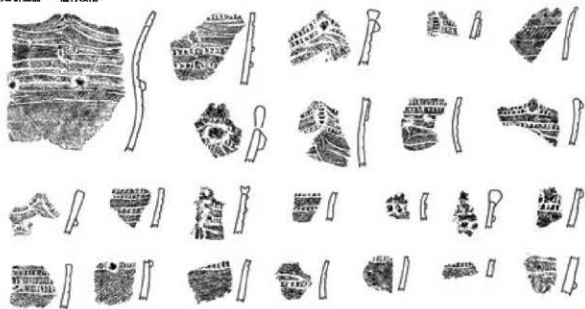
第Ⅲ群土器について(図49)

本群土器は、縄文時代後期末葉に相当する。本群は文様構成の差異から縮付段階と連結入組文段階の二期に区分できる。

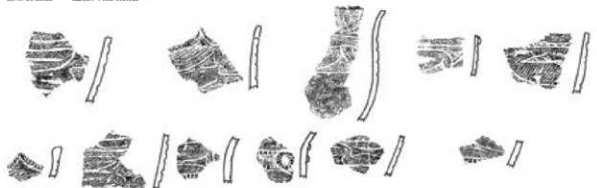
-縮付段階-

器表面に縮を有する土器で、波状口縁の垂下部(図49-56・60)及び文様帯の中間部に貼り付けている(図49-64)。

第五群土器 一帯付段用一



第五群土器 一透刻入組文段用一



第五群土器

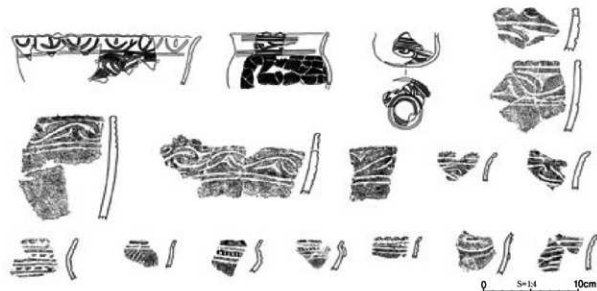


図63 水上遺跡 縄文時代後期末葉～晩期初頭の変遷図

-連結入組文段階-

口縁部文様帯に、連結して入組文を施文しているものであり、図50・83・84の土器が相当するもので、文様帯には瘤及び連続刺突が伴う。

連結入組文段階は、十腰内Ⅵ式に相当するものである。図64は、十腰内遺跡で発表した資料(磯崎1996)と、その後には再整理し報告(弘前市2005)したものを合体させた十腰内Ⅵ式の資料である。図64-13は間根氏が指摘するように縄文時代晩期に併行する土器であり、十腰内Ⅵ式から分離して考えたい。

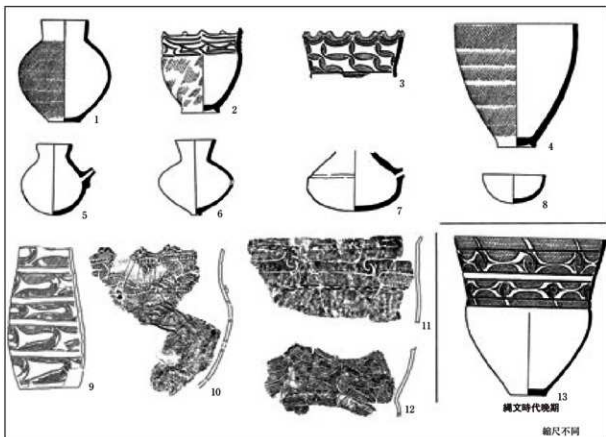


図64 十腰内Ⅵ式集成図(十腰内遺跡)

十腰内遺跡の十腰内Ⅵ式は形状では口頸部が内反するB類形状が主体をしめ、口縁は平口縁と波状口縁の頂端部が二又状に分離しているものが多い、文様は1～2条の横位沈線を巡らして文様区画帯を構成し、口縁部文様帯には斜位及び横位の連結入組文を施文している。図64-10・11は、横位の文様区画帯に連続刺突(器表面に対して直角10と斜位11の施文方法がみられる)、10は文様の中間部に瘤を有するものであるが瘤の使用頻度は少ない。この土器群が標式となりえる十腰内遺跡の十腰内Ⅵ式に既当するものである。

次に十腰内Ⅵ式が出土した水津軽地区(陸奥湾地域を除く)の出土土器(図65)を概観する。

遺跡は岩木川の下流域五月女遺跡(市浦村1983)、岩木山麓の十腰内遺跡(磯崎1968)・大森勝山遺跡(青森県1991)、岩木川上流域の水上遺跡・川原平(1)遺跡(青森県2006)、岩木川の支流域で八甲田山麓の西側に白元(1)遺跡(黒石市1996)、石名坂遺跡(黒石市1987)・源常平遺跡(青森県1978)と四つ

の地域に区分できる。これらの遺跡の土器の出土状態は、「十腰内遺跡で「…最も上層の黒色土層を主な包含層としていた一群の土器である…」として十腰内Ⅵ式が出土したと記載しているが、再整理の十腰内遺跡をグリッド毎及び層位毎に検証すると、層位出土という表現については疑問が残るところである。川原平(1)遺跡では、報告書中では記載していないものの、グリッドが集中し第Ⅲ層中からの出土が多いということは、土器観察表で読みとれるが、県内の遺跡における層位出土の所見はみられない。遺構に伴うものでは源常平遺跡の第70号住居跡の床面一括遺物(図65-1~8)(一部床面でないものも掲載)・白兀(1)遺跡の第2号土坑(図65-13・14)の一括資料があげられる。

土器の様相は深鉢・鉢形が、口唇部寄りが内湾するA類形状(図65-3・4)(粗製土器が多い)・口頸部が内反するB類形状(図65-2・14)、口唇部に向かって外反する形状(図65-21)がみられる。口縁は平口縁と波状口縁を有する。波状口縁は大形突起(図65-20・22)、二又状突起(図65-14・28)がみられる。文様区画帯は横位の沈線を巡らして区画帯を構成している。図65-22は多段の文様区画帯を有する。区画帯の内部には横位方向の連続刺突を施文している。なお、源常平遺跡では瘤が消失し連続刺突のみ残存しており、遺跡内における文様要素の採用に差異がみられるものである。壺形は図65-5のみで胴部が張り出す形状で器外面の前面に縄文を施文している。注口形の図65-9・10は断面形が算盤形を呈するものである。

他の地域で十腰内Ⅵ式と併行する土器が出土した遺跡は、米代川流域の家ノ後遺跡(秋田県1992)から出土したSK-71号土坑・SI-95B住居跡から出土した多段化した右下がりの連結入組文、青森県の南部地域では沖中遺跡(三戸町2000)の遺構外の一括資料で、文様帯は多段化した右下がり・左下がり・左右下がりの連結入組文を施文している。口縁は、三又状突起・大波状と小波状の組み合わせとバラエティーに富んでいる。なお、沖中遺跡では、報告書中の第34・35・37図を大洞B式であると記載しているが、鈴木氏も指摘(鈴木2001)しているように後期末葉の一群の土器と理解する。このように、連結入組文を施文する土器のグループが、後期末葉期の一時期の土器型式であるといえる。

第Ⅳ群土器について(図51)

本群土器は、縄文時代晩期に相当するものである。図51-126・129の1~2条横位沈線を巡って区画帯を構成し、区画帯の内部に三又状入組文を施文している。器形は平口縁で形状は口頸部が内反するB種の形状が主体を占める。図51-130~132は狭義の文様帯に連続刺突を施文した鉢形である。

縄文時代後期と晩期の境界の理解は、連結入組文と三又状入組文の用い方を時期区分の境界と考えられる。つまり横位・斜位に展開した連結入組文は、文様中間で分離して三又状入組文を生じるとと思われる。そのため連結入組文と三又状入組文の関係は近く、一連の流れで捉えるべきではないと思われる。末尾に本遺跡の土器を含めて、南部地域・秋田県米代川流域の、成田編年試案を提示する。

器種組成からみた遺跡の性格(本遺跡と川原平(1)遺跡)

本遺跡から出土した器種を概観すると、全体の割合はとっていないが、深鉢・鉢形が9割以上を占め、壺形5点、注口形1点(平成16年度の調査で出土青森県2006)香炉形・皿形が全く出土していない器種組成であり、深鉢・鉢形を中心とした器種組成を有する遺跡である。一方、本遺跡から西に約2kmに位置する川原平(1)遺跡(青森県2006)では、本遺跡と同時期の縄文時代後期末葉~晩期初頭の遺物を中心として、62箱という大量な遺物数が出土したにもかかわらず、粗製土器の深鉢・鉢形が1点も出土していない、まさに器種組成の面から川原平(1)遺跡は奇異な一面を保有する遺跡といえる。報告

された内容が正しいと前提するならば、精製土器のみで土偶等の祭祀遺物が大量に出土したハレの遺跡である川原平(1)遺跡と、粗製土器の比率が高く煮沸容器以外では、赤色顔料を塗布した土器3点(同一個体)、注口土器1点、土製品では土器片利用の円盤状土製品が1点のみしか出土しなかったケの遺跡である水上遺跡という両極端な器種組成を有している。この岩木川水系の狭い範囲の地域に同時期に存在する二集落の器種組成の差は、縄文時代の遺跡において川原平(1)遺跡(ハレの遺跡)、水上遺跡(ケの遺跡)というハレとケの二集落の存在があるという事が指摘できると思われる。

青森県の後期末葉の編年は、十腰内遺跡(磯崎1968)の十腰内V→Ⅵ式変遷が捉えられてきたが、最近の資料増加に伴い、鈴木克彦氏(鈴木2001)・関根達人氏(関根2005)の両名の論文が、縄文時代後期末葉～晩期の土器編年の再考に大きく影響しているものである。今回の報告は、あえて後期末葉～晩期初頭というあいまいな表現をせずに土器型式を意識して記載した。しかし、報告書の土器をまとめるにあたって関根氏の十腰内V・Ⅵ式を否定し遺跡・遺構を用いた土器段階の変遷や、鈴木氏の数多くの土器型式の設定を理解したのかは疑問が残るところである。

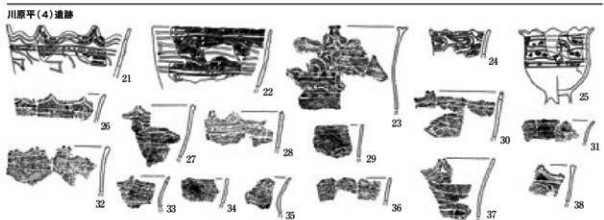
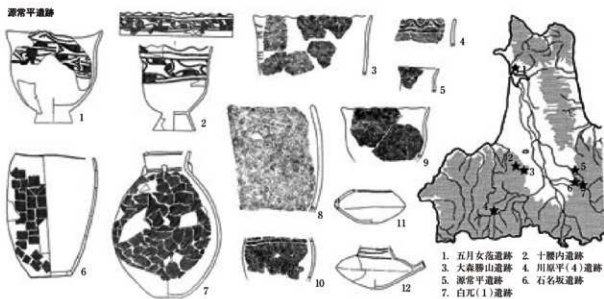
本遺跡は良好なセット関係・層的な出土にもめぐまれなかった。西目屋地区の遺跡は後期後葉～晩期前葉の遺跡の豊庫であり、発掘調査の進展によって西目屋地区でタイプサイトの土器型式が出土する事は十分に考えられる事である。今後の調査におおいに期待したいと思う。

縄文時代後期末葉～晩期初頭編年表(成田試案)

	津軽地域	南部地域	米代川流域
後 期	十腰内Ⅴ — 川原平1段階 — 水上遺跡 — 滝端遺跡 (第5図) 窟付段階		
	十腰内Ⅵ — 川原平2段階 — 水上遺跡 — 沖中遺跡 — 家ノ後遺跡 (第6図) 連結入組文段階		
晩 期	大洞B — 川原平3段階 — 水上遺跡 — 沖中遺跡 — 家ノ後遺跡 (第7図) 三叉状入組文段階		

※川原平の第5～7図は、青森県2006の報告書である。

(成田)



源常平遺跡 1~12
大森勝山遺跡 17

白元(1)遺跡 13~14
石名坂遺跡 18~20

五月女高遺跡 15~16
川原平(4)遺跡 21~38

15・16は船尺不同
1~14・17~38は8分の1

図65 津軽地区 十腰内VI式集成図

2) 石器からみた水上遺跡の用途

a) 石器の出土分布(図66～70)

石器の出土した遺構とグリッドに関して、それぞれ定形石器、不定形石器、微小剥離のある剥片、敲磨器類、石皿・台石類に分けて傾向をみた。

その結果、以下の傾向が観察される。石皿・台石類は遺構外よりも遺構内から出土する。定形石器と石皿・台石類の分布は重なる部分が多い。不定形石器と微小剥離のある剥片は遺跡全体に分布しており、その分布域もほぼ共通している。

全体的な出土石器の量比からは、定形的な石器が少ないということがいえる。定形的な石鏃、石匙、石錐、石筥すべて合わせても10数点である。対照的に不定形石器、それも全体に調整を加えるのではなく一部分にしか施さないものや、微小剥離のある剥片の出土が多い。微小剥離のある剥片は全体の63%、不定形石器は全体の28%で両方を合わせると全体の91%で9割を超える出土量である。

また、石核と推測される石器も出土しているが、この石核から採れる剥片は、石核に残された剥離の大きさからみて小さいものと推測され、定形的な石器を製作するのは難しい。おそらくこれらの石核から採った素材剥片は、あまり二次加工の必要ない不定形石器や微小剥離のある剥片に使用されたと推測される。不定形石器や微小剥離のある剥片の占める割合が最も多いのは水上遺跡に限ったことでもないが、本遺跡の場合はあまりにも定形石器が少ないということが注目される。

b) 水上遺跡の用途

定形的な石器である石匙などと比較して、刃部が鋭利である不定形石器や微小剥離のある剥片が解体用に使われていたとの推測がなされている(中村 1982)。「石材の豊かな地であれば、その場で原石を打ち割り、フレイクを手に入れることも可能であったろう。それ故解体が済めば惜しげもなく氣場に捨ててしまったかもしれない」(中村 1982:53)。このような場では、不定形な石器や割っただけの剥片の刃を使用すれば事足りる場であったのであろう。

遺跡の用途を推測するには、羽生淳子氏が行った石器組成からみた遺跡分類(羽生 1993)がある。上述したように、水上遺跡出土の石器は不定形石器と微小剥離のある剥片が多数を占め、この2つが本遺跡の特徴を示すものと推測される。しかし、羽生氏の分類では石器組成を分析する段階で不定形石器、微小剥離のある剥片が対象となっていないため、本遺跡の用途を推測するには氏の分類を直接利用することはできないが、石器組成の幅が狭い—つまり器種の多様性が認められない—と用途が限定された遺跡であるとした仮説を踏まえれば、水上遺跡の場合も石器組成の幅は狭いため、用途の限定された遺跡であることが推測される。

以上を踏まえて、水上遺跡の用途に関する推測に蓋然性を与えるための分析を行った。第1に、水上遺跡から出土した不定形石器や微小剥離のある剥片の用途を推定するために、それらの刃部角を測定した。第2に水上遺跡の石器組成の特徴をとらえるために、同時代の他遺跡との比較を行った。この比較によって石器組成の類似している遺跡があれば、さらにその遺跡との関連性を追求することができ、遺跡の用途推測を行うための判断材料が増えることになる。

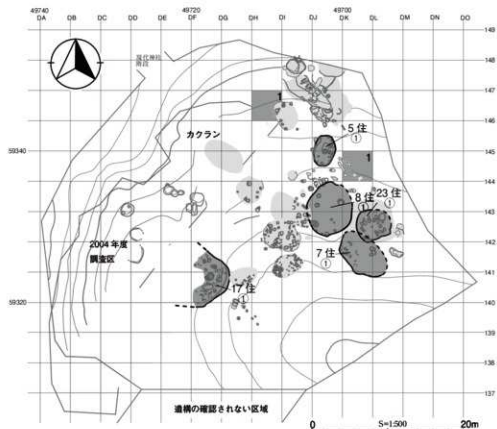


図70 石皿・台石類出土遺構・グリッド

c) 不定形石器と微小剥離のある剥片の刃部と推測される箇所との角度(図71)

本項では、不定形石器と微小剥離のある剥片の用途を探るために、機能部がいかなる特徴を持っているのかを刃部の角度から分析してみたい。ここで刃部とした部分は、不定形石器であれば、連続的な2次調整痕が存在する部分、微小剥離のある剥片では連続的な刃こぼれが顕著に認められる部分をそれとした。

用途を探るために刃部角度という属性を選択した理由は、刃部角度は石器を運動させる行為と密接に関連していると推測されるためである。つまり刃部角が小さければ、ナイフのように切ることに適し、刃部角が大きければ掻き削るスクレイパー的な使用がなされたのではないかとする前提である。

石器の運動は単純な運動の組み合わせとしてとらえられるが、単純な運動としてカッティング、ソーイング、スクレイピング、ホイットリング、チョッピングを想定することができる(阿子島1981:4)。本来ならば刃部の長さも重要な属性となろうが、刃部の長さの判定にはそれを規定する剥落痕(刃こぼれ)、光沢痕、線状痕、摩耗痕の計測・分析を行ったうえで、総合的に判断しなくてはならない。今回はそのための時間的余裕がないため割愛させていただく。

水上遺跡出土の不定形石器、微小剥離のある剥片、石匙、石篋について刃部角を計測し、それぞれ5°間隔で出現する数量を数え、グラフを作成した(図71)。このグラフから読み取れることは、不定形石器と微小剥離のある剥片で刃部角の出現するピークが異なるということである。不定形の刃部角

のピークは35° から45° までである。微小剥離のある剥片は25° から35° までにピークが確認される。この2つの石器では最も使用される刃部角に10° の差のあることが分かる。この傾向は、上述したように両石器が、用途によってある程度使い分けられる関係にあったことを示唆している。しかし、両石器の用途の使い分けは排他的な関係ではなく、同じ刃部角を有するものも確認されるため、素材の石から得られた素材剥片の辺の角度に臨機応変に対応した場面も想定される。

このように刃部角が重複するものも多いが、基本的に微小剥離のある剥片のほうが不定形石器よりも刃部角が鋭いという傾向が見いだせる。上述したようにこの傾向から、刃部角の鋭さは石器の用途の違いに反映されると仮定すれば、微小剥離のある剥片は主にカッティング及びソーイング、不定形石器はスクレイピングに主に使用された石器と推測することができる。数量は少ないが石匙や石篋も不定形石器と同様かそれ以上の刃部角を有する傾向があるため、主にスクレイピングに使用されたと考えられる。

d) 水上遺跡と他遺跡との石器組成の比較(図72)

ここでは、水上遺跡の特徴をとらえるため、ほぼ同時代と推測される他遺跡との石器組成の比較を行ってみたい。ほぼ同時代としたのは、後期後葉から晩期初頭に属するという条件での単純遺跡が少ないためである。後期後葉から晩期初頭を主体としながらも、中期など他時代の遺構・遺物が混じる遺跡が多いため、厳密な意味における同時代の組成比較にならないためである。また、後期後葉から晩期初頭という範囲でも土器型式的には細分される可能性があり、それぞれの遺跡が純粋に同時存在したという概念では比較できない。しかし、それぞれの遺跡の属する時代が大きく離れているわけではないため、ここでは大まかに後期後葉から晩期初頭という時代範囲で比較を試みた(図72)。また、この「まとめ」では微小剥離のある剥片も含めて分析しているが、他遺跡では数量を提示している遺跡が少なく同列に扱えないため、ここでは比較対象から外した。

水上遺跡から南西の美山湖南岸に位置する川原平遺跡では、水上遺跡で出土した土器と同時期に属する縄文時代後期後葉から晩期初頭の土器とそれに伴うと推測される石器が出土している。このように川原平遺跡と水上遺跡は、出土遺物の主体的な時期が縄文時代後期後葉から晩期初頭と一致している。また、美山湖南岸地域にある遺跡として、直線距離にして約2kmと近い場所にあり、両遺跡とも川原平台地の低位河成段丘面に位置している。川原平遺跡は試掘調査であったにもかかわらず、川原平(1)遺跡のC区から遺物包含層が確認されたため、水上遺跡に比較して、剥片石器は約4倍の出土量である。それに対して、礫石器の出土遺物量に剥片石器ほどの量差はみられない。

剥片石器の量比以外の注目すべき点は、川原平遺跡ではいわゆる定形石器である石鏃、石匙、石錐の全体に占める割合が多いのに対し、水上遺跡における定形石器の割合は非常に小さい。川原平遺跡の定形石器が全体に占める割合は55%と5割を超え、一方水上遺跡は16%と2割に満たない。川原平遺跡出土の定形石器は石鏃が最も多く、全体の28%を占める。川原平遺跡の石鏃は有茎凸基が9割近くを占め、22点の基部にアスファルトの付着が認められる。また石匙も6点摘部にアスファルトの付着が確認されている。このように川原平遺跡で顕著なアスファルトの付着は、水上遺跡ではほとんど認められない。

川原平遺跡では黒曜石の剥片が55点出土しており、つがる市出来島産と考えられるものが52点、青

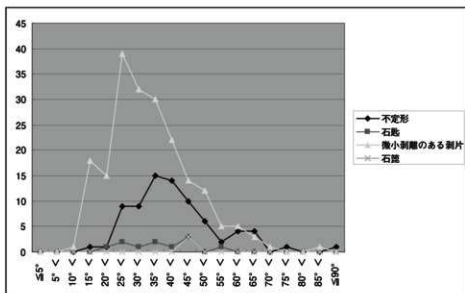


図71 刃部の角度

剥片石鏃

剥片石鏃	石鏃	石匙	石匙	石鏃	石鏃	楔形石鏃	異形石鏃	不定形石鏃	微小割痕のある剥片	石鏃	母岩	合計	備考			
水の上遺構外	3	-	3	1	1	-	-	-	10	-	-	111	2	4	180	
水の上遺構内	1	-	5	-	1	-	-	-	13	-	-	42	1	1	64	
水の上全体	4	-	8	1	2	-	-	-	68	-	-	153	3	5	244	
川原平全体	102	5	66	-	26	5	1	154	-	-	-	-	-	-	350	
上野沢全体	77	2	116	19	30	-	-	11	139	-	-	-	-	-	373	
ニツ石遺構外	13	-	5	2	1	-	44	1	33	22	-	-	-	-	121	
ニツ石遺構内	6	-	1	-	-	-	32	1	22	-	-	-	-	-	62	
ニツ石全体	19	-	6	2	1	-	76	2	55	22	-	-	-	-	183	
水本沢遺構外	20	6	16	5	2	-	-	1	41	-	-	-	-	-	91	遺跡も見たる可遺性あり
水本沢遺構内	25	2	29	27	32	-	-	2	54	-	-	-	-	-	151	
水本沢全体	45	8	45	32	34	-	-	3	95	-	-	-	-	-	242	
十層内(1)I遺構外	110	10	26	6	10	-	-	-	12	-	1	-	-	-	175	
十層内(1)I遺構内	2	-	2	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	7	
十層内(1)I全体	112	10	28	6	11	-	-	-	14	-	1	-	-	-	182	
米山の遺構外	8	-	2	-	2	1	30	13	-	10	150	-	-	-	196	
米山の遺構内	2	-	1	-	-	-	5	9	-	5	28	-	-	-	50	
米山全体	10	-	3	-	2	1	15	22	-	15	178	-	-	-	246	

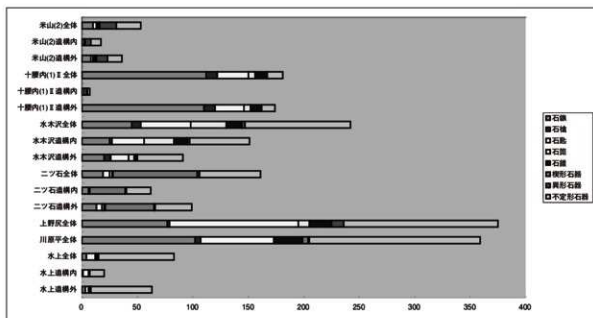


図72 遺跡の石器組成

森県深浦町産のものが3点確認されているが、黒曜石に関して水上遺跡では1点も出土していない。

定形石器の分類には入らないが、不定形石器には石全面に二次調整を加えた定形的ともいえるような入念なものが川原平遺跡でみられるのに対し、水上遺跡では一部分に二次調整を加えただけのものが多い。定形石器の範疇に入る石器ですら、摘み部分を作出したのみの非常に簡易的なものも2点確認される。

以上のことをまとめると、川原平遺跡で出土した石器は、定形・不定形とも製作時間や計画を要する石器が多く、水上遺跡のそれは時間を必要としない。また川原平では定形、不定形ともに一定量出土しているが、水上では不定形石器が圧倒的多数を占める。水上遺跡では母岩や石核とおぼしき器種も確認されることから、その場で割って使える剥片に少し手を加えただけという状態の石器が多いという推測が可能である。この推測と不定形石器、微小剥離のある剥片が多いという傾向は、上述した中村氏が想定している解体場の状況に類似している。また、前項の微小剥離のある剥片と不定形石器でそれぞれの用途を使い分けているという推測から、簡単に製作できる2種の石器を用いてカットイングとスクレイピングに使用したことが想定される。

また、川原平遺跡では土偶・土製品・石製品などいわゆる第3の道具が多く出土しているが、水上遺跡では土製品は1点、石製品はまったく出土していない。水上遺跡で、非実用的な道具がほとんど出土しないことも、遺跡の用途を規定する要因である。

さらに水上遺跡の特徴を考えるために、美山湖地域から青森県の後期後葉期から晩期初頭に属する遺跡に対象を広げ、水上遺跡と川原平遺跡の状況と比較してみる。

対象とした遺跡の中で、水上遺跡と類似した傾向を示すのは二ツ石遺跡である。二ツ石遺跡では水上遺跡ほど顕著ではないが、定形石器に対する不定形石器の割合が多い。他の遺跡は程度の差こそあれ、定形石器が不定形石器に対して一定の出土量を保持している。また、報告書では二ツ石遺跡における剥片石器は、刃部とする部分にしか調整が施されていない場合が多く、粗雑な印象を受けている(白鳥 1989: 93)。この石器の製作方法は水上遺跡における場合と類似している。二ツ石遺跡では集落の全体を調査したわけではないということ、楔形石器の占める割合の高さをどう評価するのかなど、単純には比較できないが、おおまかな石器組成の比較と製作方法からは二ツ石遺跡は水上遺跡と類似する機能を有した限定的な集落であった可能性がある。

それに対して、川原平遺跡は上野尻遺跡や水木沢遺跡と類似する。定形的石器が不定形石器に対して一定の割合で出土する傾向にあり、出土石器の量も多い。

石器組成から大きく2つのグループが抽出できるが、これらの違いは遺跡の用途と密接に関わっている可能性が高い。具体的に論ずるには分析材料が少ないため詳述しないが、少なくとも水上遺跡の用途に関しては、石器組成と刃部角の分析などから解体場などの限定的な集落であったという推測が可能であろう。

(岩田)

註

- (1) 砂子瀬村元道跡は、現在は美山湖となっているが、津軽ダム建設事業に伴って発掘調査する予定である。
- (2) 川原平(4)道跡(青森県2006)は、試掘調査の報告である。
- (3) 江坂氏は本文中で、円筒上層c式が2型式か3型式に細分されると記載しているが、図を明示していないため細分できるのか不明である。
- (4) 山内編年に準ずれば、図63-3も円筒上層d式の範疇ではあるが、本報告では、江坂・村越編年の土器型式を用いたため、円筒上層c式に併行するとおもわれる。
- (5) 青森県の津軽地区(青森市を除く)では、円筒上層b・c式の遺構に伴う土器が少ない。
- (6) 懸垂文分類のC類は、蛇行文であり円筒上層d・e式に併行するものである。最花式には該当しない。
- (7) 本道跡の第V群土器については、後期末葉～晩期初頭と記載した。粗製土器については、どの型式にいれたいのか判断できず、このような表現を用いた。

引用・参考文献

- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団1979「蛭沢遺跡」
- 青森県教育委員会1978「今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第13集
- 青森県教育委員会1976「水木沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第34集
- 青森県教育委員会1978「現常平道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第39集
- 青森県教育委員会1978「三内沢部道跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第41集
- 青森県教育委員会1980「金木町 神明道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第58集
- 青森県教育委員会1982「馬場瀬遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第70集
- 青森県教育委員会1982「山崎(1)・(2)・(3)道跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第68集
- 青森県教育委員会1982「尻高(2)・(3)・(4)道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第89集
- 青森県教育委員会1987「大湊近川道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第104集
- 青森県教育委員会1988「上尾駮(2)道跡Ⅰ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第114集
- 青森県教育委員会1988「上尾駮(2)道跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第115集
- 青森県教育委員会1989「二ツ石道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第117集
- 青森県教育委員会1991「鬼沢嶺沢・尾上山(2)・(3)道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第135集
- 青森県教育委員会1996「三内丸山道跡Ⅳ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第205集
- 青森県教育委員会1999「十腰内(1)道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第261集
- 青森県教育委員会2000「山下道跡Ⅱ・米山(2)道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第274集
- 青森県教育委員会2000「野木道跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第281集
- 青森県教育委員会2001「十腰内(1)道跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第304集
- 青森県教育委員会2002「三内丸山道跡X X」青森県埋蔵文化財調査報告書 第338集
- 青森県教育委員会2003「上野尻道跡Ⅳ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第353集
- 青森県教育委員会2004「岩渡小谷(4)道跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書 第371集
- 青森県教育委員会2006「川原平(1)・(4)大川添(2)水上道跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集
- 青森市教育委員会1999「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ」青森市埋蔵文化財調査報告書 第45集
- 青森市教育委員会2006「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ」青森市埋蔵文化財調査報告書 第85集
- 秋田県埋蔵文化財センター 1996「家ノ後道跡」秋田県文化財調査報告書 第229集

- 秋田県教育委員会1998「虫内Ⅰ遺跡」秋田県文化財調査報告書 第274集
- 秋田県教育委員会2003「漆下遺跡」秋田県埋蔵文化財センター 第21集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1983「君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第62集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第99集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第336集
- 八戸市教育委員会1986「八戸市都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-丹後谷地遺跡-」八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 北海道亀田郡戸井町教育委員会1988「釜谷Ⅱ遺跡Ⅰ」
- 北海道亀田郡戸井町教育委員会1988「釜谷Ⅱ遺跡Ⅱ」
- 脇野沢村教育委員会1979「家の上・外崎沢(Ⅰ)遺跡」脇野沢村文化財報告書 第1集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1991「北の誇り、亀ヶ岡文化-縄文時代晩期編-図版ふるさと青森の歴史シリーズ③」
- 相原淳一2001「東北地方における集落変遷の二期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会：9-20頁
- 秋田県埋蔵文化財センター 2002「漆下遺跡現地見学資料」
- 阿子島香1981「マイクロフレイキングの実験的研究-東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その1-」『考古学雑誌』66-4：1-27頁
- 浅川遼男編1998「先史日本の住居とその周辺」同成社：3-22頁
- 阿部義平2002「縄文時代の道と記念墓列の研究」特別史跡三内丸山遺跡年報5 青森県教育委員会
- 阿部芳郎1996「生業と組織」『季刊考古学』第55号雄山閣：21-26頁
- 磯崎正彦1968「十腰内遺跡 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書」弘前市教育委員会
- 江坂輝弥1974「石神遺跡」ニューサイエンス社
- 大沼忠春2001「北海道における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文文化研究会：1-28頁
- 岡村道雄1997「ここまでわかった日本の先史時代-縄文時代の舟と道」角川書店
- 岡本洋2006「第2節 出土遺物 2石器」『川原平(1)・(4)大川浜(2)水上遺跡』青森県教育委員会：25-33頁
- 河田弘幸2004「小又川流域における縄文時代の竪穴住居について(1)」『研究紀要』第18号：34-61頁
- 河田弘幸2005「小又川流域における縄文時代の竪穴住居について(2)」『研究紀要』第19号：17-44頁
- 工藤大2002「いわゆるキャンプ・サイト等について」『海と考古学ロマンス-市川金丸先生古稀記念献呈論文集-』市川金丸先生古稀を祝う会：209-221頁
- 金子昭彦1997「岩手県平沢Ⅰ遺跡における渋沢式期の集落構造」『紀要XⅦ』：1-24頁
- 金子昭彦2001「岩手県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文文化研究会：53-72頁
- 金子昭彦2001「亀ヶ岡文化の住居構造」『亀ヶ岡文化-集落とその実体-晩期遺構集成Ⅰ』日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会：67-70頁
- 工藤大・永嶋豊2001「馬淵川流域の晩期遺跡」『亀ヶ岡文化-集落とその実体-晩期遺構集成Ⅰ』日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会：9-14頁
- 小島朋夏・小林克2001「秋田県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文文化研究会：73-86頁
- 佐倉市教育委員会2004「シンボジウム井屋長北割遺跡を考える-三輪野貝塚-」
- 白鳥文雄1989「2 出土石器について」『二ツ石遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第117集：92-93頁

- 鈴木克彦2001「北日本縄文後期土器編年の研究」雄山閣
- 関根達人1993「西ノ浜式」とその周辺」『歴史』第81輯：65-86頁
- 関根達人2005「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今目的理解」『葛西勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会：161-176頁
- 海峽土器編年研究会2007「第5回縄文時代後期末葉～晩期初頭土器群の諸問題～資料集～」
- 高橋美久仁1998「縄文・弥生の道から統一の国家への道」『考古学ジャーナルNo.434ニューサイエンス社
- 富樫泰時1993「縄文集落の編成＝東北」『季刊考古学』第44号：46-51頁
- 中島庄一1995「使用痕」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣：28-46頁
- 永嶋豊2000「第3章 まとめ」『山下遺跡Ⅱ 米山(2)遺跡』青森県教育委員会：111-117頁
- 永嶋豊2002「青森県における縄文時代晩期集落について」『海と考古学とロマン～市川金丸先生古稀記念献呈論文集～』市川金丸先生古稀を祝う会：155-172頁
- 中村若枝1982「解体用調理石器」『季刊考古学』創刊号：52-54頁
- 成田滋彦2001「青森県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文文化研究会：29-52頁
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会2001「亀ヶ岡文化－集落とその実態－」
- 秦光次郎2002「青森県史別編 三内丸山遺跡」青森県
- 羽生淳子1993「集落の大きさと居住形態」『季刊考古学』第44号：37-41頁
- 弘前市出土品調査会2005「十腰内(2)遺跡出土遺物集」
- 福田友之1984「西日屋村砂子瀬村元の遺物」青森県考古学第1号 青森県考古学会
- 前山精明2003「青田遺跡の石器群」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 三浦圭介1988「第Ⅷ章 分析和考察 (1)縄文時代の遺構 ア上尾駮(2)遺跡の縄文時代後期における住居の構造とその変遷」『上尾駮(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第115集：124-131頁
- 宮本長二郎1998「第一章 日本の堅穴住居 第一節 平地住居と堅穴住居の類型と変遷」
- 村木淳2005「風張(1)遺跡の縄文時代後期後半の土器と住居」『葛西勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会：177-192頁
- 村越潔1974「円筒土器文化」雄山閣
- 領塚正浩2004「縄文時代の道路跡」史館第33号

水上遺跡土器観察表

図	番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
	5	1.5 住1層	口縁部	平口縁、連結人組文 (L R)	Ⅲ	後期	
	5	2.5 住1層	口縁部	連結人組文、射の輪、連続刺突 (L R)	Ⅲ	後期	スス状炭化物付着
	5	3.5 住1層	口頸部	横位の連続刺突	Ⅲ	後期	
	5	4.5 住1層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期～晩期	スス状炭化物付着
	5	5.5 住1層	胴部	無文	V	後期～晩期	
	5	6.5 住1層	胴部	縄文 (R L)	V	後期～晩期	
	8	1.6 住床直	口縁部	横位波紋 (R L)	N	晩期	
	8	2.6 住床直	口縁部	横位波紋と連続刺突	N	晩期	
	8	3.6 住床面	口縁部	平口縁縄文 (L R)	V	後期～晩期	スス状炭化物付着
	11	1.7 住床面	口縁部	波状口縁、射、連続刺突	Ⅲ	晩期末	
	11	2.7 住1層	口縁部	波状口縁、射の輪、連続刺突	Ⅲ	晩期末	
	11	3.7 住床面	口縁部	波状口縁、射の輪、連続刺突、弧状文	Ⅲ	晩期末	スス状炭化物付着
	11	4.7 住1層	口縁部	波状口縁、横位波紋、射	Ⅲ	晩期末	
	11	5.7 住床面	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
	11	6.7 住P13(1層)	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
	11	7.7 住床面	口縁部	平口縁、L R L	V	後期末～晩期	
	11	8.7 住床面	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	11	9.7 住1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
	11	10.7 住床直	口縁部	平口縁、(L R)	V	後期末～晩期	
	11	11.7 住1層	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	11	12.7 住床面	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
	11	13.7 住床面	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
	11	14.7 住床面	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	11	15.7 住1層	胴部	無文	V	後期末～晩期	
	11	16.7 住1層	胴部	縄文、直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
	11	17.7 住床面	底部	あけ底、無文	V	後期末～晩期	
	11	18.7 住1層	底部	あけ底、無文	V	後期末～晩期	
	11	19.7 住床面	底部	あけ底、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	11	20.7 住1層	底部	あけ底、無文	V	後期末～晩期	
	13	1.8 住床面	口頸部	連結人組文、射、L R	Ⅲ	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	2.8 住床面	口縁部	平口縁、横位波紋、L R	N	晩期	
	13	3.8 住床面	胴部	人組文、L R	Ⅲ	後期末	
	13	4.8 住床面	口頸部	横位波紋、L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	5.8 住床面	口縁部	波状口縁、連続刺突	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
	13	6.8 住床面	口縁部	平口縁、R L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	7.8 住床面	胴部	縄文、直前段多条、R L	V	後期末～晩期	
	13	8.8 住床面	胴部	R L R	V	後期末～晩期	
	13	9.8 住床面	口縁部	波状口縁、L R	V	後期末～晩期	
	13	10.8 住床面	口縁部	平口縁、R L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	11.8 住床面	口縁部	平口縁、R L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	12.8 住床面	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
	13	13.8 住床面	胴部	縄文 (R L)	V	後期末～晩期	
	13	14.8 住床面	口縁部	平口縁 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	15.8 住床面	口縁部	平口縁 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	13	16.8 住床面	胴部	無文	V	後期末～晩期	
	13	17.8 住床面	底部	平底、無文	V	後期末～晩期	
	13	18.8 住床面	台付	底辺部に縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
	13	19.8 住床面	底部	深鉢、あけ底 (L R)	V	後期末～晩期	
	16	1.9 住覆土	口縁部	平口縁、L R L	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	16	2.9 住覆土	胴部	L R L	V	後期末～晩期	
	16	3.9 住覆土	口縁部	波状口縁、連続刺突、人組文	N	後期末	
	19	1.10 住覆土	鉢型	二又状突起、三又人組文、L R	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	2.10 住覆土	台付鉢	L R、横位波紋	V	後期末～晩期	
	19	3.10 住覆土	台付鉢	無文	V	後期末～晩期	
	19	4.10 住覆土	口縁部	斜位の波紋と連続刺突	I	中期	
	19	5.10 住覆土	口縁部	横位の波紋と連続刺突	Ⅲ	晩期末	スス状炭化物付着
	19	6.10 住覆土	口縁部	横位の波紋と連続刺突	N	晩期	
	19	7.10 住覆土	口縁部	突起、横位の波紋	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	8.10 住覆土	口縁部	突起、三又状人組文	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	9.10 住覆土	口頸部	横位の波紋、L R	N	晩期	
	19	10.10 住覆土	口頸部	横位の波紋、L R	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	11.10 住覆土	口縁部	平口縁、三又状人組文	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	12.10 住覆土	口縁部	平口縁、横位の波紋	N	晩期	スス状炭化物付着
	19	13.10 住覆土	口縁部	口唇部上面に連続の刻み、横位波紋	N	晩期	
	19	14.10 住覆土	口頸部	横位の連続刺突と波紋	Ⅲ	後期末	
	19	15.10 住覆土	胴部	無文	V	後期末～晩期	
	19	16.10 住覆土	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
	19	17.10 住覆土	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
	19	18.10 住覆土	胴部	無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
	19	19.10 住覆土	胴部	縄文 (R L)	V	後期末～晩期	
	19	20.10 住覆土	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	
	19	21.10 住覆土	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	

図番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
19	22 10住覆土	胴部	縄文 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
19	23 10住覆土	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
19	24 10住覆土	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
19	25 10住覆土	胴部	L R L	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
19	26 10住覆土	胴部	R L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
17	1 11住床面	口縁部	帯縄文	Ⅲ	後期末	
17	2 11住床面	胴部	L R	V	後期末～晩期	
17	3 11住床面	胴部	R L	V	後期末～晩期	
17	4 11住床面	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
17	5 11住カクニン面	胴部	直前段多条 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	1 13住床面	深鉢	平口縁、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	2 13住床面	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	3 13住床面	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	4 13住床面	口縁部	波状口縁、縞、連続刺突、入組文	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
21	5 13住1層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
21	6 13住1層	口縁部	平口縁、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
21	7 13住床面	口縁部	平口縁、縄文 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	8 13住1層	口縁部	平口縁、縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	9 13住床面	口縁部	平口縁、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	10 13住床面	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	11 13住床面	口縁部	平口縁、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
21	12 13住1層	口頸部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
22	1 14住覆土	口縁部	二又状突起、三又入文、裏面に弧状の縞文	Ⅳ	晩期	
22	2 14住覆土	口縁部	平口縁、縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	
22	3 14住覆土	胴部	縄文 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
22	4 14住覆土	胴部	縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	
22	5 14住覆土	口縁部	平口縁、縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	
22	6 14住覆土	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
22	7 14住覆土	胴部	縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
22	8 14住覆土	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	
22	1 15住覆土	胴部	横位の連続刺突	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
23	2 15住覆土	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
23	3 15住床直	口縁部	平口縁、縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
25	1 17住床面	深鉢	平口縁、縄文 (L R)	I	中期末	
25	2 17住1層	口頸部	横位の粘土紐、爪形(燃系圧痕)	I	中期	
25	3 17住2層	口縁部	横位の粘土紐	I	中期	
25	4 17住覆土	口縁部	縦位の粘土紐、爪形(燃系圧痕)	I	中期	
25	5 17住2層	口頸部	帯縄文 (R L)	Ⅲ	後期末	
25	6 17住1層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
28	1 18住pit15覆土	深鉢	波状口縁、縞の貼り付け、入組文、荒縄文	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	2 18住pit覆土	口縁部	波状口縁、縦位の粘土紐、連続刺突	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	3 18住pit1覆土	口頸部	連続入組文、R L	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	4 18住pit4覆土	口頸部	連続入組文、R L	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	5 18住覆土	口縁部	小突起、帯縄文 (R L)	Ⅲ	後期末	
28	6 18住覆土	口縁部	二又状突起、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
28	7 18住pit 2(1層)	口頸部	連続刺突、R L	Ⅲ	後期末	
28	8 18住覆土	胴部	帯縄文 (R L)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	9 18住覆土	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
28	10 18住覆土	胴部	連続刺突、R L	Ⅲ	後期末	
28	11 18住覆土	口頸部	横位の連続刺突	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
28	12 18住覆土	胴部	無文	V	後期末～晩期	
28	13 18住pit16(3層)	胴部	無文	V	後期末～晩期	
28	14 18住pit14(1層)	胴部	無文	V	後期末～晩期	
28	15 18住覆土	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	
28	16 18住覆土	胴部	縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	
28	17 18住覆土	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
28	18 18住pit 4(1層)	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	
28	19 18住pit 1(1層)	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
28	20 18住pit15(1層)	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	
28	21 18住覆土	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
28	22 18住覆土	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	
28	23 18住覆土	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	
28	24 18住覆土	底部	あげ底、無文	V	後期末～晩期	
26	1 19住覆土	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
26	2 19住床面	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
26	3 19住床面	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
26	4 19住床面	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
26	5 19住pit 7(1層)	口縁部	平口縁 (L R)	V	後期末～晩期	
30	1 22住2層	深鉢	平口縁、縦位方向に展開する条痕	V	後期末～晩期	
30	2 22住2層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
30	3 22住1層	口頸部	横位の波紋	Ⅳ	晩期	
30	4 22住1層	口縁部	平口縁、三又入組文	V	晩期	
30	5 22住1層	底部	あげ底、縄文 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着

図	番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
31	4	24住pit 3(2層)	口縁部	平口縁、直前段多条 (R L)	V	後期末～晩期	
31	2	24住1層	口縁部	平口縁 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
31	3	24住1層	口縁部	平口縁 (L R)	V	後期末～晩期	
31	4	24住1層	口縁部	平口縁(L R)	V	後期末～晩期	
31	5	24住1層	胴部	直前段多条 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
31	6	24住1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
31	7	24住pit 3(2層)	口頸部	横位の波紋	Ⅲ	後期末	
33	1	23住2層	壺	斜位弧状波紋	Ⅳ	晩期	
33	2	23住床面	壺	二又状突起、無文	Ⅳ	晩期	
33	3	23住1層	壺	雲形文、横位波紋	Ⅳ	晩期	
33	4	23住1層	壺	弧縄文 (L R)	Ⅳ	晩期	
33	5	23住1層	深鉢	縦位方向の条痕	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
33	6	23住1層	鉢	あげ底、無文	Ⅳ	晩期	
33	7	23住1層	口縁部	小突起、横位の波紋	Ⅳ	晩期	
33	8	23住1層	口縁部	横位の波紋と連続刺突、L R	Ⅳ	晩期	スス状炭化物付着
33	9	23住1層	口縁部	平口縁、捺糸圧痕	V	後期末～晩期	
33	10	23住1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
33	11	23住1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
33	12	23住1層	胴部	縄文 (R L)	V	後期末～晩期	
33	13	23住1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
39	1	71土2層	口縁部	平口縁、直前段多条 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	2	71土1層	胴部	縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	3	71土1層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	4	71土1層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	5	72土1層	深鉢	あげ底、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	6	72土1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	7	72土1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
39	8	72土1層	口頸部	連結組文、連続刺突、L R	Ⅲ	後期末	
39	9	72土1層	口頸部	連続刺突、円形粘土紐、L R	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
39	10	77土覆土	胴部	連結組文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
39	11	77土覆土	胴部	無文(表面は剥落が著しい)	V	後期末～晩期	
39	12	74土覆土	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
39	15	96土1層	口縁部	波状口縁、弧状の粘土紐、連続捺糸圧痕	I	中期	
40	16	102土1層	底部	あげ底、L R	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
40	17	102土1層	胴部	L R	V	後期末～晩期	
40	18	102土1層	胴部	L R	V	後期末～晩期	
40	19	103土2層	口縁部	平口縁、縄文(器表面の剥落が著しい)	V	後期末～晩期	
40	20	104土1層	口頸部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
40	21	104土1層	胴部	縄文 (L R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
40	22	108土1層	深鉢	平口縁、縄文 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
40	25	109土1層	口頸部	弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
40	26	109土1層	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
40	27	109土1層	口頸部	連結組文 (L R)	Ⅲ	後期末	
40	28	109土1層	口縁部	平口縁、L R	V	後期末～晩期	
40	30	112土1層	胴部	弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	
40	31	112土1層	胴部	弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
40	32	112土覆土	胴部	縄文 (R L R)	V	後期末～晩期	破片の割れ口に漆を塗布
40	33	113土1層	口縁部	三又状突起、三又状組文(波紋)	Ⅳ	晩期	
40	34	113土1層	胴部	無文	V	後期末～晩期	
40	35	113土1層	底部	無文、平底	V	後期末～晩期	
43	1	1号道覆土	口縁部	平口縁、弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
43	2	1号道掘り方	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
43	3	1号道覆土	底辺部	無文	V	後期末～晩期	
43	4	1号道掘り方	胴部	縄文 (L R)	V	後期末～晩期	
43	5	3号道床下面	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
43	6	1号道掘り方	口縁部	平口縁 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
43	7	1号道掘り方	口縁部	縄文 (R L)、平口縁	V	後期末～晩期	
43	8	1号道掘り方	口縁部	平口縁、直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
43	9	1号道掘り方	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
43	10	3号道床下面	底辺部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
43	11	1号道掘り方	胴部	直前段多条 (L R)	V	後期末～晩期	
43	12	1号道掘り方	胴部	直前段多条 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
44	1	1石周回辺Ⅲ層	口縁部	平口縁 (R L)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
44	2	1石周回辺2層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
44	3	1石周回り方	胴部	縄文 (?)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
44	4	1配底面	口頸部	横位の波紋、R L R	Ⅳ	晩期	

水上遺構外土器群表

図 番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
47	1 DH-146 (I 層)	深鉢	平口縁、肩位弧状波紋、弧状文 (L R)	Ⅴ	晩期	
47	2 DD-140 (I 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	3 DM-145 (I 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	4 DH-146 (I 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	5 DK-146 (I 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	6 DK-142 (II 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	7 DH-140 (II 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	8 DF-139 (II 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	9 DH-140 (I 層)	底部	平底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	10 DM-144 (II 層)	底部	平底、L R	Ⅴ	後期末～晩期	
47	11 表段	底部	平底、L R	Ⅴ	後期末～晩期	
47	12 DI-145 (カタラン)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	13 DH-145 (カタラン)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	14 DH-146 (カタラン)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	15 DI-143 (カタラン)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	16 DJ-144 (I 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	スス状炭化物付着
47	17 DM-146 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	18 DK-145 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	19 DM-146 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	20 DJ-148 (I 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	21 DK-144 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	22 DK-148 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	23 DK-147 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	24 DM-143 (II 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	25 DG-145 (カタラン)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	26 DJ-147 (I 層)	底部	白付鉢、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	27 DL-144 (I 層)	底部	あけ底、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
47	28 DL-146 (I 層)	底部	あけ底、L R	Ⅴ	後期末～晩期	
47	29 DH-145 (カタラン)	底部	白付鉢、無文	Ⅴ	後期末～晩期	
48	30 DE-143 (II 層)	口縁部	波状口縁、粘土結貼付(斜位)、撫赤圧痕(碗位・爪形)	I	中期	
48	31 DJ-142 (II 層)	胴部	撫赤圧痕、L 頸位、粘土結貼付(L 単軸絡糸体頸圧)	I	中期	
48	32 DG-144 (カタラン)	口縁部	粘土結貼付(碗位)撫赤圧痕	I	中期	
48	33 DH-141 (II 層)	胴部	粘土結貼付(碗位・碗位)、撫赤圧痕(爪形)	I	中期	
48	34 DM-145 (II 層)	胴部	粘土結貼付(碗位)・R2 本組み頸圧	I	中期	
48	35 DF-140 (I 層)	胴部	粘土結貼付(碗位) 竹管圧痕	I	中期	
48	36 DI-142 (I 層)	口縁部	粘土結貼付(碗位・斜位)、竹管圧痕	I	中期	
48	37 DJ-142 (I 層)	胴部	粘土結貼付(碗位・斜位)、竹管圧痕	I	中期	
48	38 DD-141 (カタラン)	口縁部	波状口縁、粘土結貼付(L R 縄文・撫赤圧痕(爪形)、R 頸位)	I	中期	
48	39 DB-131 (I 層)	胴部	縄文(?) 器表面の剥落が著しい	I	中期	
48	40 DM-145 (I 層)	胴部	粘土結貼付(羽状縄文・L R + R L 結束第1種)、R L 縄文	I	中期	
48	41 DF-141 (カタラン)	胴部	粘土結貼付(碗位)、撫赤圧痕	I	中期	
48	42 DF-146 (カタラン)	胴部	粘土結貼付(L 単軸絡糸頸圧)	I	中期	
48	43 DI-146 (カタラン)	口縁部	粘土結貼付(L 単軸絡糸頸圧)	I	中期	
48	44 DG-139 (II 層)	口縁部	L 単軸絡糸体頸圧、L 頸圧	I	中期	
48	45 DJ-142 (II 層)	胴部	粘土結貼付(L 単軸絡糸体頸圧)、L 頸圧	I	中期	
48	46 DI-143 (カタラン)	胴部	前々段合摺(R-L-L-R)	I	中期	
48	47 DB-131 (I 層)	胴部	羽状縄文(L R + R L 結束第1種)	I	中期	
48	48 DI-146 (カタラン)	胴部	前々段合摺(R-L-L-R)	I	中期	内面スス状炭化物付着
48	49 DH-146 (カタラン)	胴部	L R 頸圧	I	中期	
48	50 DD-140 (II 層)	胴部	羽状縄文(L R + R L 結束第1種)	I	中期	
48	51 DG-141 (I 層)	胴部	羽状縄文(R L + R L 結束第1種)	I	中期	
48	52 DH-146 (I 層)	胴部	R L 縄文	I	中期	
48	53 DF-139 (II 層)	口縁部	平口縁、網目状撫赤文	II	中期	
48	54 DK-143 (II 層)	口縁部	波状口縁、碗位の粘土結、連続刺突、連結入組文	III	後期末	
49	55 DJ-144 (I 層)	口縁部	波状口縁、連続刺突、入組文(R L)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	56 DJ-143 (I 層)	口縁部	小突起、連続刺突	III	後期末	
49	57 DK-144 (II 層)	口縁部	小突起、連続刺突、瘤	III	後期末	スス状炭化物付着
49	58 DJ-148 (II 層)	口縁部	波状口縁、弧状文(L R)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	59 DL-148 (II 層)	口縁部	波状口縁、連続刺突、入組文(R L)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	60 DK-145 (II 層)	口縁部	二又突起、瘤	III	後期末	スス状炭化物付着
49	61 DL-145 (II 層)	胴部	碗位の連続刺突、波紋	III	後期末	スス状炭化物付着
49	62 DJ-148 (II 層)	口縁部	碗位の連続刺突、波紋	III	後期末	
49	63 DJ-148 (II 層)	口縁部	波状口縁、横位・斜位波紋	III	後期末	
49	64 DJ-142 (I 層)	胴部	連続刺突、瘤、L R	III	後期末	
49	65 DJ-145 (I 層)	胴部	連続刺突、波紋	III	後期末	
49	66 DJ-143 (II 層)	口縁部	連続刺突、L R	III	後期末	スス状炭化物付着
49	67 DK-148 (II 層)	口縁部	連続刺突、弧状文(L R)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	68 DM-145 (II 層)	口縁部	連続刺突、瘤	III	後期末	
49	69 DK-148 (I 層)	口縁部	連続刺突、帯状文(L R)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	70 DK-148 (I 層)	口縁部	連続刺突、弧状文(L R)	III	後期末	スス状炭化物付着
49	71 DI-143 (I 層)	口縁部	連続刺突、弧状文(R L)	III	後期末	
49	72 DK-143 (I 層)	口縁部	連続刺突	III	後期末	

図番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
49	73 DK-143Ⅱ層	胴部	連続刺突 (L R)	Ⅲ	後期末	
49	74 DJ-143Ⅱ層	口頸部	連続刺突、瘤	Ⅲ	後期末	
49	75 DK-144Ⅰ層	口頸部	連続刺突	Ⅲ	後期末	
49	76 DK-144Ⅱ層	胴部	連続刺突	Ⅲ	後期末	
49	77 DJ-144Ⅱ層	胴部	連続刺突、粘土紐	Ⅲ	後期末	
49	78 DJ-146Ⅰ層	胴部	連続刺突、LR	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
49	79 DK-143Ⅱ層	胴部	連続刺突	Ⅲ	後期末	
49	80 DK-145Ⅱ層	胴部	連続刺突	Ⅲ	後期末	
49	81 DJ-143Ⅰ層	口縁部	平口縁、R L、瘤	Ⅲ	後期末	
49	82 DK-143Ⅱ層	口頸部	連続刺突、弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	83 DJ-148Ⅰ層	口縁部	連続刺突	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	84 DK-145Ⅱ層	口縁部	波状口縁、連続刺突 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	85 DJ-144Ⅰ層	口縁部	波状口縁、連続刺突 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	86 DK-144Ⅱ層	口縁部	平口縁、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	87 DK-144Ⅱ層	口縁部	平口縁、横位の波紋	Ⅲ	後期末	
50	88 DL-143Ⅱ層	口縁部	平口縁、横位の波紋、壺形	Ⅲ	後期末	
50	89 DH-146Ⅱ層	口縁部	二又状突起、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	90 DJ-143Ⅰ層	口頸部	連続刺突 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	91 DK-146Ⅱ層	胴部	横位、斜位の波紋	Ⅲ	後期末	
50	92 DJ-148Ⅱ層	口縁部	口唇部上部に連続の刻み、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	93 DK-144Ⅰ層	口縁部	平口縁、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	94 DJ-143Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	95 DK-143Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (R L R)	Ⅲ	後期末	
50	96 DK-148Ⅰ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	97 DJ-144Ⅱ層	口縁部	平口縁、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	98 DH-145Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	99 DF-145(カクラン)	胴部	帯縄文 (R L)	Ⅲ	後期末	
50	100 DK-145Ⅱ層	胴部	人組文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	101 DK-146Ⅱ層	口縁部	横位の文様	Ⅲ	後期末	
50	102 DK-146Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	103 DH-146Ⅱ層	口縁部	波状口縁、帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	104 DK-146Ⅰ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	105 DK-143Ⅱ層	胴部	横位、弧状(波紋)	Ⅲ	後期末	
50	106 DK-144Ⅰ層	口縁部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	107 DM-146Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	108 DK-145Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
50	109 DJ-148Ⅰ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	110 DK-146Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	111 DL-146Ⅱ層	口頸部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
50	112 DK-146Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	113 DF-147Ⅰ層	胴部	帯縄文 (R L)	Ⅲ	後期末	
51	114 DL-143Ⅱ層	胴部	弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	115 DM-143Ⅱ層	胴部	横位の波紋	Ⅲ	後期末	
51	116 DF-147Ⅰ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	117 DH-146Ⅰ層	胴部	人組文 (R L)	Ⅲ	後期末	
51	118 DG-145(カクラン)	胴部	弧・弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	スス状炭化物付着
51	119 DK-142Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	120 DM-146(カクラン)	胴部	弧状文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	121 DJ-144Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)	Ⅲ	後期末	
51	122 DF-142Ⅰ層	口縁部	平口縁、三又人組文	Ⅳ	晩期	
51	123 DH-146Ⅰ層	口縁部	口縁部文様帯: U字文、胴部文様帯: 人組文 (L R)	Ⅳ	晩期	
51	124 DM-148Ⅰ層	胴部	三又人組文	Ⅳ	晩期	スス状炭化物付着
51	125 DM-146Ⅰ層	口縁部	口縁部文様帯: U字文、胴部文様帯: 人組文	Ⅳ	晩期	123と同一個体
51	126 DH-143Ⅱ層	口縁部	平口縁、三又人組文	Ⅳ	晩期	
51	127 DK-145Ⅱ層	胴部	三又人組文 (L R)	Ⅳ	晩期	スス状炭化物付着
51	128 DF-147Ⅰ層	口頸部	人組文 (R L)	Ⅳ	晩期	スス状炭化物付着
51	129 DK-146Ⅱ層	口縁部	三又人組文 (L R)	Ⅳ	晩期	
51	130 DK-144Ⅰ層	口縁部	口唇部上部に連続の刻み、横位の波紋	Ⅳ	晩期	スス状炭化物付着
51	131 DJ-143Ⅱ層	口縁部	横位の波紋、連続刺突 (R L)	Ⅳ	晩期	
51	132 DL-143Ⅱ層	胴部	横位の波紋、連続刺突 (R L)、瘤	Ⅳ	晩期	
51	133 DL-145Ⅱ層	胴部	器表面に赤色顔料を塗布	Ⅳ	晩期	134・135と同一個体
51	134 DL-145Ⅱ層	胴部	器表面に赤色顔料を塗布	Ⅳ	晩期	133・135と同一個体
51	135 DL-145Ⅱ層	胴部	帯縄文 (L R)、器表面に赤色顔料を塗布	Ⅳ	晩期	133・134と同一個体
51	136 DH-146(カクラン)	胴部	無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
51	137 DK-146Ⅱ層	口縁部	無文	V	後期末～晩期	壺形(?)
51	138 DJ-143Ⅱ層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
51	139 DJ-144Ⅱ層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
51	140 DL-145Ⅰ層	口縁部	口唇部上部に連続の刻み、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	141 DJ-143Ⅱ層	口縁部	平口縁 (L R)	V	後期末～晩期	
52	142 DK-143Ⅱ層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	
52	143 DJ-143Ⅱ層	口縁部	平口縁、無文	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	144 DH-146(カクラン)	口縁部	平口縁、直前段多象 (R L)	V	後期末～晩期	
52	145 DM-144Ⅰ層	口縁部	平口縁 (L R)	V	後期末～晩期	

図番号	出土位置	部位	文様	分類	時期	備考
52	146 DK-143(Ⅱ層)	口縁部	平口縁、口唇部上面に連続の刻み(LR)	V	後期末～晩期	
52	147 DH-146(カクラン)	口縁部	直前段多条(LR)	V	後期末～晩期	
52	148 DJ-148(Ⅰ層)	口縁部	平口縁、RLR	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	149 DK-145(Ⅰ層)	口縁部	平口縁、LR	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	150 DJ-144(Ⅰ層)	口縁部	平口縁、LR	V	後期末～晩期	
52	151 DH-143(Ⅱ層)	口縁部	平口縁、RL	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	152 DM-143(Ⅲ層)	口縁部	前々段反熱(LRR)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	153 DK-145(Ⅱ層)	口縁部	平口縁(RLR)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	154 DL-142(Ⅱ層)	口縁部	平口縁(RL)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	155 DK-144(Ⅱ層)	口縁部	平口縁(LR)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	156 DK-144(Ⅰ層)	口縁部	平口縁、直前段多条(RL)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	157 DM-143(Ⅲ層)	口縁部	平口縁、直前段多条(RL)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	158 DK-145(Ⅱ層)	胴部	縄文(LR)	V	後期末～晩期	
52	159 DK-145(Ⅰ層)	口縁部	平口縁(LR)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	160 DL-143(カクラン)	口縁部	平口縁、直前段多条(RL)	V	後期末～晩期	スス状炭化物付着
52	161 DH-146(カクラン)	口縁部	平口縁(LR)	V	後期末～晩期	

遺構内剥片石器

図版番号	整理番号	取上げ番号	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図5-7	80	S-X	SI-05	1層	不定形	5.1	2.2	0.8	7.7	凝灰質頁岩	
図8-4	5	S-5	SI-06	床面	石匙	5.9	3.7	1.2	20.6	埴貫頁岩	
図8-5	84	S-9	SI-06	床面	不定形	9.8	5.2	1.8	91.5	埴貫頁岩	
図11-21	70	S-14	SI-07	Ⅱ層	石鏃	2.8	1.4	0.6	1.8	埴貫頁岩	委託18 基部アスファルト付着
図11-22	77	S-88	SI-07	床面	不定形	2.1	2.1	0.7	2.3	埴貫頁岩	委託25
図11-23	53	S-2	SI-07	床直	石匙	5.8	3.1	1.1	11.0	埴貫頁岩	委託1
図11-24	82	S-X	SI-07Pin1	1層	不定形	6.1	4.6	1.6	43.0	埴貫頁岩	
図11-25	64	S-14	SI-07	床直	不定形	4.8	5.7	1.4	31.5	埴貫頁岩	委託12
図12-26	58	S-15	SI-07	床面	不定形	7.0	2.8	0.9	7.4	埴貫頁岩	委託6
図12-27	11	S-5	SI-07	覆土	石匙	6.5	3.3	0.8	10.7	埴貫頁岩	
図12-28	78	S-8	SI-07	覆土	石匙	4.2	2.0	0.3	3.0	埴貫頁岩	
図13-20	59	S-3	SI-08	床面	石鏃	3.2	0.9	0.6	1.3	埴貫頁岩	委託7
図13-21	57	S-1	SI-08	床直	石匙	3.8	5.6	1.2	14.2	埴貫頁岩	委託5
図13-22	56	S-5	SI-08	床面	不定形	4.8	7.5	1.6	33.6	埴貫頁岩	委託4
図26-6	86	S-X	SI-19	床面	不定形	2.8	3.9	0.6	3.9	埴貫頁岩	
図28-25	81		SI-18	覆土	不定形	5.9	3.8	2.3	44.7	埴貫頁岩	
図40-23	85		SK-108	1層	不定形	5.1	3.2	1.2	19.5	埴貫頁岩	
図40-24	1	S-1	SK-108	2層	石鏃	5.2	0.9	0.3	2.0	埴貫頁岩	
図40-29	87	S-1	SK-109	1層	不定形	6.6	5.0	2.2	63.3	埴貫頁岩	
図41-1	9	S-10	第1号道跡	1層	石核	7.0	7.4	3.6	62.5	埴貫頁岩	
図41-2	79		道跡	掘り方	不定形	6.1	3.2	1.5	29.6	埴貫頁岩	
図41-3	83		第1号道跡	覆土	不定形	3.1	3.0	1.5	11.9	埴貫頁岩	

遺構内礫石器

図版番号	整理番号	取上げ番号	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図5-8	39	S-27	SI-05	1層	石皿・台石類	30.1	26.1	7.2	810.0	凝灰岩	
図5-9	23	S-2	SI-05	床直	敲磨器類	15.5	5.8	3.4	581.9	凝灰岩	
図8-6	20	S-6	SI-06	床面	敲磨器類	13.9	8.4	6.2	873.1	緑色凝灰岩	
図8-7	2	S-8	SI-06	床面	敲磨器類	15.8	6.6	3.7	430.1	緑色凝灰岩	
図12-29	31	S-67	SI-07	床直	敲磨器類	10.6	8.6	4.5	444.3	凝灰岩	委託27
図12-30	21	S-89	SI-07	床面	敲磨器類	6.1	7.9	4.6	260.3	凝灰岩	
図12-31	32	S-54	SI-07	覆土	敲磨器類	12.8	6.1	6.1	863.3	凝灰岩	委託28
図12-32	34	S-99	SI-07	床面	敲磨器類	9.9	8.4	6.3	662.0	安山岩	委託30
図12-33	33	S-34	SI-07	覆土	敲磨器類	8.9	8.4	5.7	544.5	凝灰岩	委託29
図12-34	3	S-30	SI-07	床直	敲磨器類	11.7	6.8	2.6	216.9	凝灰岩	
図13-23	4	S-1	SI-08	床面	敲磨器類	10.1	6.9	4.0	394.1	凝灰岩	
図14-24	36	S-4	SI-08	覆土	石皿・台石類	25.4	21.6	6.9	4500.0	緑色凝灰岩	
図17-6	12	S-1	SI-11	床面	敲磨器類	7.7	7.1	5.8	433.4	凝灰岩	
図19-27	7	S-4	SI-10Pin7	1層	敲磨器類	12.0	6.4	4.3	409.5	緑色凝灰岩	
図23-4	19	S-4	SI-15	床直	敲磨器類	11.9	5.0	3.0	117.2	凝灰岩	
図25-7	27		SI-17	1層	敲磨器類	13.0	4.9	4.3	420.7	凝灰岩	
図25-8	37	S-9	SI-17	覆土	敲磨器類	22.2	6.3	4.9	1190.0	流紋岩	
図33-14	8	S-17	SI-23	2層	敲磨器類	13.0	9.3	3.0	456.7	流紋岩	
図33-15	10	S-6	SI-23	1層	敲磨器類	12.5	7.6	4.7	450.6	緑色凝灰岩	
図33-16	5	S-7	SI-23	1層	敲磨器類	11.1	5.9	3.8	291.4	緑色凝灰岩	
図33-17	13	S-10	SI-23	2層	敲磨器類	9.5	6.9	5.2	357.7	凝灰岩	
図39-13	11	S-1	SK-78	1層	平向扇形打磨石器	19.2	9.5	3.6	952.4	安山岩	
図39-15	29	S-1	SK-87	3層	磨製石斧	10.9	4.5	2.4	173.4	凝灰質砂岩	

遺構外剥片石器

図版番号	整理番号	取上げ番号	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図53-1	2	S-X	DE-124	1層	石鏃	3.1	1.6	0.5	2.0	埴貫頁岩	
図53-2	3	S-151	DE-140	Ⅱ層	石鏃	3.7	1.4	0.3	1.3	埴貫頁岩	
図53-3	54	S-22	DK-142	1層	石匙	6.7	3.5	1.6	34.4	埴貫頁岩	委託2
図53-4	60	S-132	DM-143	Ⅱ層	石匙	4.5	4.4	1.0	14.0	埴貫頁岩	委託8
図53-5	66	S-1	DJ-145	Ⅱ層	石匙	3.6	4.4	0.8	10.4	埴貫頁岩	委託14 掘り部アスファルト付着
図53-6	8	S-17	DK-143	Ⅱ層	石核	6.5	10.4	3.8	236.5	埴貫頁岩	
図53-7	10	S-X	DH-146	攪乱	石鏃	4.8	3.2	1.5	24.6	凝灰質頁岩	
図53-8	4	S-X	DH-146	攪乱	石鏃	3.1	2.3	1.0	6.0	埴貫頁岩	
図53-9	16	S-X	DD-141	攪乱	不定形	5.5	3.7	1.2	32.9	埴貫頁岩	
図53-10	6	S-X	DH-146	攪乱	不定形	3.8	3.4	1.2	10.7	埴貫頁岩	
図54-11	14	S-106	DJ-147	Ⅱ層	不定形	5.5	6.0	2.6	52.1	埴貫頁岩	
図54-12	17	S-137	DH-142	Ⅱ層	不定形	3.7	3.3	1.0	13.5	埴貫頁岩	
図54-13	18	S-X	DJ-146	1層	不定形	5.5	3.3	1.4	19.8	埴貫頁岩	
図54-14	15	S-X	DH-145	攪乱	不定形	7.4	7.6	1.3	59.8	埴貫頁岩	
図54-15	19	S-108	DK-148	Ⅱ層	不定形	2.8	5.0	1.0	17.0	埴貫頁岩	
図54-16	55	S-X	DJ-145	1層	不定形	3.9	1.7	0.9	5.7	埴貫頁岩	委託3
図54-17	20	S-107	DJ-148	Ⅱ層	不定形	7.8	4.3	0.6	22.0	埴貫頁岩	
図54-18	22	S-X	DJ-145	攪乱	不定形	2.5	2.9	0.6	4.6	埴貫頁岩	

図版番号	整理番号	取上げ番号	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図54-19	27	S-X	DH-146	I層	不定形	5.1	3.8	1.3	15.3	珪質頁岩	
図54-20	26	S-139	DJ-12	II層	不定形	4.5	3.4	1.7	23.3	珪質頁岩	
図54-21	25	S-X	DL-145	II層	不定形	5.7	5.7	2.0	61.2	珪質頁岩	
図54-22	23	S-X	DJ-147	II層	不定形	4.0	2.9	0.8	8.3	珪質頁岩	
図54-23	51	S-X	DF-141	攪乱	不定形	5.8	3.3	0.9	12.9	珪質頁岩	
図54-24	21	S-X	DJ-145	I層	不定形	6.8	4.4	5.0	20.1	珪質頁岩	
図54-25	24	S-X	DJ-147	II層	不定形	3.2	2.4	0.6	3.9	珪質頁岩	
図54-26	28	S-X	DE-142	II層	不定形	4.5	3.5	1.3	20.9	凝灰質頁岩	
図55-27	29	S-X	DJ-145	I層	不定形	6.1	4.0	1.5	40.5	珪質頁岩	
図55-28	30	S-X	DJ-144	I層	不定形	30.4	5.7	1.3	24.3	珪質頁岩	
図55-29	32	S-X	DG-145	攪乱	不定形	4.7	2.8	0.9	9.6	珪質頁岩	
図55-30	13	S-44	DJ-144	II層	不定形	2.5	2.3	0.5	1.3	珪質頁岩	
図55-31	31	S-155	DE-142	I層	不定形	8.7	6.0	1.8	76.6	珪質頁岩	
図55-32	33	S-X	DH-147	I層	不定形	4.7	3.1	0.5	6.8	珪質頁岩	
図55-33	34	S-X	DH-143	攪乱	不定形	4.2	3.2	0.9	14.4	珪質頁岩	
図55-34	36	S-X	DH-147	II層	不定形	3.3	2.4	0.2	1.9	珪質頁岩	
図55-35	62	S-X	DM-144	I層	不定形	3.3	3.5	1.6	12.4	珪質頁岩	委託10
図55-36	39	S-X	表採		不定形	3.9	2.2	0.8	5.8	珪質頁岩	
図55-37	38	S-X	DM-146	II層	不定形	6.9	4.1	0.9	24.0	珪質頁岩	
図55-38	63	S-X	DK-144	I層	不定形	6.3	3.6	1.3	29.1	珪質頁岩	委託11
図55-39	40	S-X	DJ-147	I層	不定形	4.1	2.0	0.7	5.1	珪質頁岩	
図55-40	37	S-X	DL-145	II層	不定形	3.5	4.7	0.4	7.1	珪質頁岩	
図55-41	41	S-X	DL-143	攪乱	不定形	7.4	4.3	1.6	31.8	珪質頁岩	
図55-42	35	S-102	DJ-141	II層	不定形	6.0	5.1	1.4	39.7	珪質頁岩	
図56-43	61	S-88	DK-147	I層	不定形	5.2	8.5	1.8	64.1	珪質頁岩	委託9
図56-44	68	S-8	DJ-144	II層	不定形	6.0	4.0	1.3	26.3	珪質頁岩	委託16
図56-45	12	S-154	DE-142	I層	不定形	7.8	5.6	1.3	60.5	珪質頁岩	
図56-46	67	S-X	DJ-145	攪乱	不定形	5.6	4.9	1.0	24.4	凝灰質頁岩	委託15
図56-47	65	S-105	DK-147	II層	不定形	4.4	3.8	1.1	16.2	珪質頁岩	委託13
図56-48	69	S-X	DK-145	I層	不定形	5.9	6.6	1.3	40.7	珪質頁岩	委託17
図56-49	71	S-4	DK-144	II層	不定形	4.7	5.8	1.4	21.4	凝灰質頁岩	委託19
図56-50	72	S-15	DJ-142	II層	不定形	3.4	4.7	1.4	19.9	珪質頁岩	委託20
図56-51	74	S-X	DK-145	I層	不定形	4.8	4.9	2.1	18.1	珪質頁岩	委託22
図56-52	76	S-121	DM-143	II層	不定形	2.3	2.6	0.5	2.3	珪質頁岩	委託24
図56-53	75	S-116	DK-148	II層	不定形	4.1	3.4	1.5	14.1	珪質頁岩	委託23
図56-54	73	S-X	DJ-144	II層	微小剥離のある剥片	6.4	4.7	1.5	36.3	凝灰質頁岩	委託21
図56-55	7	S-X	DH-146	攪乱	石核	5.7	3.8	3.8	161.9	珪質頁岩	

遺構外礫石器

図版番号	整理番号	取上げ番号	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図57-1	35	S-1	DL-145	I層	敲磨器類	11.7	6.9	6.8	61.36	凝灰岩	委託31
図57-2	1	S-X	DJ-144	I層	敲磨器類	9.0	8.1	4.8	438.6	安山岩	
図57-3	6	S-X	DM-143	II層	敲磨器類	11.2	6.4	3.2	330.9	緑色凝灰岩	
図57-4	15	S-X	DL-145	I層	敲磨器類	8.9	6.2	4.9	373.2	凝灰岩	
図57-5	24	S-X	DM-144	I層	敲磨器類	11.0	9.1	8.0	1077.9	花崗岩	
図57-6	14	S-153	DE-142	I層	敲磨器類	10.4	9.5	4.9	756.4	緑色凝灰岩	
図57-7	17	S-X	DH-143	攪乱	敲磨器類	15.1	11.1	8.6	2031.7	凝灰岩	
図57-8	18	S-X	DM-146	II層	敲磨器類	13.2	5.9	4.9	492.8	緑色凝灰岩	
図57-9	16	S-X	DM-144	I層	敲磨器類	10.7	7.3	7.0	692.9	凝灰岩	
図57-10	9	S-X	DF-141	I層	敲磨器類	17.5	5.0	3.2	359.3	流紋岩	
図57-11	22	S-X	DH-143	I層	敲磨器類	16.5	9.0	3.6	760.2	緑色凝灰岩	
図57-12	28	S-X	DG-141	攪乱	敲磨器類	7.9	7.7	5.1	439.0	凝灰岩	
図57-13	26	S-X	表採		敲磨器類	9.3	7.0	7.0	560.8	緑色凝灰岩	
図57-14	25	S-X	DF-143	I層	敲磨器類	7.9	7.7	6.6	334.1	凝灰岩	
図57-15	30	S-X	DL-141	I層	敲磨器類	10.0	6.1	2.9	243.9	砂岩	委託26

※ SI : 住居跡 SK : 土坑



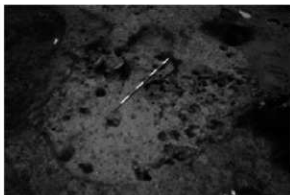
作業風景



作業風景



作業風景



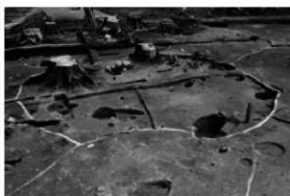
5住 完掘 南から



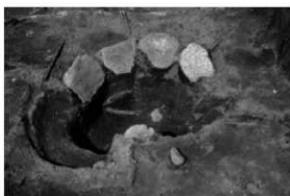
6住 完掘 西から



7住 完掘 西から



8住 完掘 西から

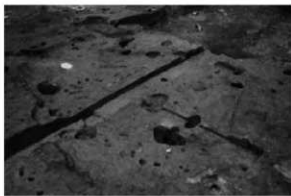


8住 石囲炉完掘 西から

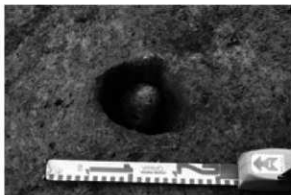
写真 1



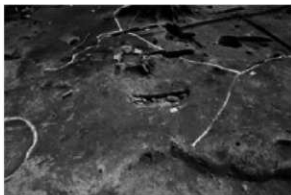
9住 完掘 西から



10住 完掘 南東から



10住 Pit7 遺物出土状況 南から



11住 完掘 西から



11住 確認 南から



13住 完掘 南から



14住 完掘 南から



15住 完掘 東から



17住 石囲炉 東から



17住 完掘 南から



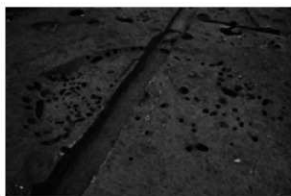
17住 遺物出土状況 南から



18住 完掘 南から



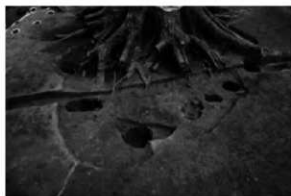
20住 貼床範囲 南から



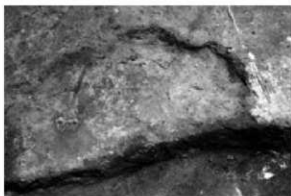
22住 完掘 南東から



23住 完掘 南から



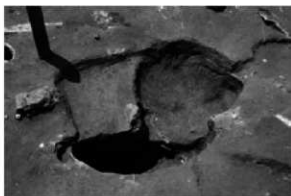
24 住 完掘 西から



70 土 完掘 北から



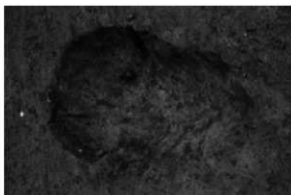
71 土 土層断面 南から



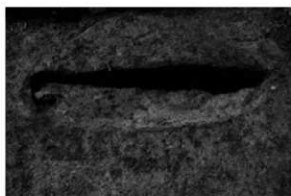
72・73 土 完掘 東から



74 土 完掘 西から



75 土 完掘 西から



76 土 土層断面 北から



77 土 完掘 東から

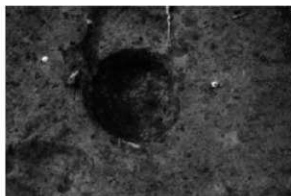
写真4



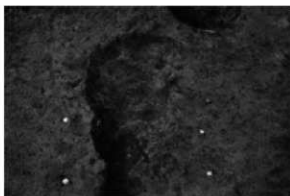
78土 完掘 東から



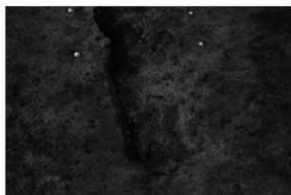
79土 完掘 北から



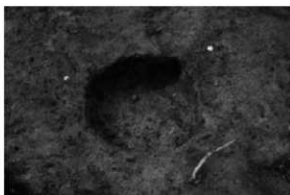
80土 完掘 南から



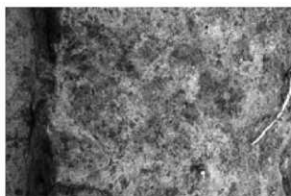
81土 完掘 南から



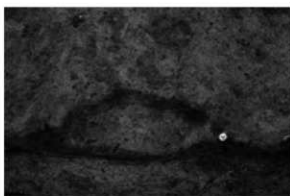
82土 完掘 南から



83土 完掘 南から

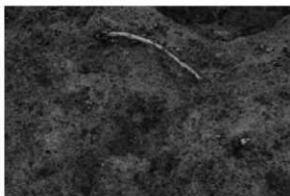


84土 完掘 東から

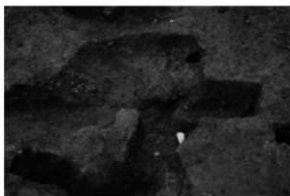


85土 完掘 東から

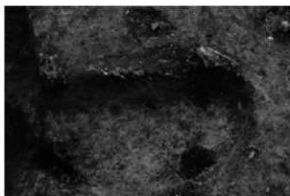
写真5



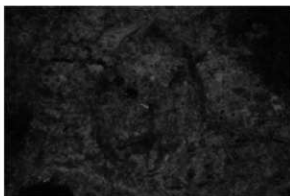
86土 完掘 東から



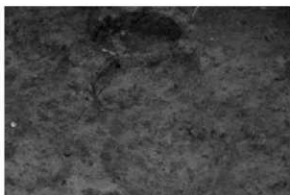
87土 完掘 東から



88土 土層断面 北から



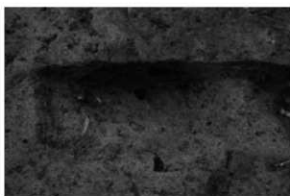
87土 完掘 東から



90・91・92土 完掘 南から



94土 土層断面 北から

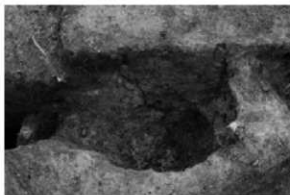


95土 土層断面 北から



96土 完掘 東から

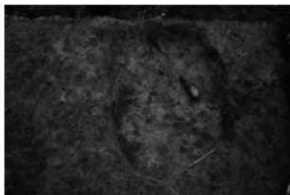
写真6



97土 完掘 西から



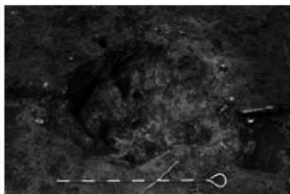
99土 完掘 東から



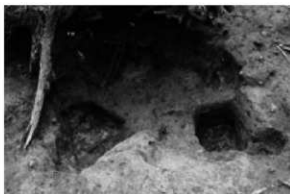
101土 完掘 南から



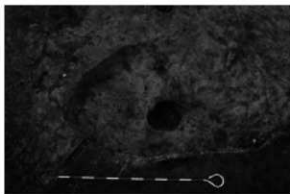
102土 完掘 西から



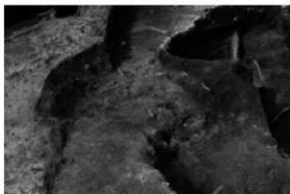
103土 完掘 南から



104土 完掘 西から



105土 完掘 東から

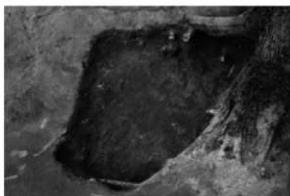


106土 完掘 南から

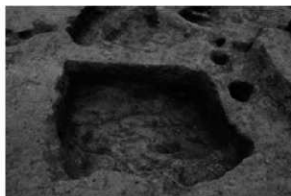
写真7



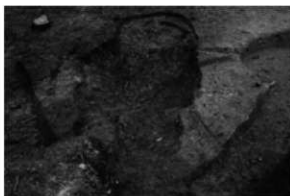
107土 土層断面 南から



108土 完掘 南から



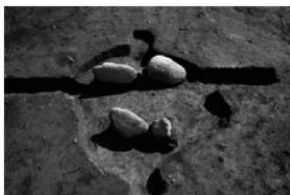
110土 土層断面 東から



111・112土 完掘 北から



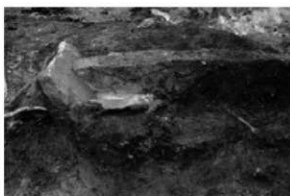
113土 完掘 西から



1石囲炉 完掘 東から

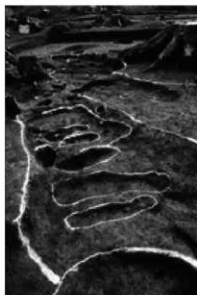


1配石 完掘 南から



1配石 土層断面 南から

写真8



1 道路跡 完掘 南から



1 道路跡柱穴検出状況 南から



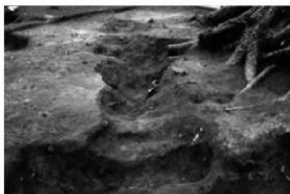
3 道路跡 検出状況 南から



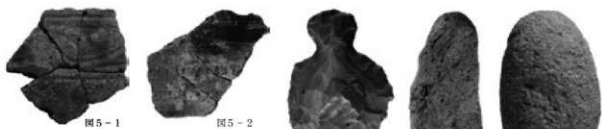
3 道路跡 検出状況 北から



道路跡 完掘 南から



4 道路跡 完掘 東から



第5号住居跡

第6号住居跡



第7号住居跡



第8号住居跡

写真10 遺構内出土遺物(1)

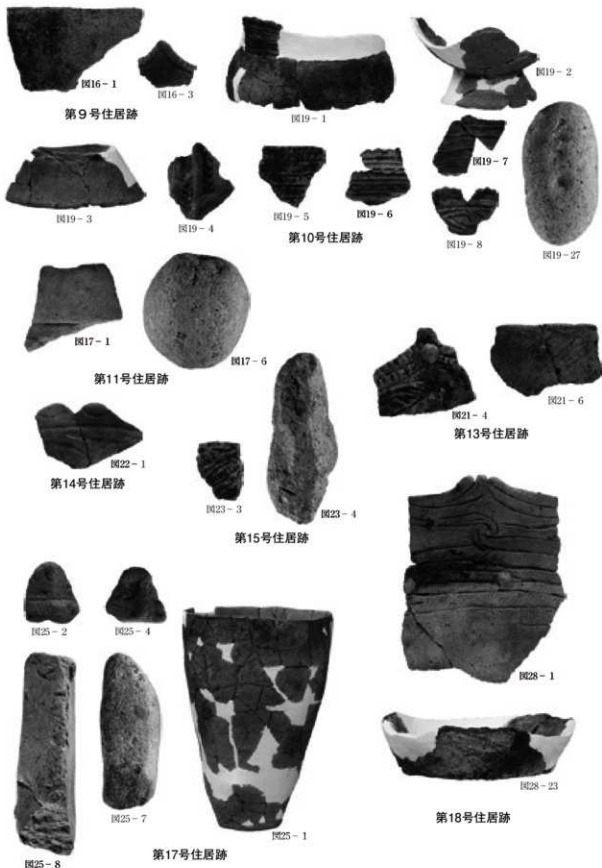


写真11 遺構内出土遺物(2)



写真12 遺構内出土遺物(3)

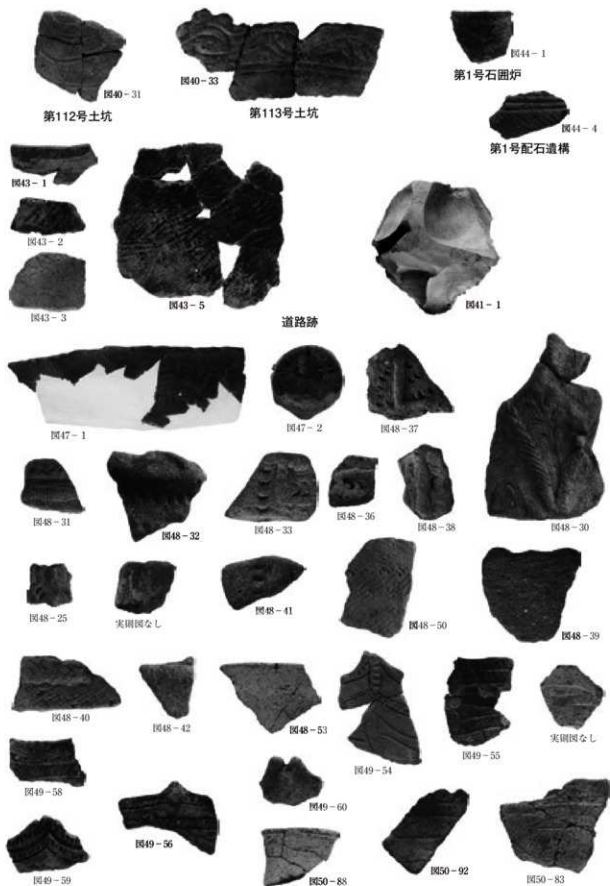


写真13 遺構内・遺構外出土遺物

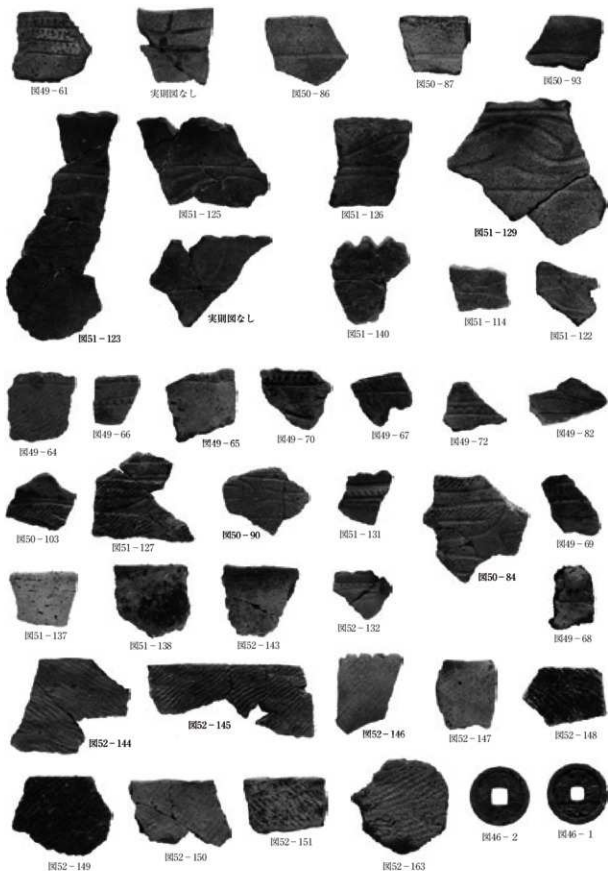


写真14 遺構外出土土器(1)

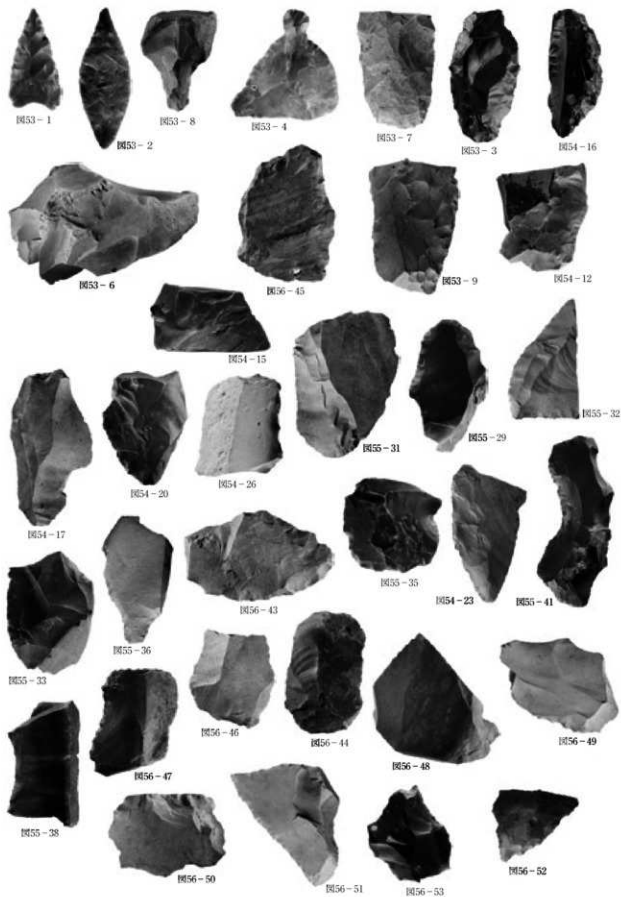


写真15 遺構外出土石器(2)



图57-2



图57-6



图57-3



图57-9



图57-15



图57-5



图57-10



图57-11



图57-7



图57-4



图57-8



图57-14



图57-13



图57-12

写真16 遺構外出土石器(3)

報告書抄録

ふりがな	みずがみいせきに							
書名	水上遺跡Ⅱ							
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第452集							
編著者名	成田滋彦・岩田安之・小幡育恵							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2008年3月25日							
所取遺跡名 <small>(しりがな)</small>	所在地 <small>(しりがな)</small>	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みずがみ 水上	あおもりけんちゅう 青森県中津 がらくんにしや 軽郡西目屋 むらあかあがすなこ 村大字砂子 せあぞみずがみ 瀬子水上	02343	25017	40°	140°	2005 0901 ～ 2005 1020	576	津軽ダム建 設事業に伴 う事前調査
				31′	15′			
				46″	00″			
				世界測地系 (JGD2000)		2006 0509 ～ 2006 0728		
40°	140°							
31′	14′							
56″	48″							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
水上	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 27軒 土坑 46基 配石遺構 4基 道跡 3条 屋外炉 2基		縄文土器 石器			
要約	調査の結果、縄文時代中期と後期後葉～晩期初頭に属する遺構・遺物が確認され、大半の遺構は、後期後葉～晩期初頭のものであると推測される。 住居跡の少なさ、簡易的住居跡の存在、精製土器の不在、不定形石器・微小剥離のある剥片が多いなどの遺構・遺物のあり方から、水上遺跡は小規模で限定的に使用された集落であった可能性が高い。							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第452集

水上遺跡Ⅱ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2008年3月25日
発 行 青森県教育委員会
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702
印 刷 所 長尾印刷株式会社
〒030-0931 青森市平新田字森越17-1
TEL. 017-726-7121 FAX. 017-726-9237
